

平成31/令和元(2019)年度

鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書

山手地ユノ谷上分遺跡
片帆鳴古布曳青会下海山今吉下浜岩山宮大松高大
山林城淹勢田島下味士根木岡温泉段坂手長井原住
市所小第郡所野所根山泉町所吉森竹ノ谷井楠
所立遺坂遣在寺1家在在在在在在在在在在在在
遺遣遣遣遣遣遣遣遣遣遣遣遣遣遣遣遣遣遣遣
跡跡跡跡跡跡跡跡跡跡跡跡跡跡跡跡跡跡跡跡

2020

鳥取市教育委員会

序

この報告書は、開発事業計画に伴い、国庫補助金及び県補助金を受けて、平成28年度から平成30年度に実施した鳥取市内遺跡の試掘調査の記録です。

鳥取市内の平野部や丘陵上には数多くの遺跡が存在しています。これらの遺跡は地域の先人たちの生活を語る歴史資料であり、後世に継承していかなければならぬ市民の貴重な財産です。

近年は、社会の進展に伴って、各種開発事業が計画・実施され、さらに増加する傾向にあります。中でも「鳥取西道路」建設に伴って行われた発掘調査では多くの遺跡から膨大な量の遺物が出土し、地域の歴史を解明するための重要な資料を確認することができました。文化財保護を推し進めている私共といたしましては、こうした開発と文化財の共存を図るべく関係諸機関と協議を重ね、円滑に文化財行政を進めているところです。

この調査にあたっては、鳥取県地域づくり推進部文化財局、鳥取県埋蔵文化財センターをはじめ、関係各位の格別なご指導・ご協力を仰ぎながら、土地所有者や作業員の方々の熱意により、ようやく調査を終了することができました。ここに深く感謝を申し上げる次第であります。

本報告書が私たち郷土の歴史の解明や今後の調査研究の一助となれば幸いです。

令和2年3月

鳥取市教育委員会
教育長 尾室 高志

例　言

1. 本書は平成28年度～平成30年度に国・県補助金を得て、鳥取市教育委員会が実施した発掘調査の記録である。

2. 平成28年度に実施した調査は、山手地ユノ谷上分遺跡である。

3. 平成29年度に実施した調査は、片山林立遺跡、帆城遺跡、鳴滝宮坂遺跡、古市遺跡、布勢所在遺跡、曳田小寺遺跡、青島第1遺跡、会下・郡家遺跡、下味野所在遺跡、海士所在遺跡、山根所在遺跡である。

4. 平成30年度に実施した調査は、山根所在遺跡、今木山所在遺跡、吉岡温泉町所在遺跡、下段所在遺跡、浜坂所在遺跡、岩吉遺跡、山手森谷上分遺跡、宮長竹ヶ鼻遺跡、大井家ノ下モ遺跡、松原谷田遺跡、高住井手添遺跡、大柄遺跡である。

5. 山根所在遺跡のトレンチ番号は平成28年度から通し番号を使用している。

6. 調査時と報告書作成時では遺跡の名称の変更を行っている。変更を行った遺跡は次の通りである。

変更前　山手所在遺跡　　変更後　山手地ユノ谷上分遺跡

変更前　山手所在遺跡　　変更後　山手森谷上分遺跡

変更前　下段所在遺跡　　変更後　下段遺跡

7. 本書における遺構図はすべて磁北を示し、レベルは基本的に海拔標高である。

8. 発掘調査によって作成された記録類及び出土遺物は鳥取市教育委員会に保管されている。

9. 発掘調査の体制は以下のとおりである。

調査主体　鳥取市教育委員会

事務局　　鳥取市教育委員会事務局文化財課

調査担当　坂田邦彦　山田真宏　谷口恭子　神谷伊鈴　横山聖

10. 発掘調査から本書の作成にあたっては、多くの方々からご指導・ご助言並びにご協力をいただいた。明記して深謝いたします。（敬称略、順不同）

鳥取県埋蔵文化財センター、鳥取県教育委員会事務局文化財課、鳥取県地域づくり推進部文化財局

本文目次

序	36
例言	39
第1章 発掘調査の経緯と経過	1
第2章 調査の結果	3
第1節 山手地ユノ谷上分遺跡	3
第2節 片山林立遺跡	8
第3節 帆城遺跡	10
第4節 鳴滝宮坂遺跡	12
第5節 古市遺跡	13
第6節 布勢所在遺跡	15
第7節 叟田小寺遺跡	18
第8節 青島第1遺跡	20
第9節 会下・郡家遺跡	22
第10節 下味野所在遺跡	32
第11節 海士所在遺跡	36
第12節 山根所在遺跡	39
第13節 今木山所在遺跡	49
第14節 吉岡温泉町所在遺跡	52
第15節 下段遺跡	54
第16節 浜坂所在遺跡	59
第17節 岩吉遺跡	61
第18節 山手森谷上分遺跡	64
第19節 宮長竹ヶ鼻遺跡	68
第20節 大井家ノ下モ遺跡	73
第21節 松原谷田遺跡	76
第22節 高住井手添遺跡	78
第23節 大柄遺跡	80

挿図目次

第1図 調査遺跡位置図	2
第2図 山手地ユノ谷上分遺跡 調査トレンチ位置図	3
第3図 山手地ユノ谷上分遺跡 第1トレンチ実測図	3
第4図 山手地ユノ谷上分遺跡 第2トレンチ実測図	4
第5図 山手地ユノ谷上分遺跡 第3トレンチ実測図	4
第6図 山手地ユノ谷上分遺跡 第4トレンチ実測図	4
第7図 山手地ユノ谷上分遺跡 第5トレンチ実測図	5
第8図 山手地ユノ谷上分遺跡 第6トレンチ実測図	5
第9図 山手地ユノ谷上分遺跡 第7トレンチ実測図	6
第10図 山手地ユノ谷上分遺跡 第8トレンチ実測図	6
第11図 山手地ユノ谷上分遺跡 出土遺物実測図	6
第12図 片山林立遺跡 調査トレンチ位置図	8
第13図 片山林立遺跡 第1トレンチ実測図	9
第14図 帆城遺跡 調査トレンチ位置図	10
第15図 帆城遺跡 第1トレンチ実測図	11
第16図 帆城遺跡 出土遺物実測図	11
第17図 鳴滝宮坂遺跡 調査トレンチ位置図	12
第18図 鳴滝宮坂遺跡 第1トレンチ実測図	12
第19図 古市遺跡 調査トレンチ位置図	13
第20図 古市遺跡 第1トレンチ実測図	14
第21図 布勢所在遺跡 調査トレンチ位置図	15
第22図 布勢所在遺跡 第1トレンチ実測図	16
第23図 布勢所在遺跡 第2トレンチ実測図	17
第24図 布勢所在遺跡 第1トレンチ出土遺物実測図	17
第25図 叟田小寺遺跡 調査トレンチ位置図	18
第26図 叟田小寺遺跡 第13トレンチ実測図	19
第27図 叟田小寺遺跡 第14トレンチ実測図	19
第28図 青島第1遺跡 調査トレンチ位置図	20
第29図 青島第1遺跡 第1トレンチ実測図	21
第30図 会下・郡家遺跡 調査トレンチ位置図	22
第31図 会下・郡家遺跡 A-B区平面実測図	23-24
第32図 会下・郡家遺跡 A区壁断面実測図	26
第33図 会下・郡家遺跡 B区壁断面及びA区横断面実測図	27

第34図	会下・郡家遺跡 A・B区検出遺構(SB01、SK08・09、SD01)実測図	28
第35図	会下・郡家遺跡 C区実測図	29
第36図	会下・郡家遺跡 第1トレンチ実測図	31
第37図	会下・郡家遺跡 第2トレンチ実測図	31
第38図	下味野所在遺跡 調査トレンチ位置図	32
第39図	下味野所在遺跡 第1トレンチ実測図	33
第40図	下味野所在遺跡 第2トレンチ実測図	34
第41図	下味野所在遺跡 第3トレンチ実測図	35
第42図	下味野所在遺跡 出土遺物実測図	35
第43図	海士所在遺跡 調査トレンチ位置図	36
第44図	海士所在遺跡 第1トレンチおよびP01・P02実測図	37
第45図	海士所在遺跡 出土遺物実測図	38
第46図	山根所在遺跡 調査トレンチ位置図	39
第47図	山根所在遺跡 第1トレンチ実測図	40
第48図	山根所在遺跡 第2トレンチ実測図	41
第49図	山根所在遺跡 第3トレンチ実測図	41
第50図	山根所在遺跡 第4トレンチ実測図	43
第51図	山根所在遺跡 第5トレンチ実測図	43
第52図	山根所在遺跡 第6トレンチ実測図	44
第53図	山根所在遺跡 第7トレンチ実測図	45
第54図	山根所在遺跡 第8トレンチ実測図	45
第55図	山根所在遺跡 第9トレンチ実測図	46
第56図	山根所在遺跡 出土遺物実測図	47
第57図	山根所在遺跡 出土遺物実測図	48
第58図	今木山所在遺跡 調査トレンチ位置図	49
第59図	今木山所在遺跡 第1トレンチ実測図	50
第60図	今木山所在遺跡 第2トレンチ実測図	51
第61図	吉岡温泉町所在遺跡 調査トレンチ位置図	52
第62図	吉岡温泉町所在遺跡 第1トレンチ実測図	53
第63図	吉岡温泉町所在遺跡 第2トレンチ実測図	53
第64図	下段遺跡 調査トレンチ位置図	54
第65図	下段遺跡 第1トレンチ実測図	55
第66図	下段遺跡 第2トレンチ実測図	55
第67図	下段遺跡 第3トレンチ実測図	56
第68図	下段遺跡 第4トレンチ実測図	56
第69図	下段遺跡 第5トレンチ実測図	57
第70図	下段遺跡 出土遺物実測図	58
第71図	浜坂所在遺跡 調査トレンチ位置図	59
第72図	浜坂所在遺跡 第1トレンチ実測図	60
第73図	浜坂所在遺跡 第2トレンチ実測図	60
第74図	岩吉遺跡 調査トレンチ位置図	61
第75図	岩吉遺跡 第1トレンチ実測図	62
第76図	岩吉遺跡 出土遺物実測図	63
第77図	山手森谷上分遺跡 調査トレンチ位置図	64
第78図	山手森谷上分遺跡 第1トレンチ実測図	65
第79図	山手森谷上分遺跡 第2トレンチ実測図	65
第80図	山手森谷上分遺跡 第3トレンチ実測図	67
第81図	山手森谷上分遺跡 第4トレンチ実測図	67
第82図	山手森谷上分遺跡 出土遺物実測図	67
第83図	宮長竹ヶ鼻遺跡 調査トレンチ位置図	68
第84図	宮長竹ヶ鼻遺跡 第5トレンチ実測図	69
第85図	宮長竹ヶ鼻遺跡 第6トレンチ実測図	70
第86図	宮長竹ヶ鼻遺跡 第7トレンチ実測図	70
第87図	宮長竹ヶ鼻遺跡 出土遺物実測図	72
第88図	大井家ノ下モ遺跡 調査トレンチ位置図	73
第89図	大井家ノ下モ遺跡 第1トレンチ実測図	74
第90図	大井家ノ下モ遺跡 出土遺物実測図	75
第91図	松原谷田遺跡 調査トレンチ位置図	76
第92図	松原谷田遺跡 第1トレンチ実測図	77
第93図	高住井手添遺跡 調査トレンチ位置図	78
第94図	高住井手添遺跡 第1トレンチ実測図	79
第95図	高住井手添遺跡 出土遺物実測図	79
第96図	大柄遺跡 調査トレンチ位置図	80
第97図	大柄遺跡 第1トレンチ実測図	81
第98図	大柄遺跡 第2トレンチ実測図	82

図版目次

図版1

- 山手地ユノ谷上分遺跡 調査地遠景(北から)
山手地ユノ谷上分遺跡 第1トレンチ完掘状況
(東から)
山手地ユノ谷上分遺跡 第1トレンチSK平面
(北から)
山手地ユノ谷上分遺跡 第2トレンチ完掘状況
(東から)
山手地ユノ谷上分遺跡 第2トレンチ北断面
(南から)
山手地ユノ谷上分遺跡 第3トレンチ完掘状況
(東から)
山手地ユノ谷上分遺跡 第3トレンチ北断面
(南から)
山手地ユノ谷上分遺跡 第4トレンチ完掘状況
(東から)

図版2

- 山手地ユノ谷上分遺跡 第4トレンチ完掘状況
(東から)
山手地ユノ谷上分遺跡 第5トレンチ完掘状況
(南から)
山手地ユノ谷上分遺跡 第5トレンチ北断面
(南から)
山手地ユノ谷上分遺跡 第6トレンチ完掘状況
(南から)
山手地ユノ谷上分遺跡 第6トレンチ西断面
(東から)
山手地ユノ谷上分遺跡 第7トレンチ完掘状況
(北から)
山手地ユノ谷上分遺跡 第7トレンチP01平面
(北から)
山手地ユノ谷上分遺跡 第7トレンチP02断面
(西から)

図版3

- 山手地ユノ谷上分遺跡 第7トレンチSK01断面
(西から)
山手地ユノ谷上分遺跡 第7トレンチSK02断面
(西から)
山手地ユノ谷上分遺跡 第7トレンチ東断面

(西から)

- 山手地ユノ谷上分遺跡 第8トレンチ完掘状況
(西から)
山手地ユノ谷上分遺跡 第8トレンチ西断面
(東から)

片山林立遺跡 第1トレンチ調査地遠景(北西から)

片山林立遺跡 第1トレンチ完掘状況(南から)

片山林立遺跡 第1トレンチ西壁断面(南東から)

図版4

- 帆城遺跡 第1トレンチ調査地遠景(西から)
帆城遺跡 第1トレンチ第1遺構面(東から)
帆城遺跡 第1トレンチ第2遺構面(東から)
帆城遺跡 第1トレンチ土層断面(南東から)
鳴滝宮坂遺跡 調査地遠景(南東から)
鳴滝宮坂遺跡 第1トレンチ完掘状況(西から)
鳴滝宮坂遺跡 第1トレンチ土層断面(南西から)
古市遺跡 調査地遠景(北東から)

図版5

- 古市遺跡 第1トレンチ完掘状況(東から)
古市遺跡 第1トレンチ南壁断面(北東から)
布勢所在遺跡 第1トレンチ調査地遠景(北西から)
布勢所在遺跡 第1トレンチ完掘状況(北から)
布勢所在遺跡 第1トレンチ第1遺構面掘下げ状況(北から)
布勢所在遺跡 第1トレンチ土層断面(北東から)
布勢所在遺跡 第2トレンチ調査地遠景(北西から)
布勢所在遺跡 第2トレンチ完掘状況(北東から)

図版6

- 布勢所在遺跡 第2トレンチ断面前(南東から)
曳田小寺遺跡 第13トレンチ調査前(東から)
曳田小寺遺跡 第13トレンチ完掘状況(東から)
曳田小寺遺跡 第13トレンチ土層断面(南東から)
曳田小寺遺跡 第14トレンチ調査前(西から)
曳田小寺遺跡 第14トレンチ完掘状況(西から)
曳田小寺遺跡 第14トレンチ完掘状況(南から)
曳田小寺遺跡 第14トレンチ土層断面(西から)

図版7

青島第1遺跡 調査前(北から)

青島第1遺跡 第1トレンチ(北から)

青島第1遺跡 第1トレンチ南断面(北西から)
会下・郡家遺跡 A・B区調査地遠景(東から)
会下・郡家遺跡 A・B区調査地遠景(北西から)
会下・郡家遺跡 A・B区調査地遠景(北から)
会下・郡家遺跡 A区客土除去面遺構掘下げ状況
(東から)
会下・郡家遺跡 A区客土除去面遺構掘下げ状況
(西から)

図版8

会下・郡家遺跡 A区第2面完掘状況(東から)
会下・郡家遺跡 A区南壁断面(北東から)
会下・郡家遺跡 A区SD01(北から)
会下・郡家遺跡 A区南壁断面(北西から)
会下・郡家遺跡 A区SK08(東から)
会下・郡家遺跡 B区客土除去面遺構検出状況
(南西から)
会下・郡家遺跡 B区完掘状況(南から)
会下・郡家遺跡 B区西壁断面(南から)

図版9

会下・郡家遺跡 B区SK09(IHSD02:南から)
会下・郡家遺跡 B区SB01(北から)
会下・郡家遺跡 C区調査前(東から)
会下・郡家遺跡 C区トレンチ完掘状況(西から)
会下・郡家遺跡 C区トレンチ完掘状況(北から)
会下・郡家遺跡 C区トレンチ南壁断面(北西から)
会下・郡家遺跡 平成30年度調査地近景
(南南東から)
会下・郡家遺跡 平成30年度第1トレンチ完掘状況
(南西から)

図版10

会下・郡家遺跡 平成30年度第1トレンチ完掘状況
(北西から)
会下・郡家遺跡 平成30年度第2トレンチ完掘状況
(北西から)
会下・郡家遺跡 平成30年度第2トレンチ南西壁断面
(北北西から)
会下・郡家遺跡 平成30年度第2トレンチ遺物出土
状況(北東から)
下味野所在遺跡 調査地中遠景
(第1トレンチ付近:南から)
下味野所在遺跡 調査地中遠景
(第3トレンチ付近:北から)

下味野所在遺跡 第1トレンチ完掘状況(西から)
下味野所在遺跡 第1トレンチ床土直下層遺物出
土状況(北から)

図版11

下味野所在遺跡 第1トレンチ西壁断面(北東から)
下味野所在遺跡 第1トレンチ南壁断面(修正後)
(北東から)
下味野所在遺跡 第1トレンチ内ピット状遺構断
面(西から)
下味野所在遺跡 第2トレンチ完掘状況(西から)
下味野所在遺跡 第2トレンチ完掘状況(南から)
下味野所在遺跡 第2トレンチ北壁断面(南東から)
下味野所在遺跡 第2トレンチ東壁断面(北西から)
下味野所在遺跡 第2トレンチ北壁断面(東端)
(南から)

図版12

下味野所在遺跡 第3トレンチ第1面下掘下げ状
況(東から)
下味野所在遺跡 第3トレンチ完掘状況(西から)
下味野所在遺跡 第3トレンチ南壁断面(北から)
下味野所在遺跡 第3トレンチ北壁断面
(南西から)
下味野所在遺跡 第3トレンチ西壁断面(東から)
海士所在遺跡 調査前(南東から)
海士所在遺跡 完掘状況(西から)
海士所在遺跡 完掘状況(東から)

図版13

海士所在遺跡 堀下げ後・北壁断面(南から)
海士所在遺跡 P02-01断面(南から)
海士所在遺跡 P02-01堀下げ状況(南から)
海士所在遺跡 P02-01完掘状況(南から)
山根所在遺跡 調査地遠景(南から)
山根所在遺跡 第1トレンチ完掘状況(東から)
山根所在遺跡 第1トレンチ断面(西から)
山根所在遺跡 第2トレンチ完掘状況(東から)

図版14

山根所在遺跡 第2トレンチ断面(南から)
山根所在遺跡 第3トレンチ完掘状況(東から)
山根所在遺跡 第3トレンチ断面(南から)
山根所在遺跡 第4トレンチ完掘状況(東から)
山根所在遺跡 第4トレンチ断面(北から)
山根所在遺跡 第5トレンチ完掘状況(北から)

山根所在遺跡 第5トレンチ断面(東から)
山根所在遺跡 第6トレンチ完掘状況(北から)

図版15

山根所在遺跡 第6トレンチ断面(東から)
山根所在遺跡 第7トレンチ完掘状況(西から)
山根所在遺跡 第7トレンチ完掘状況(北から)
山根所在遺跡 第8トレンチ完掘状況(北から)
山根所在遺跡 第8トレンチ断面(南から)
山根所在遺跡 第9トレンチ調査地伐闇後近景
(北から)
山根所在遺跡 第9トレンチSD01及び石垣検出
状況(東から)

山根所在遺跡 第9トレンチSD01断面(北から)

図版16

山根所在遺跡 第9トレンチ完掘状況(北から)
山根所在遺跡 第9トレンチ完掘状況(西から)
山根所在遺跡 第9トレンチ西壁断面(東から)
今木山所在遺跡 調査地周辺(今木山)(北から)
今木山所在遺跡 調査地遠景(北から)

今木山所在遺跡 調査地近景(東から)

今木山所在遺跡 第1トレンチ完掘状況(南から)
今木山所在遺跡 第1トレンチ南壁断面(北から)

図版17

今木山所在遺跡 第1トレンチSD01掘下げ状況
(南から)
今木山所在遺跡 第2トレンチ完掘状況(北から)
今木山所在遺跡 第2トレンチ完掘状況(東から)
吉岡温泉町所在遺跡 調査地遠景(北から)
吉岡温泉町所在遺跡 第1トレンチ完掘状況
(北から)

吉岡温泉町所在遺跡 第1トレンチ断面(北から)
吉岡温泉町所在遺跡 第2トレンチ完掘状況
(南から)

吉岡温泉町所在遺跡 第2トレンチ断面(南から)

図版18

下段遺跡 調査地遠景(北から)
下段遺跡 第1トレンチ完掘状況(東から)
下段遺跡 第1トレンチ断面(南から)
下段遺跡 第1トレンチ断面西側(南から)
下段遺跡 第1トレンチ断面(東から)
下段遺跡 第1トレンチSD平面(南から)
下段遺跡 第1トレンチSD断面(東から)

下段遺跡 第2トレンチ完掘状況(西から)

図版19

下段遺跡 第2トレンチ断面(南東から)
下段遺跡 第2トレンチP01断面(東から)
下段遺跡 第2トレンチSK01断面(東から)
下段遺跡 第2トレンチP02断面(東から)
下段遺跡 第3トレンチ完掘状況(東から)
下段遺跡 第3トレンチ断面(南東から)
下段遺跡 第3トレンチP01断面(北から)
下段遺跡 第3トレンチP02断面(北から)

図版20

下段遺跡 第3トレンチP03断面(北から)
下段遺跡 第4トレンチ完掘状況(西から)
下段遺跡 第4トレンチ断面(北東から)
下段遺跡 第5トレンチ完掘状況(東から)
下段遺跡 第5トレンチ断面(北東から)
下段遺跡 第5トレンチSK01断面(北から)
下段遺跡 第5トレンチSK02断面(北から)
浜坂所在遺跡 調査地遠景(南から)

図版21

浜坂所在遺跡 第1トレンチ完掘状況(南から)
浜坂所在遺跡 第1トレンチ重機SD断面(西から)
浜坂所在遺跡 第1トレンチ重機断面(北から)
浜坂所在遺跡 第1トレンチ断面(北から)
浜坂所在遺跡 第2トレンチ完掘状況(南から)
浜坂所在遺跡 第2トレンチ断面(西から)
岩吉遺跡 調査前(南から)
岩吉遺跡 第1トレンチ完掘状況(西から)

図版22

岩吉遺跡 第1トレンチ西壁断面(東から)
岩吉遺跡 第1トレンチ南壁断面(北西から)
山手森谷上分遺跡 調査地遠景(西から)
山手森谷上分遺跡 第1トレンチ完掘状況(東から)
山手森谷上分遺跡 第1トレンチ断面(北東から)
山手森谷上分遺跡 第1トレンチSK01(南から)
山手森谷上分遺跡 第2トレンチ完掘状況(北から)
山手森谷上分遺跡 第2トレンチ断面(西から)

図版23

山手森谷上分遺跡 第2トレンチP01断面(北から)
山手森谷上分遺跡 第2トレンチP02断面(南から)
山手森谷上分遺跡 第2トレンチSD01平面
(東から)

山手森谷上分遺跡 第2トレンチSD01出土遺物
(東から)

山手森谷上分遺跡 第2トレンチSD02平面
(北から)

山手森谷上分遺跡 第2トレンチ焼土範囲(西から)

山手森谷上分遺跡 第3トレンチ完掘状況(南から)

山手森谷上分遺跡 第3トレンチ断面(東南から)

図版24

山手森谷上分遺跡 第4トレンチ完掘状況(南から)

山手森谷上分遺跡 第4トレンチ断面(東から)

宮長竹ヶ鼻遺跡 調査地遠景(北から)

宮長竹ヶ鼻遺跡 第5トレンチ掘下げ状況(西から)

宮長竹ヶ鼻遺跡 第5トレンチ北壁断面(南東から)

宮長竹ヶ鼻遺跡 第6トレンチ完掘状況(北から)

宮長竹ヶ鼻遺跡 第6トレンチ完掘状況(東から)

宮長竹ヶ鼻遺跡 第6トレンチ第5層上面検出

P01断面(北から)

図版25

宮長竹ヶ鼻遺跡 第7トレンチ掘下げ状況
(北東から)

宮長竹ヶ鼻遺跡 第7トレンチ第1面SD01掘削
後(北西から)

大井家ノ下モ遺跡 調査地遠景(東から)

大井家ノ下モ遺跡 第6層上面遺構検出状況
(西から)

大井家ノ下モ遺跡 SK01検出状況(北から)

大井家ノ下モ遺跡 SK02検出状況(北から)

大井家ノ下モ遺跡 P01断面(西から)

大井家ノ下モ遺跡 P02断面(西から)

図版26

大井家ノ下モ遺跡 第1トレンチ掘下げ状況
(西から)

大井家ノ下モ遺跡 第1トレンチ北壁断面
(南西から)

松原谷田遺跡 調査地周辺開闢後(北東から)

松原谷田遺跡 第1トレンチ北西壁断面
(南東から)

松原谷田遺跡 第1トレンチ掘下げ状況
(南西から)

高住井手添遺跡 調査地遠景(北西から)

高住井手添遺跡 第1トレンチ出土状況(南から)

高住井手添遺跡 第1トレンチ断面(南西から)

図版27

高住井手添遺跡 第1トレンチ調査後(西から)

大柄遺跡 第2トレンチ(南西から)

大柄遺跡 第1トレンチ第3面杭列検出状況
(西から)

大柄遺跡 第1トレンチ北壁断面(南東から)

大柄遺跡 第2トレンチ掘下げ状況(東から)

大柄遺跡 第2トレンチ掘下げ状況(南から)

山手地ユノ谷上分遺跡 出土遺物

帆城遺跡 出土遺物1

図版28

帆城遺跡 出土遺物2

布勢所在遺跡 出土遺物1

布勢所在遺跡 出土遺物2

下味野所在遺跡 出土遺物

海士所在遺跡 出土遺物

山根所在遺跡(第2トレンチ) 出土遺物1

図版29

山根所在遺跡(第2トレンチ) 出土遺物2

山根所在遺跡(第5トレンチ) 出土遺物

山根所在遺跡(第7トレンチ) 出土遺物

下段遺跡(第1トレンチ) 出土遺物1

下段遺跡(第1トレンチ) 出土遺物2

下段遺跡(第3トレンチ) 出土遺物

岩吉遺跡 出土遺物

図版30

山手森谷上分遺跡(第1トレンチ) 出土遺物

山手森谷上分遺跡(第2トレンチ) 出土遺物

宮長竹ヶ鼻遺跡 出土遺物

大井家ノ下モ遺跡 出土遺物1

大井家ノ下モ遺跡 出土遺物2

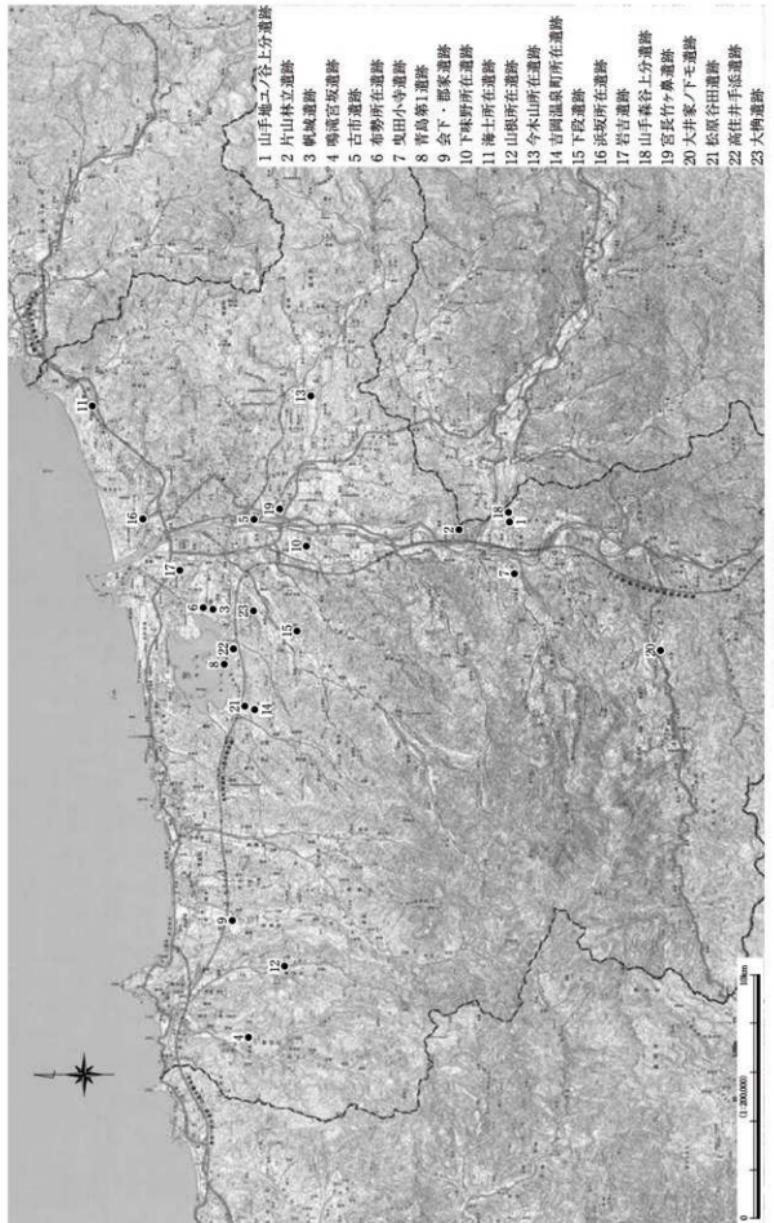
高住井手添遺跡 出土遺物

第1章 発掘調査の経緯と経過

鳥取市は、平成16年(2004)11月に周辺8町村と合併を行い、面積765.31km²、人口約20万人を擁する山陰地方最大級の都市となり、平成30年4月からは中核市へ移行し、さらなる飛躍を遂げている。平成16年(2004)の合併では遺跡を数多く有する国府町や青谷町などと合併したことから、その数を増し、古墳、集落跡、散布地等あわせて4,900か所以上になっている。このような中、市内の道路事業では一般国道9号鳥取西道路改築事業が行われ、市内でも有数の遺跡密集地である湖山池南岸から青谷にかけて建設が進められた。道路建設に伴って高住牛輪谷遺跡、良田平田遺跡、常松音田遺跡、下坂本清合遺跡、青谷横木遺跡など新たな遺跡の発見が相次ぎ、特に青谷横木遺跡では古代山陰道や全国有数の木製祭祀具、高松塚古墳の壁画に次ぐ女子群像が描かれた板絵など特筆すべき遺物が多数出土している。

今回の報告書は平成28年度～平成30年度に実施した試掘調査で未報告となっている遺跡の記録である。平成28年度(2016)は可燃物処理施設建設計画に伴って実施した山手地ユノ谷上分遺跡である。平成29年度(2017)は鉄塔建設計画に伴って実施した片山林立遺跡、下味野所在遺跡、個人住宅建設に伴って実施した帆城遺跡、布勢所在遺跡、個人開発に伴って実施した会下・郡家遺跡、海上所在遺跡、風力発電計画に伴って実施した鳴滝宮坂遺跡、農業関連事業に伴って実施した会下・郡家遺跡、山根所在遺跡、遊具設置に伴って実施した青島第1遺跡の10遺跡である。平成30年度(2018)は農業関連事業に伴って実施した山根所在遺跡、水道関連事業に伴って実施した今木山所在遺跡、道路関連事業に伴って実施した吉岡温泉町所在遺跡、曳田小寺遺跡、大井家ノ下モ遺跡、大柄遺跡、鉄塔建設計画に伴って実施した松原谷田遺跡、高住井手添遺跡、宅地造成に伴って実施した岩吉遺跡、宮長竹ヶ鼻遺跡、学校建設に伴って実施した浜坂所在遺跡、砂防関連事業に伴って実施した下段遺跡、グラウンド造成に伴い実施した山手森谷上分遺跡の13遺跡である。なお、山根所在遺跡は、平成29年度(2017)及び平成30年度(2018)の2か年にわたり実施しており、トレンチ番号は通し番号を使用した。曳田小寺遺跡は平成26年度(2014)から試掘調査を実施しており、同一事業の調査であることから通し番号を使用している。

試掘調査はトレンチ掘削による遺構・遺物の包含状況の確認に主眼を置いて実施し、層ごとの遺構確認と包含遺物の把握を行なながら掘り下げを行った。トレンチの掘削は基本的に人力によって実施したが、会下・郡家遺跡、浜坂所在遺跡は重機を用いて表土除去を行い、その後人力による掘り下げを行った。整理作業は基本的には調査終了後から行い、本格的な報告書作成は令和元年(2019)12月から実施した。本報告の調査面積は864.2m²である。



第1図 調査遺跡位置図

第2章 調査の結果

第1節 山手地ユノ谷上分遺跡

調査期間 平成29年(2017)3月9~27日

山手地ユノ谷上分遺跡は、鳥取市河原町山手及び郷原地内に所在し、鳥取県の三大河川のひとつである千代川の右岸、山手集落から南西約400mの丘陵及び丘陵裾部及び谷部に位置している。周辺の丘陵上には、山手古墳群や郷原古墳群、高福古墳群などが展開し、微高地には中世の集落遺跡として知られる前田遺跡や単弁7葉蓮華文軒丸瓦が出土した郷原遺跡などが所在している。また、平成29年度と平成30年度に山手地ユノ谷上分遺跡の発掘調査が行われ、堅穴建物跡や古墳などを検出している。

今回の発掘調査は、新可燃物処理施設整備事業に伴うもので、整備計画地内8ヶ所に試掘トレーンチを設定し確認調査を行った。



第2図 山手地ユノ谷上分遺跡 調査トレーンチ位置図

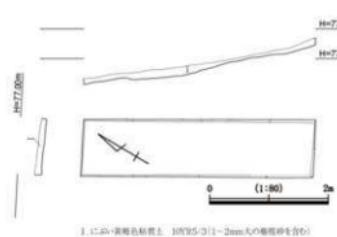
第1トレーンチ(Tr 1)[第3図 図版1]

第1トレーンチは、東丘陵から舌状に突出した支丘陵上の標高約80mの地点、丘陵に対して平行方向に3.6×12mの試掘トレーンチを設定した。この地点は平成14年度に河原町教育委員会による試掘調査が行われている。この調査によって土坑を検出しているが、更に詳細な状況確認を行うためにこの試掘調査トレーンチを取り込んで調査を行った。

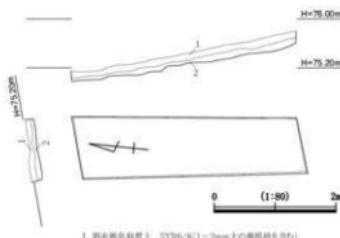
基本的な土層の層序は、地表面直下10~20cmが表土(第1層)で、第2層は褐色粘質土で1~2mmの極粗砂を含んでいた。傾斜した地形に沿って、斜面上位から堆積した状況で、遺物は出土しな



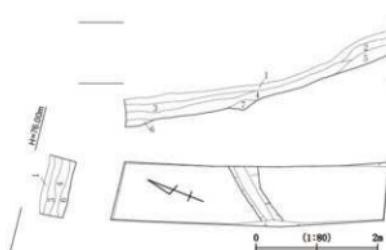
第3図 山手地ユノ谷上分遺跡 第1トレーンチ実測図



第4図 山手地ユノ谷上分遺跡 第2トレーニチ実測図



第5図 山手地ユノ谷上分遺跡 第3トレーニチ実測図



第6図 山手地ユノ谷上分遺跡 第4トレーニチ実測図

かった。土坑は試掘調査トレーニチの中央やや東寄りで確認した。土坑はほぼ完掘状態で、規模は長軸96cm、短軸70cm、深さは30cmを測る。埋土は側面の残土から褐色粘質土であったと想定した。なお、土坑から遺物は出土しなかった。

第2トレーニチ(Tr 2)[第4図 図版1]

第2トレーニチは、第1トレーニチから北側の谷を1つ挟んだ地点、丘陵から舌状に突出した支丘陵上の標高約77mの地点、丘陵に対して平行方向に3.9×1.0mの試掘トレーニチを設定した。

基本的な土層の層序は、地表面直下10~20cmの表土(第1層)のみであった。傾斜した地形に沿って斜面上位から堆積した状況で、人の生活痕を示す遺構や遺物は確認することができなかった。

第3トレーニチ(Tr 3)[第5図 図版1]

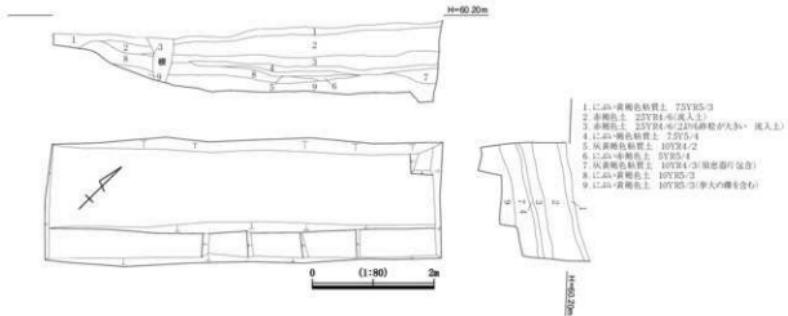
第3トレーニチは、第2トレーニチと同じ舌状に突出した支丘陵上、標高約75.5mの地点に丘陵に対して平行方向に3.7×1.0mの試掘トレーニチを設定した。

基本的な土層の層序は、10cm程度が表土(第1層)で、第2層は3~5mmの細礫を含んでいた。傾斜した地形に沿って斜面上位から堆積した状況で、人の生活痕を示す遺構や遺物は確認することができなかつた。

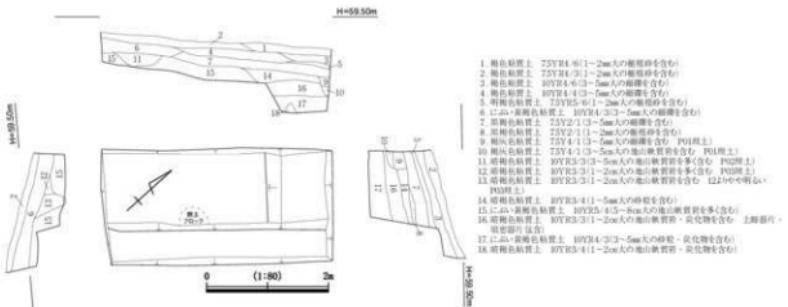
第4トレーニチ(Tr 4)[第6図 図版1・2]

第4トレーニチは、第2と第3トレーニチと同じ舌状に突出した支丘陵上、標高約76mの地点に丘陵に対して平行方向に4.3×1.0mの試掘トレーニチを設定した。

基本的な土層の層序は、地表面直下10~20cmが表土(第1層)であった。第2層は明赤褐色、第3層は赤褐色の粘質土で、混入量は異なるが1~2mmの極粗砂を含んでいた。以下も傾斜した地形に沿って、



第7図 山手地ユノ谷上分遺跡 第5トレチ実測図



第8図 山手地ユノ谷上分遺跡 第6トレチ実測図

斜面上位から堆積した状況がみられた。第7層のにぶい黄褐色粘質土は、非常にしまりが弱く後世に利用された溝と考えられる。なお、遺物は出土しなかった。

第5トレチ(Tr 5)(第7・11図 図版2)

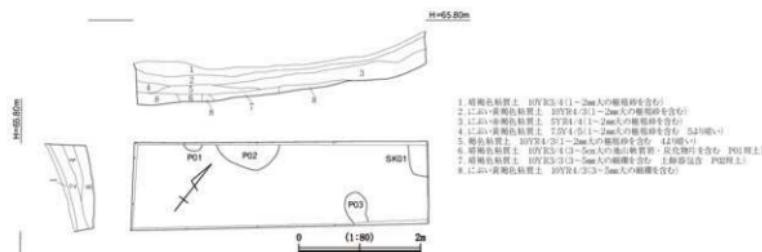
第5トレチは、第1トレチを設定した丘陵上の北側、谷部の標高約60mの地点、谷地形に対して垂直方向に1.9×6.4mの試掘トレチを設定した。

基本的な土層の層序は、地表面直下10cmが表土(第1層)で、第2層と第3層は赤褐色土の流入土を確認した。以下も傾斜した地形に沿って、斜面上位から堆積した状況が続く。第7層の灰黄褐色粘質土から須恵器が出土した。出土遺物のうち、(1)を図化した。(1)は須恵器の杯身で、受部は外方にわずかにつまみ出され、立ち上がりは短くわずかに内傾し端部は丸くなる。なお、精査したが遺構は確認することができなかつた。

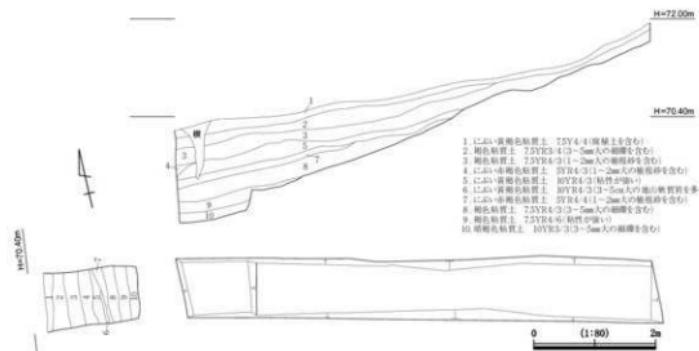
第6トレチ(Tr 6)(第8・11図 図版2)

第6トレチは、第2と第3、第4トレチを設定した丘陵上の北側、谷部の標高約58mの地点、谷地形に対して垂直方向に3.8×18mの試掘トレチを設定した。

基本的な土層の層序は、地表面直下10~20cmが表土(第1層・第2層)で、第2層から土師器が出土した。第3層と第4層は褐色粘質土で3~5mmの細縫を含み、第3層から土師器が出土した。以下も斜面上位から堆積した状況が続き、第6層のにぶい黄褐色粘質土から土師器、第7層の黒褐色粘質土から土



第9図 山手地ユノ谷上分遺跡 第7トレチ実測図



第10図 山手地ユノ谷上分遺跡 第8トレチ実測図



第11図 山手地ユノ谷上分遺跡 出土遺物実測図

師器や須恵器が出土した。また、第6層及び第7層の下面でピット3基を検出した。第14層の暗褐色粘質土から土師器が出土し、第15層のにぶい黄褐色粘質土中で焼土ブロックを確認した。第16層の暗褐色粘質土から土師器と須恵器が出土した。出土遺物のうち、第7層から出土した(2)を図化した。(2)は須恵器の杯身で、受部は外方につまみ出され、立ち上がりは短く僅かに内傾し端部は丸くなる。

第7トレンチ(Tr 7)(第9・11図 図版2・3)

第6トレンチで遺構と遺物を確認したため、斜面上位の状況の確認が必要となった。そのため、第7トレンチは同じ谷部の南側、標高約70mの地点に谷地形に対して、垂直方向の4.8×1.5mの試掘トレンチを設定した。

基本的な土層の層序は、地表面直下10~30cmが表土(第1層)で、第2層はにぶい黄褐色、第3層はにぶい赤褐色の粘質土で1~2mmの極粗砂を含んでいた。以下も傾斜した地形に沿って、斜面上位から堆積した状況が続く。第4層はにぶい黄褐色粘質土で、土師器と須恵器が出土した。また、第8層の上面で土坑とピット3基を検出した。出土遺物のうち、第4層から出土した(3)の土師器の甕を図化した。(3)は磨滅が著しく不明瞭で、内面の下位にヘラケズりが施される。

第8トレンチ(Tr 8)(第10図 図版3)

第7トレンチでも遺構と遺物を確認した。そのため、第8トレンチは、同じ谷部の標高約71mの地点、谷地形に対して垂直方向の7.8×1.0mの試掘トレンチを設定した。

基本的な土層の層序は、地表面直下10~20cmが表土(第1層)で、第2層は3~5mmの細礫、第3層は1~2mmの極粗砂を含む褐色の粘質土であった。以下も斜面上位から堆積した状況が続く。第8層の暗褐色粘質土から土師器が出土した。なお、精査したが遺構は検出することが出来なかった。

小結

今回の試掘調査は、新可燃物処理施設整備事業に伴うもので、事業計画内に8ヶ所の試掘トレンチを設定して、遺構や遺物の有無を確認するものであった。

調査の結果、検出した遺構は第1トレンチから土坑を1基、第6トレンチからピットを3基、第7トレンチから土坑とピットを3基であった。第1トレンチの時期は不明であるが、第6トレンチと第7トレンチで検出した遺構は、遺構の検出上面層から古墳時代後期から古代の遺物が出土していることから、それ以前またはその時期ものと想定する。また、出土した土師器の多くはローリングを受けていることから、斜面上位から転落してきたものと想定する。以上のことから、東側の丘陵上に展開している山手古墳群との関連性が想定され、周辺の開発工事は十分注意が必要であろう。

参考文献

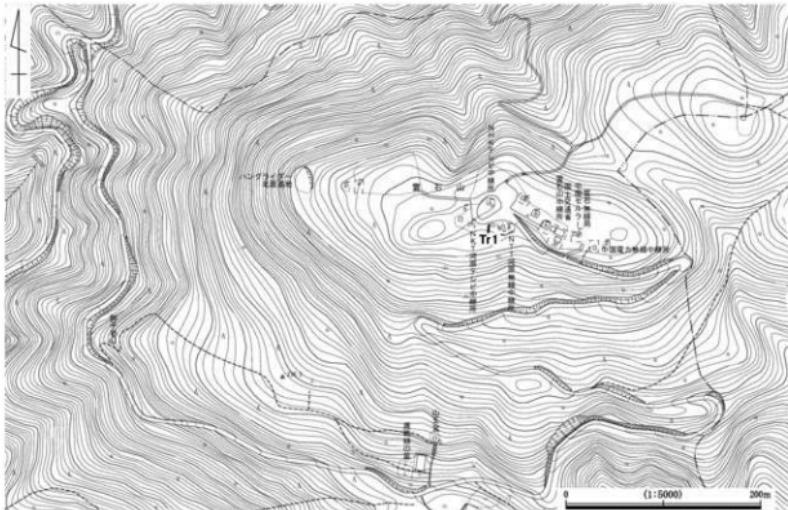
- 山田真宏 2018『山手地ユノ谷上分遺跡』公益財團法人 烏取市文化財団
横山聖 2018『山手古墳群』公益財團法人 烏取市文化財団

第2節 片山林立遺跡

調査期間 平成29年(2017)5月9~15日

片山林立遺跡は、鳥取市河原町片山字林立に所在し、旧鳥取市と河原町、八頭町との境を接する標高334mの靈石山山頂部に展開する遺跡である。靈石山山頂は古來より天照大神の伝承などがあり、北は鳥取平野および日本海、南東に国中平野、南西に千代川と八東川合流部を見下ろす眺望の良さから中世には最勝寺山城として利用されたとされる。平成20年3月および6月に電波塔建設に伴い、鳥取市教育委員会が最勝寺山城跡として19.5mの調査を行った。土坑3基とピット4基を検出し、土坑SK01、02から縄文土器片が出土、SK03は径1.13m、深さ1.24mのすり鉢状を呈することから縄文時代の落とし穴とみられている。この調査によって、靈石山山頂部に縄文時代の遺跡の分布が明らかとなった。今回の調査地は、現在アンテナ塔が整備されている平成20年度調査地点から南東へ20m、東西方向に細長く広がる山頂平坦面の南西斜面中央くびれ部に位置し、南面斜面の下り始めの緩斜面にある。

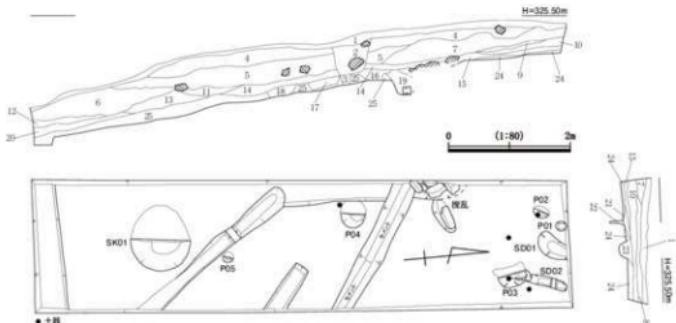
今回の調査は、電波塔建替え基盤取得工事に伴い実施したものである。開発予定範囲は山頂南側斜面のアマチュア無線局西側隣接地であり、その東側一帯は複数のアンテナ基地局が設置されている。一方の西側は靈石山スカイスポーツ南テイクオフ施設として段状に造成された平坦地が広がる。この間の計画地内中央部に1箇所の試掘トレンチを設定した。



第12図 片山林立遺跡 調査トレンチ位置図

第1トレンチ(Tr 1)([第13図 図版3])

開発予定範囲の中央部に斜面の傾斜に沿って長軸を設定した幅2m、長さ8.8mのトレンチである。現地表面の標高324.0~325.4mを測る。表土下は礫を多く含む第4層が広がり、西壁断面より斜面高位の地山を均し斜面下位の南側へ客土して平坦面を括げた状況が窺えた。特に第7層灰褐色粘質土は地山とみられる岩盤を崩して堅く叩き締めた客土で、上層に礫を含む客土第4~6層を盛る。第11層出土の清涼飲料瓶やスナック菓子袋から、これらの造成は1980年代以降と考えられる。地山直上の第15層まで



1. 水無色粘土質土。TSYR1-2(縄文土・表土)
 2. 黄褐色粘土質土。TSYR1-1(0.5~2cmの大粒砂土ブロック・礫を多く含む。20cm大的礫あり。縄文時代の堆积)。
 3. 黄褐色粘土質土。TSYR1-2(0.3cmの大粒砂土ブロック・灰白色(少含む))
 4. 黄褐色粘土質土。TSYR1-3(12cm厚の黄褐色土質土ブロック・縄文多合み型・縄文も。下部約5~20cm大的堆积中)。
 5. 黄褐色粘土質土。TSYR1-4(10cm厚の黄褐色土質土ブロック・縄文多合み型・縄文も。下部約5~20cm大的堆积中)。
 6. 黄褐色粘土質土。TSYR1-5(4~5cm厚の黄褐色土の含み多合み型・縄文も。下部約5~20cm大的堆积中)。
 7. 黄褐色粘土質土。SYRS-2(歯形から、隣れた地山の堆积層と繋がったもの)。
 8. 黄褐色粘土質土。TSYR2-1(0.5~1cmの大粒砂土ブロック・礫を多く含む。縄文)。
 9. 二点滅反射性粘土質土。TSY27-2(砂質土上ブロック・骨粉・砂・貝殻を含む。縄文)。
 10. 二点滅反射性粘土質土。10736-4(0.5cmの大粒砂土ブロックを含む。縄文)。
 11. 二点滅反射性粘土質土。10735-3(0.5~6cm厚骨粉・砂・貝殻を含む。縄文)。
 12. 黄褐色粘土質土。10736-5(砂質土上層及び骨粉・砂・貝殻を含む。縄文)。
 13. 黄褐色粘土質土。10735-2(黄褐色土底層)。
14. 二点滅反射性粘土質土。10735-3(0.5cm的大粒砂土ブロックを含む。灰白色を含む。縄文や中間)。
 15. 黄褐色粘土質土。10735-6(0.5cmの大粒砂土ブロックを含む。灰白色を含む。20cm大的堆积)。
 16. 黄褐色粘土質土。10735-7(明黄色を含む)。
17. 黄褐色粘土質土。10735-8(明黄色を含む)。
18. 黄褐色粘土質土。10735-9(明黄色を含む)。
19. 二点滅反射性粘土質土。10735-4(他の大粒砂土質土ブロック多合む。80cm大的堆积上ブロックを含む)。
20. 黄褐色粘土質土。10735-5(0.5cm人の骨を含む。縄文や中間)。
21. 黄褐色粘土質土。10735-6(0.5cm人の骨を含む。縄文や中間)。
22. 黄褐色粘土質土。10735-7(0.5cm人の骨を含む)。
23. 黄褐色粘土質土。10735-8(明黄色を含む)。
24. 黄褐色粘土質土。10737-6(2.20m黄褐色を含む)。
25. 明黄色粘土質土。10736-8(2.24m上层に明黄色の沈積)。

第13図 片山林立遺跡 第1トレチ実測図

が客土とみられ、第15層中には20cm大的礫、ガラス片、土器細片2、平安時代須恵器杯蓋口縁端部細片1が出土している。また、地山面で南東-北西方向に軸をとる複数の現代溝が検出され、底部からセメントアンカーやビニール巻配線、銅線が巻かれた鉄芯などが見つかり、アンテナ塔建設工事のものとみられる。その他遺構として、トレチ北側で第24層を基盤に、ピット3基、溝状遺構2条、トレチ中央および南側で第25層を基盤として、ピット2基、土坑1基(SK01)を検出した。このうちSK01は径102cmを測る平面円形で、半裁したところ深さ108cmを測る断面すり鉢形である。当該期の遺物は出土しなかつたが、形状から縄文時代の落とし穴と考えられる。第25層上層から平安時代の遺物が出土している。

小結

片山林立遺跡は、平成20年度の試掘調査で縄文時代の遺跡として新たに認知された遺跡である。今回縄文土器は出土しなかったが、落とし穴1基を検出した。また、地山上層の客土最下層ながら出土した平安時代の須恵器片は、北側で検出したピットに伴う可能性があり、最勝寺山城跡の時期以前の人の活動を示す遺物とみられる。このように、靈石山山頂では、縄文時代に落とし穴を用いた狩猟活動は単発的なものではない可能性があり、加えて僅かながら平安時代後期の可能性があるピットが検出されたことは大きな成果であろう。今後はそれぞれの時期の遺跡の範囲や性格について検討を重ねていくことになる。周辺は古墳を含め遺物散布地など遺跡が広範囲に展開する地域であり、開発等に十分に注意を払っていく必要がある。

参考文献

公益財團法人 烏取市文化財團『片山林立遺跡』2017年12月

第3節 帆城遺跡

調査期間 平成29年(2017) 5月23~26日

帆城遺跡は、鳥取市布勢および桂見地内に所在する。湖山池湖畔南東部、宇山(標高30m)の南西竿山麓に展開する遺跡である。昭和54年、県道鳥取空港布勢線建設工事に伴い発見された遺跡で、昭和56年に鳥取市教育委員会により道路建設工事地内の発掘調査が行われている。標高4.5m前後の微高地上で弥生時代後期の堅穴住居や土坑、溝状造構等が検出されたほか、縄文時代後期、弥生時代中期、中世の遺物が出土している。周辺は宇山から下る斜面を段階状の平坦地に造成しているが、県道鳥取空港布勢線の開通もあって急激に宅地化が進む地域である。調査地は県道東側の宇山から下る微高地外縁部、標高4.1m前後の平坦地である。帆城遺跡範囲の中央やや北寄りにあたる。

今回の調査は、民間の宅地造成事業に伴い実施したものである。

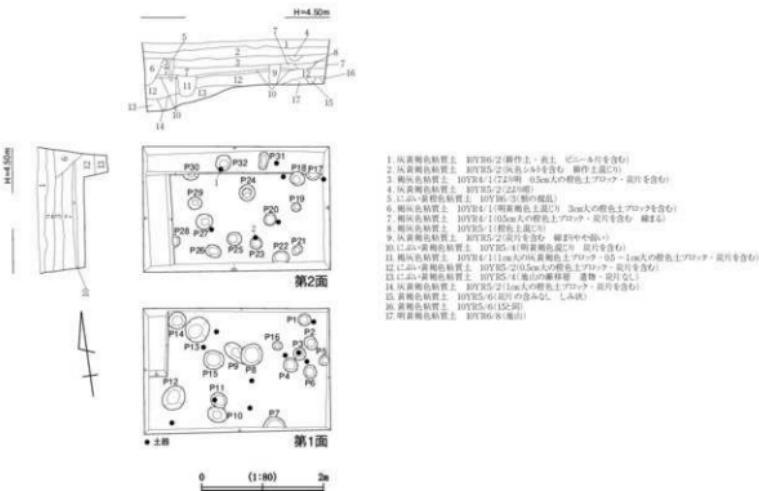


第14図 帆城遺跡 調査トレーニング位置図

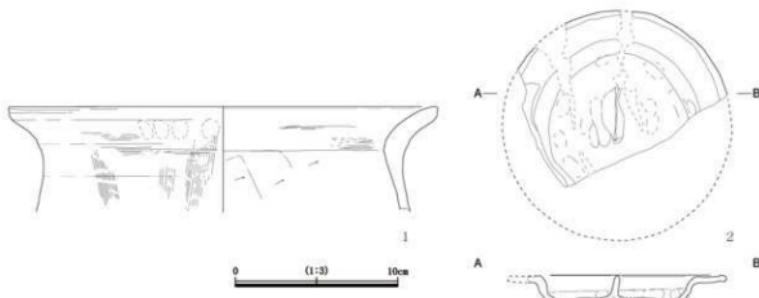
第1トレーニング(Tr 1)(第15・16図 図版4)

住宅敷地予定地の北東部に長軸を宇山からの地形傾斜に沿って設定した幅2m、長さ3mのトレーニングである。地表面標高4.12mを測る。地表面下15cmは第1層ビニール片などを含む現代の耕作土である。第2層は耕作土混じりの灰黄褐色粘質土でビニール片などゴミの含みはなく糸切り底部片はか土師器片を含む。第3層褐灰色粘質土(0.5cm大の橙色土ブロック・炭片を含む。)は第1・2層と異なり橙色土ブロックや炭片を均一に含む締まった層で、糸切りの底部片を含む土師器片を含む。これらの遺物は細片中心で二次的な出土とみられる。第3層の途中でピット16基を検出(第1遺構面)したが、ピット埋土が第2層と酷似することから本来第3層上面(標高3.80~3.90m)からの掘り込みと考えられる。第1遺構面のピットは径15~41cm、平均して28.2cmを測り、深さは4.1~36.5cm、5cm前後あるいは10~20cm程度が多い。第3・7・10層から須恵器および土師器片が出土している。第12層上面、第13層上面でピット16基を検出し、このうちピットP32上面にあたる第12層で土師器壺(第16図1)が出土した。また、最終面の北壁際深掘部で第17層明黄褐色の東~西方向へ傾斜する第13層地山面(無遺物層)を確認している。第13層上面の標高はトレーニング北東端で標高3.53m、北西端で2.95mを測る。

遺物はコンテナ1箱分程度が出土しており、土師器および須恵器片である。陶磁器類や瓦質鍋類、柱



第15図 帆城遺跡 第1トレーニング実測図



第16図 帆城遺跡 出土遺物実測図

状高台、京都系土師器皿の出土はなく時期の特定を欠くが、口縁部く字状の壺(第16図1)は口縁部約5分の1程度が残存、内面頸部以下鋭いヘラ削り調整で古代末から中世初期の所産と考えられる。第10層もしくは第12層上面付近で出土した土師質の摘みのある蓋(第16図2)は復元口径14.0cmを測る。経筒など外容器の蓋とみられ、摘みなどの形状から11世紀後半~12世紀代が考えられる。

小結

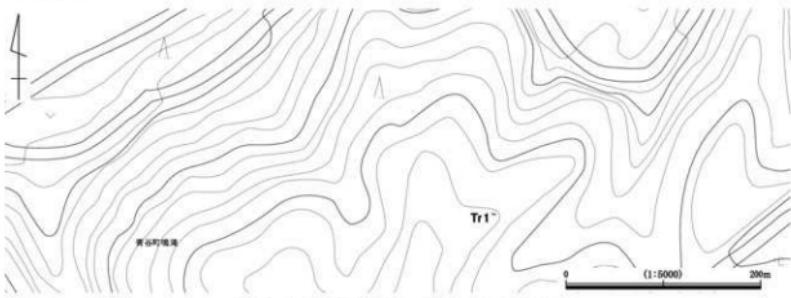
帆城遺跡はこれまで宇山丘陵が張り出す微高地では弥生時代、その縁辺部では主に中世後半期の遺物や遺構の広がりが知られていたが、今回の調査で、微高地に中世前半以前の遺構面が存在することが明らかとなった。周辺は宅地状の平坦地が段状となっているが古來の地形を活用している可能性もあり、今後開発に際し十分注視していく必要がある。

第4節 鳴滝宮坂遺跡

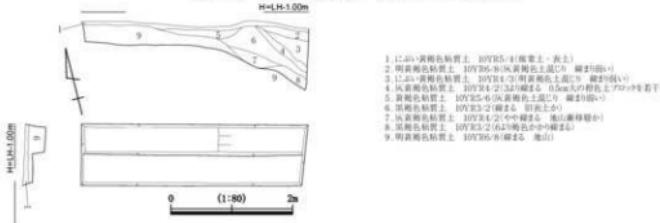
調査期間 平成29年(2017)6月12日

鳴滝宮坂遺跡は、鳥取市青谷町鳴滝に所在する。青谷町の中央部にそびえる木尾山(標高188.5m)の枝状に広がる丘陵のうち北東へ延びる尾根筋、標高175m前後に展開する遺跡である。平成12年、農地造成に伴い青谷町教育委員会により試掘調査が行われ、ピットや古墳時代の壺や高杯などが出土している。県道を挟んで東側の山田横道遺跡では弥生土器や土師器が出土している。周辺では、山裾の神前神社北面の鳴滝宮ノ前遺跡で圃場整備事業に伴い平成12年度に発掘調査が行われ、中世の土坑や溝状構造を検出、土師器・須恵器・瓦質土器・備前焼が出土している。

今回の調査は、民間の風力発電所建設工事に伴い実施したもので、平成12年度試掘トレーンチT 1の南東にあたる。



第17図 鳴滝宮坂遺跡 調査トレーンチ位置図



第18図 鳴滝宮坂遺跡 第1トレーンチ実測図

第1トレーンチ(Tr 1)[第18図 図版4]

調査トレーンチは、北東方向へ延びる尾根の東側斜面にあたり、尾根に沿って帯状の平坦面が認められる。この平坦面に対し直交方向の軸をとる幅1m、長さ3.7mの第1トレーンチを設定した。厚さ5cm程度の表土下は西側では地山(第9層)が露出し、縮まり弱く混ざった第2・3・5層の存在から、斜面高位側を掘削して土を低位側へ搔き出し均すことで平坦面を造りだしている状況が確認された。第4・6層は盛り土前の旧地表とみられる。遺物は出土しなかった。

小結

鳴滝宮坂遺跡の今回の調査では、人工的な平坦面の造成が確認されたが、遺物の出土がなく時期については不明である。北東方向への丘陵上では平成12年度の5箇所のトレーンチでいずれも土師器片が出土しており、尾根の南東斜面についても引き続き注視していく必要がある。

第5節 古市遺跡

調査期間 平成29年(2017) 6月14~16日

古市遺跡は、鳥取市古市・吉成に所在し、千代川右岸の自然堤防上、標高5~7mに展開する遺跡である。平成8~10年度に7.130mにわたり調査が行われ、堅穴住居や掘立柱建物跡、井戸、土坑、溝状遺構、古墓など、弥生時代中・後期~古墳時代前期、7世紀後半~奈良・平安時代、江戸時代中期~幕末期にかけて各種の遺構が検出されている。今回の調査地は既往調査地の175m南東にあたる。

今回の調査は、土地造成計画に伴い実施したもので、大路川と千代川の合流付近の大堤防の下東側の平坦地である。



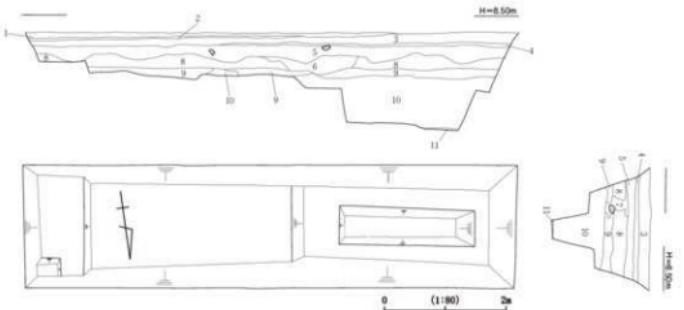
第19図 古市遺跡 調査トレーニング位置図

第1トレーニング(Tr 1)[第20図 図版4・5]

調査トレーニングは、以前水田・畠地であったがその後資材置き場などに利用されていたとされ、現在は草地となり表面に碎石が確認される。この平地の東西方向、堤防に直交する軸をとる幅2m、長さ8.1mの第1トレーニングを設定した。地表面標高は8.26mである。地表面下10cm程度は碎石・灰色砂を含むにぶい黄褐色シルト(第1層)で、真砂土(第2層)を挟み、碎石を多く含み堅く締まった(第3層)および灰黄褐色粘質土(第4層)、セメント成分が沈着した明黄褐色シルト(第5層)が客土される。これらの下層にあたる第8層上面が旧耕作面とみられ、トレーニング東側を中心とした表面に黒色のビニールシート(農業用黒マルチシート)が敷かれていた。第8層に類した第9層下は厚さ80cmにも及ぶ真砂土および疊合みの埋め立てが行われ、その下位には80cm大の巨石が複数観察された。以下、標高6.66mで均一な褐灰色砂(第11層)を確認した。遺物は僅かに第1~5層中に現代瓦や陶器片、第8層中より磨減した土器細片数点が出土している。

小結

今回の調査地では、現代に大規模に埋め立てされ耕土地として利用が確認されたが、標高6.66mで均一な褐灰色砂を検出するなど湧水層に達し、一帯は千代川の氾濫原に該当すると考えられる。



1. にじみ黄褐色シルト 10YR5/3(赤土、鉄石・瓦片付) 10YR5/3(褐色の泥岩)
2. 黄褐色シルト 10YR5/6(5cm大の礫を含む、鉄石付)
3. 黄褐色シルト 10YR5/2(石子を多く含み砂) (鉄石)
4. 黄褐色粘土質土 10YR4/2(3cmの砂を含む) 10YR5/1(褐色の粘土質土ブロックを若干含む)
5. 黄褐色シルト 10YR7/6(2cmの砂を含み多少、0.5cm大の礫を多く含む、鉄石付、セメント分離)
6. にじみ黄褐色シルト 10YR5/3(褐色の泥岩)
7. にじみ黄褐色シルト 10YR5/3(6cm大の礫を含む、鉄石の泥岩)
8. 黄褐色粘土質シルト 10YR5/1(褐色の20cm大の礫を含む、ナロウ片を含む、田耕作地、上面に農作物)
9. 黄褐色シルト 10YR5/1(8cmの褐色小石砂を含む、褐色の泥岩)
10. 黄褐色シルト 10YR6/6(1~2cmの大内殻を含む、8cm大の礫あり、鉄鉢上を含む)
11. 黄褐色砂 20YR6/1(0.1cm大の砂) - 20cm大の内殻を含む、0.3~0.6cm大の砂粒)

第20図 古市遺跡 第1トレーニング実測図

第6節 布勢所在遺跡

調査期間 平成29年(2017)8月30日～9月4日



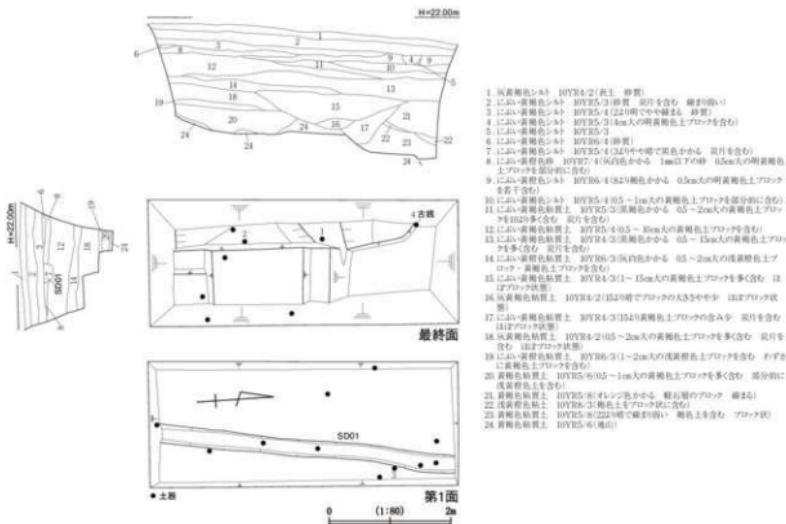
第21図 布勢所在遺跡 調査トレント位置図

布勢所在遺跡は鳥取市布勢に所在する。湖山池南東岸にそびえる宇山(標高30m)に築造された6世紀前半築造とされる国史跡布勢古墳(布勢1号墳:全長60m前方後円墳)の裾部北側に展開する遺跡である。さらに北側には標高25m山頂に築かれた布勢天神山城とその周縁部に天神山遺跡が広がる。これまでに行われた試掘調査の結果から、天神山遺跡は布勢所在遺跡付近まで広がる様相を示す。平成18年、布勢所在遺跡ではトレント2箇所の試掘調査を実施し、縄文時代から現代に至る遺物が検出され、2次堆積の可能性ながら、土師質皿や壺、土錐、瓦質鍋、壺やすり鉢を含む陶磁器片など中世後半期を中心とする遺物が出土している。

今回の調査は宅地造成事業に伴い実施したもので、布勢古墳の北西側の段状になった2箇所の平坦面にそれぞれトレント1箇所を設定した。

第1トレント(Tr 1)(第22・24図 図版5)

調査地は、布勢古墳公園広場から一段下った平坦面で、現況では宅地として管理されているが背丈を超す雑草が生い茂る。この平坦地に、南北方向に軸をとる幅2m、長さ5.1mの第1トレントを設定した。地表面標高21.95m、北側へ向けて僅かな傾斜が観察される。厚さ10cm弱の表土(第1層)を除くと、にぶい黄褐色シルト(第2、3層)が広がる。その下位の第8層(にぶい黄橙色砂)上面で南北方向に軸をとる溝状遺構SD01(幅30cm、深さ15cm)を検出した。溝のほぼ底面で土師器皿片が出土している。以下、第24層地山まで地山の黄褐色土ブロックを含む埋め立て土とみられ、やや黒味のある平坦面を意識したかのような第13・14層上面および第21・15・18層上面で精査を行った。第13・14層上面では遺構は検出されなかつた。第21・15・18層上面では、第21層は締まった地山ブロックで第15～17層が溝状に窪むが自然堆積ではなく地山ブロックを主とした埋め立て土とみられる。なお、第24層地山面は凹凸が観察され、旧地表は観察されなかつた。遺物の多くは第2、3層を中心として出土しており、須恵器細片が含まれるものとのその殆どを土師器片が占める。第9層で土師器皿(第24図3)、第12層で土師器皿(第24図1)、第14層で土師器皿(第24図2)、第19層で弥生土器壺口縁部片、第21層上面で古錢1点(第24図1)が出土している。(第24図1)～(第24図3)はいざれも京都系土師器皿で口縁先端を軽く摘み、3点とも口縁部約



第22図 布勢所在遺跡 第1トレチ実測図

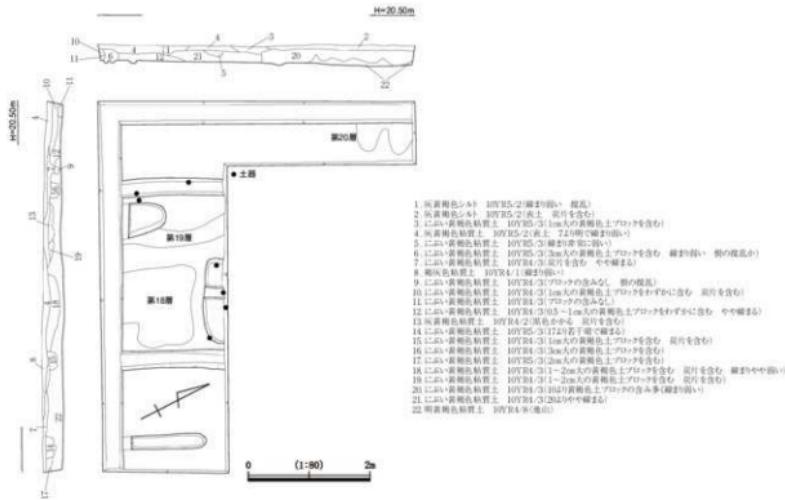
16分の1残存で、推定口径は(第24図1)16.6cm、(第24図2)15.0cm、(第24図3)9.6cmを測る。(第24図3)は体部外面に指おさえが顯著である。(第24図4)は初鑄造1023年の北宋銭「天聖元寶(篆書体)」重量3.207gを測る。

第2トレチ(Tr 2)(第23図 図版6)

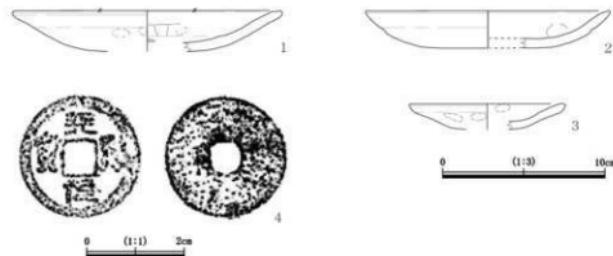
調査地は、布勢古墳公園広場から一段下った平坦面で、現況では宅地として管理される。調査はこの平坦地に、東西方向に軸をとる幅2.1m、長さ5mの第2トレチを設定した。地表面標高20.18m、西側へ向けて僅かな傾斜が観察される。表土およびその下層(第2・4・7層)10cm程度を除くと、南北方向に軸をとる幅26~35cm、深さ15cm程度の溝が検出されたことから、北西外側をL字形に拡張(1×5.2m)した。その結果、北西側ほど地山面が標高を下げ、地山上に第12・20・21層を盛ることで平坦面を造成しておりその上面に溝状および溜り状の窪みが広がる。また、南東側では地山面に綺麗な弱い埋土をもつ搅乱状の窪みが複数確認された。近現代の耕作痕の可能性がある。遺物は表土のほか、第7層や溝状の埋土第16層、第18層中に土師器や陶磁器細片十数点出土しており、肥前陶器や在地窯産陶器などを含む。また、弥生土器細片1点が確認される。

小結

布勢所在遺跡は、布勢古墳から北側の段状になった平坦面を中心に展開する。布勢古墳より一段下がった第1トレチでは地山の掘削土を盛った大規模な整地が確認された。整地土から16世紀後半の土師器皿や地山直上から北宋銭が出土している。更に西へ下った第2トレチでは後世の耕作痕とともに16世紀後半の京都系土師器皿や17、18世紀代の陶磁器片が出土している。これら第1、2トレチでは中世末から近世にかけての時期が中心となるものの僅かではあるが弥生時代の遺物も出土しており、今後も周辺の開発に際し注視していく必要がある。



第23図 布勢所在遺跡 第2トレチ実測図



第24図 布勢所在遺跡 第1トレチ出土遺物実測図

第7節 夷田小寺遺跡

調査期間 平成29年(2017)9月13～15日

夷田小寺遺跡は鳥取市河原町夷田に所在し、北流する千代川に南西より流れ込む夷田川左岸の山麓沿いに展開する遺跡である。平成26・27年度には道路改良予定地内に12箇所の試掘トレンチ、平成28・29年度には路線上の東側一部分を本発掘調査している。今回の調査は本調査の延長上に更に2箇所のトレンチを設定し、遺跡の有無と広がりを確認した。なお、トレンチ番号は平成26年度調査から通し番号を使用している。



第25図 夷田小寺遺跡 調査トレンチ位置図

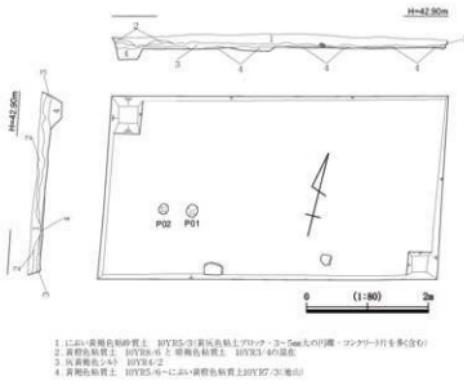
第13トレンチ(Tr13)〔第26図 図版6〕

2017年度調査の県道榎小屋夷田線(夷田工区)調査地の延長上で市道夷田諏訪線の西側、現在は宅地跡敷地内の基礎部分を避けて北西隅に3.0×5.5mのトレンチを設定した。標高42.60mから標高約42.40mの耕土は黄灰色粘土ブロック、3~5mm大の円礫、コンクリート片等を多く含む第1・2層(にぶい黄灰色粘砂質土、暗褐色粘質土)である。第3層(灰黄褐色シルト)は2~10cmの厚さで堆積し、下層の地山(黄褐色粘質土～黄橙色粘質土)は標高42.40m前後で平坦面を保っている。第1・2層除去面では硬化した炭化面を広範囲に検出し遺物の出土状況等から近・現代の火事等の痕跡と予想された。第3層除去面で径14~20cm、深さ約5cm前後のピット状2基を検出、埋土は灰黄褐色シルトでP02は中央に杭痕跡を確認した。検出状況からこれらは上層遺構の残る可能性を持つものと考えられ、また同面ではキャビラによる痕跡が見受けられ造成時の名残を残しているものと思われる。

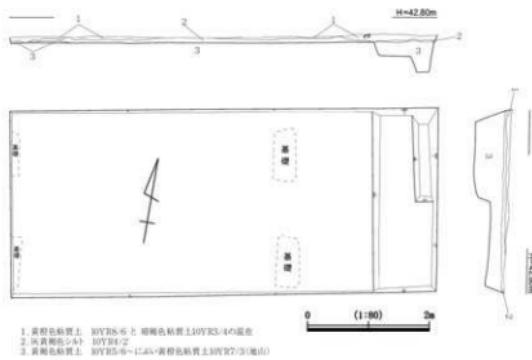
遺物は第1・2層から瓦片、陶磁器類、タイル、プラスチック、須恵器片等を検出した。

第14トレンチ(Tr14)〔第27図 図版6〕

第13トレンチの北東約10mに3.0×7.0mのトレンチを設定した。標高約42.50m前後の耕土は、黄橙色粘質土と暗褐色粘質土の混在層(第1層)で約5~10cmの厚さを測る。第2層(灰黄褐色シルト)は標高約42.40mの地山直上までの堆積である。第3層は、黄褐色粘質土～にぶい黄橙色粘質土で標高41.90mまでの掘り下げを行い同層序が以下に続くことを確認した。第2層除去面では家屋の基礎部分を検出し、第13トレンチ同様地山直上でキャビラ痕を確認、造成後の宅地利用と考えられる。遺物は第1・2層



第26図 叟田小寺遺跡 第13トレンチ実測図



第27図 叟田小寺遺跡 第14トレンチ実測図

で須恵器片3点、磁器4点、土師器3点、陶器1点を検出した。遺構は検出されなかった。

小結

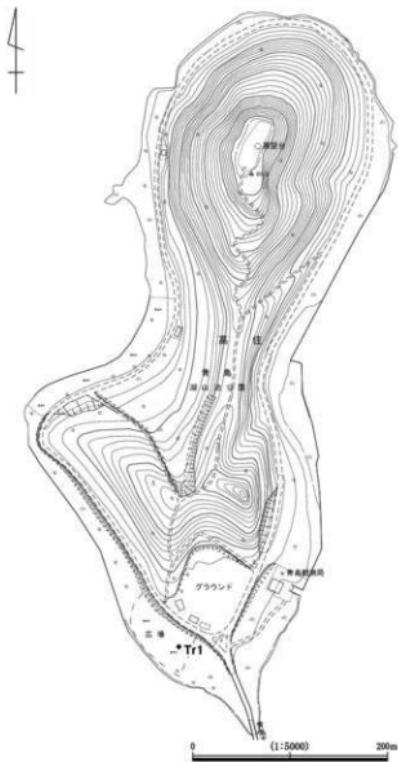
今回の調査地は周囲からも標高は一段低く、市道東側の2017年度調査で検出されている古代～中世の遺物包含層は確認されず、地山を標高42.40m前後に掘削、造成することで宅地利用とし本来の地形を現存していないものと考えられる。しかし、2016・2017年度の本調査では古墳と古代～中世の遺構等を確認しており周辺に遺跡の存在を否定できない。今後開発等の際には注意を要する。

第8節 青島第1遺跡

調査期間 平成29年(2017)9月25日～27日

青島は鳥取平野西端部の湖山池南岸近くに位置する。周囲18km、南北約700m、標高約60.80mを測る湖山池で最も大きな島であり、かつての鳥取湾が湖山砂丘の発達と千代川の堆積により潟湖化したものである。

青島に所在する青島遺跡は、山陰地方で最初に縄文土器が発見された遺跡として著名であるが、1960年代後半になって、島の南側が公園化される際の発掘調査により縄文～古墳時代にかけての複合遺跡として知られるようになった。青島周辺には桂見遺跡、布勢遺跡、大楠遺跡等の縄文時代から弥生時代、古墳時代の遺跡が分布する地域であり、近年では鳥取西道路の改築事業に伴って湖山池南岸が広域に調査され新たな遺跡が知られるようになってきた。



第28図 青島第1遺跡 調査トレンチ位置図

第1トレンチ(Tr 1)[第29図 図版7]

今回の調査は青島大橋を渡って左側の広場、公園施設内更新工事による計画区域内に4.0×4.0mのト

レンチを設定した。表土は芝生で覆われていたため調査後の復元を考慮して30×30cmの芝生の切り取り作業を行った。表土下は5~10cm前後の第1層(暗褐色粘質土)、第1層の除去面では焼土と炭化面を広範囲に検出した。第4層上面で検出した第2層(にぶい黄褐色粘砂質土)、第3層(明黄褐色粘砂質土)には炭片が多く含みプラスチック、ガラス、鉄製品等の近・現代遺物が含まれる。第4層(明黄褐色土)は灰白色土ブロックを含み5~10cmの厚さではほぼ全城にわたって堆積する。第5層(にぶい黄褐色粘質土)下では北東から南東方向へ標高0.90~0.80mと僅かに比高差を持って地山を掘り込む溝状を検出、灰白色土ブロックを含む第6・9層(黄褐色砂質土)が埋土になる。下層は地山由来の岩脈が東西方向に走り、標高0.6m前後で湧水が認められた。

検出した溝状の性格は不明であり、遺物は第1層から陶器擂鉢(在地系)、地山直上から縄文後期～晚期の土器片2点が出土している。



第29図 青島第1遺跡 第1レンチ実測図

小結

今回の調査地東側の道路斜面には縄文土器、須恵器、土師器、石斧等が散見出来る。調査では明確な構造を検出することは出来なかったが、昭和の公園整備と共に大きく変更されているものと考えられるため周辺に遺跡の存在は否定できない。既往調査では島の南側を中心に遺物の出土が見られる事、北側にも遺物採取地点が散在すること等からも広い範囲で遺跡として認識し、今後の開発等の際には十分注意を要するものと考えられる。

第9節 会下・郡家遺跡

調査期間 平成29年(2017)10月12日～12月1日

平成30年(2018)4月11日～17日

会下・郡家遺跡周辺は現在のJR浜村駅から南西へ約700m付近にあたり、鷲峰山に水源をもつ河内川のかつての流れによって形成された逢坂谷に位置し、この谷地形に形成された河岸段丘上に立地する。昭和56年度に実施されたは場整備事業に伴った調査では、弥生時代の住居跡や土塙墓・土坑、古墳時代の堅穴建物や掘立柱建物跡、古代の掘立柱建物跡や溝、中世～近世の土坑などが検出されている。

また近年では、鳥取西道路建設に伴った調査の実施によって改めて弥生時代の堅穴建物や掘立柱建物跡、袋状土坑、土塙墓等が、古墳時代～飛鳥時代の堅穴建物や掘立柱建物跡、木製構造物が、奈良～平安時代の掘立柱建物跡や区画溝、道路遺構、水田が、中世～近世の地下式坑、土塙墓、水田が検出されている。このうち弥生時代のものでは、住居城と墓域等の分布状況から集落構造解明の一端が得られたほか、平安時代のものでは、長大な掘立柱建物が同じ場所で繰り返して建て替えられており、同時期の官衙に関連した公的施設の可能性が指摘されている。また、中世の地下式坑も1遺跡内確認数では西日本有数の検出数となっている。

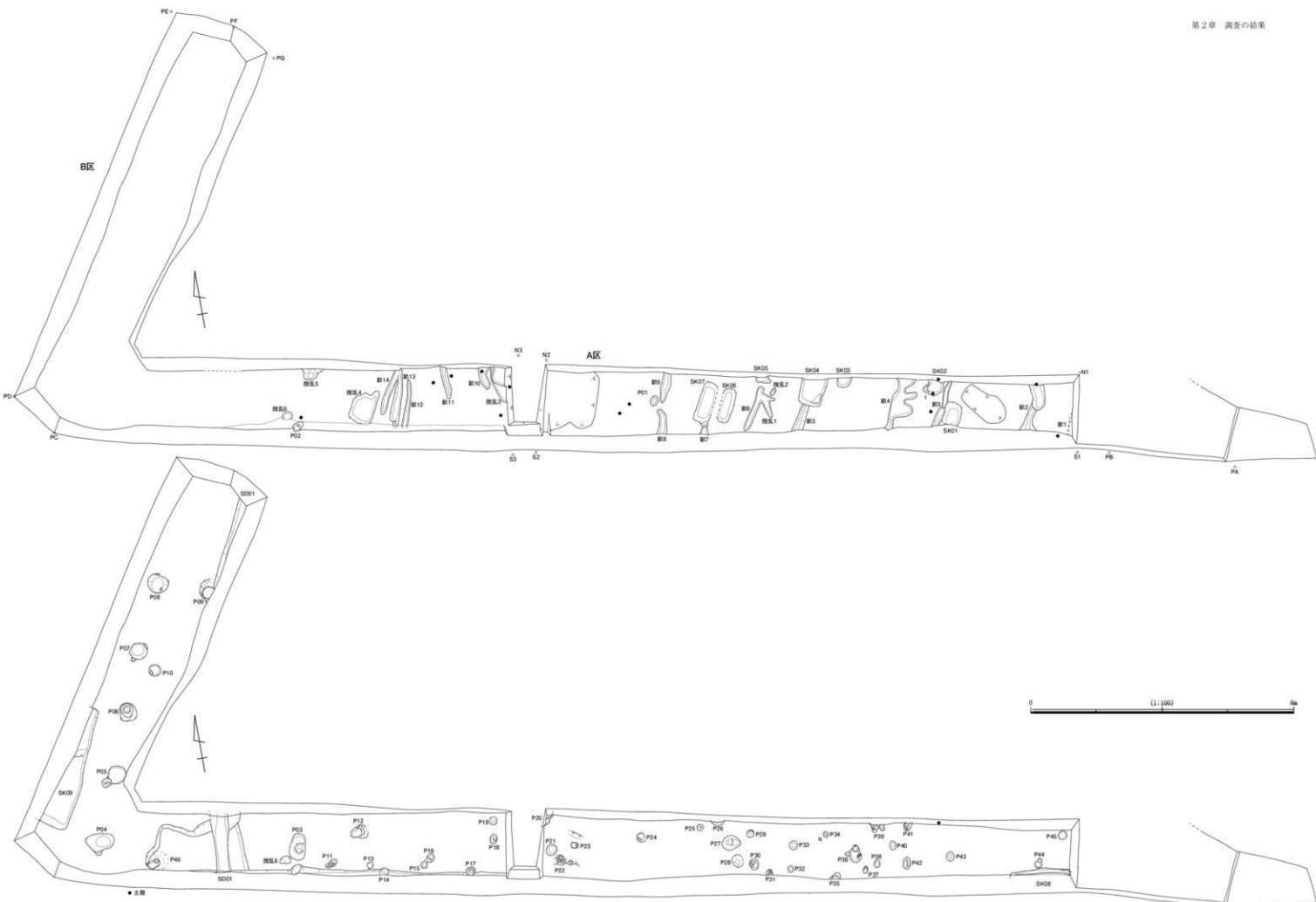
今回の平成29・30年度の調査はこの鳥取西道路建設に関連してその周辺で実施予定となっている各整備事業等に伴うものである。このうち平成29年度の調査は、まず現況の狭隘水田残地のレベル切り下げ工事に伴うもので、かつてのは場整備とこの度の鳥取西道路建設に伴って残地状となった三角形の対象地の西側及び南側の辺に沿う形で鉤状に幅24～30m程度の長いトレンチを設定した。便宜上、南辺側の部分をA区(32.7m×24m)、その西端から66度程度北に振った西辺側の部分をB区(10.0m×30m)と呼称する。A、B区ともは場整備に伴う客土(造成土)が想定されたため重機による表土及び客土除去を行い、その後人力による調査を実施した。

次に鳥取西道路用地の南に接する旧宅地部分では、用地変更に伴う造成の一環として宅地周辺の進入路設置に伴い当該予定地内に6m×25mのトレンチ1ヶ所(C区)を設定した。

また平成30年度の調査は、鳥取西道路利用時の移動通信基盤整備に伴うもので、鳥取西道路の南に隣接した水田部に2m×5mのトレンチ2ヶ所(Tr1・Tr2)を設定した。



第30図 会下・郡家遺跡 調査トレンチ位置図



第31図 会下・郡家遺跡 A・B区平面実測図

(平成29年度の調査)

A区の調査〔第31～34図 図版7・8〕

南に隣接する鳥取西道路用地に平行する東西方向に長い幅約2.4m、長さ30m強のトレンチである。地表面(標高約19.15m)下0.2m程度の耕土下にはトレンチ東端から2/3程度は厚さ約0.6m、それ以西の残り1/3程度は西に向けて徐々に厚みを増して西端付近では厚さ約1mの客土がなされている。

客土下は0.1～0.5m程度の厚さに複数に分層できる黒褐色粘質土層が東に厚く西に薄い状態で堆積し、その上位が密度は低いものの遺物包含層である。なおその下は黄褐色の地山となる。

遺構面は客土除去面(第1面：標高約18.3m)とそこから0.15～0.25m下位の黒褐色粘質土層の間から1面(第2面：標高約18.1m)の計2面を検出した。出土遺物が少なく遺構面の時期判断が困難であるがここでは第1面を近現代まで下る可能性を含んだ中世以降の遺構面、第2面を古代～中世頃の遺構面ととらえておきたい。

第1面からは、N-25°～30°-E程度に主軸をとって南北方向に調査区を横断する幅0.2m前後の溝状の遺構14条が検出されている。平面検出は困難であったものの断面観察を加味すると概ね1m強間隔にはほぼ平行する溝状の遺構が遺存した可能性が想定される。このことは調査地に現在は削平、流失等により遺存していないものの、かつてこの溝～溝間に耕作等に伴う幅1m程度の畠が営まれていたことを示唆するものとみられる。

また、これらとはほぼ平行する主軸をとる土坑SK01・04・06・07や不定形な土坑SK02・03・05及び浅いピット状遺構(P01・02)、搅乱穴6ヶを検出した。このうちSK02から混入とみられる土師器細片が検出されたが遺構の性格を把握するには至らなかった。なお搅乱穴3～6から土師器や陶器の細片が僅かに検出されている。

次いで第2面からは37基のピット状遺構(P03・11～46)、土坑1基(SK08)、溝状遺構1条(SD01)を検出した。このうちピット状遺構の多くは径0.2～0.3m、深さ0.1～0.2m程度であるが、中には二段掘りで深さ0.85mを測るP03や径0.4m、深さ0.65mを測るP14なども認められる。しかしながら建物等を想定するには至らなかった。

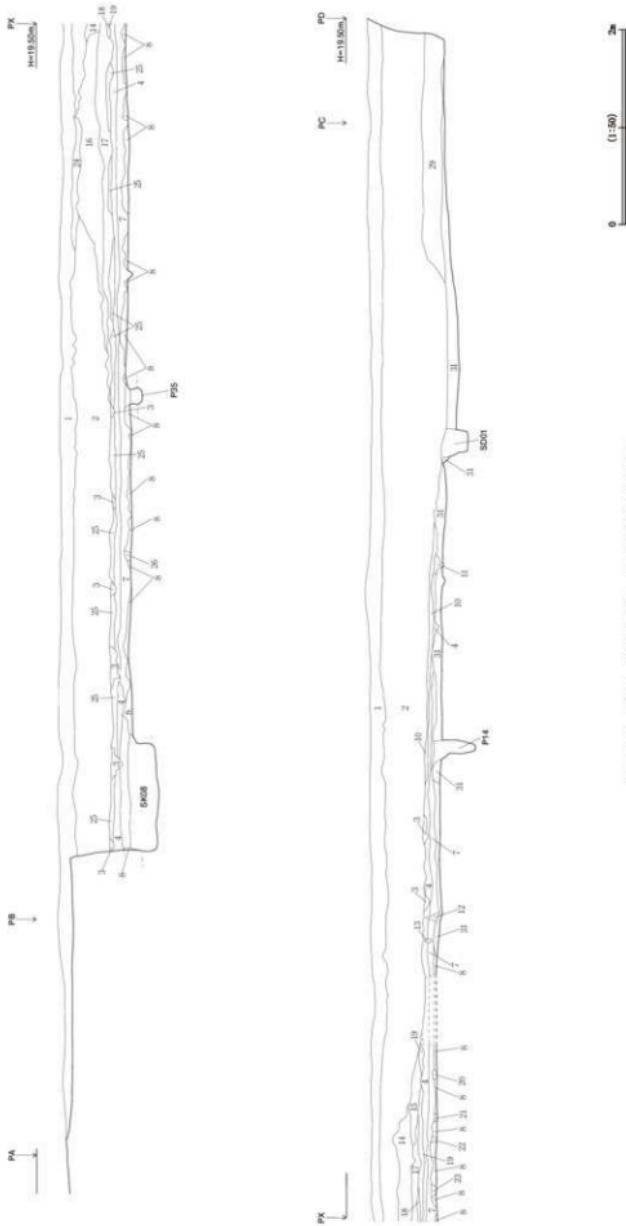
また調査地南東隅から検出したSK08は深さ0.55mを測るが、東及び南側は調査区外へ続くため規模・形状等は不明で、検出値は長さ2.17m、幅0.21mを測るにとどまる。底面の北壁際が壁に沿って東西方向に細長くやや溝状に落ち込む傾向が見受けられることから、その性格としては木棺墓の可能性も考えられる。

調査区西端近くから調査区を南北に横断する形で検出したSD01については、その北側はB区の北東隅にその延長部分とみられる遺構が続く。調査地南の鳥取西道路に伴う調査地内からもこの南側延長線上に同様の溝状遺構が続いている。本調査地内からは確認できなかったが、この南の隣接調査地内からはこの溝と関連した盛土・硬化面が検出されており、それらから本遺構もその西側に存在した南北方向に延びる道路状遺構の一端と想定される。遺物は出土していないが、鳥取西道路調査地内の遺構年代観から、平安時代の遺構ととらえておきたい。

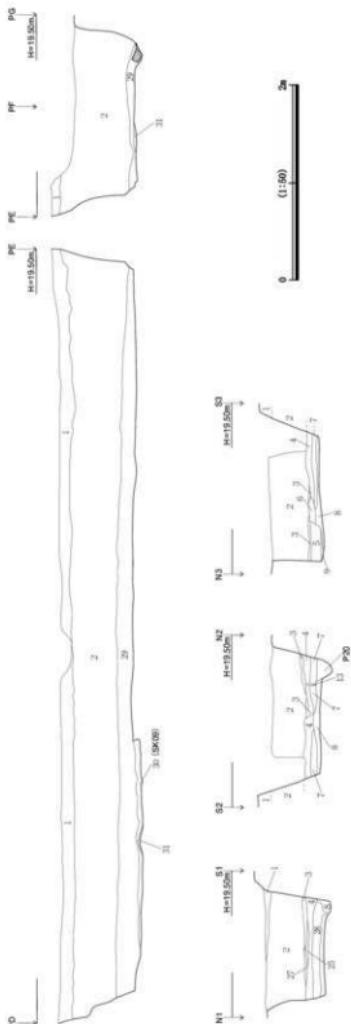
B区の調査〔第31・33・34図 図版8・9〕

前述のとおり、A区の西端から約66度北に振った北東～南西方向の現況畦畔に沿った長さ13m強、幅約3.0mの細長いトレンチである。A区西端部と同様に地表面(標高約19.15m)下0.2m程度の耕土下には厚さ約1mの客土がなされており、客土下は直ちに黄褐色の地山となる。これは昭和50年代に実施されたば場整備とそれに伴う事前調査によるものと考えられる。旧地形と比較してば場整備時に削平されたとみられる調査区より西側を除くと、今回の調査(B区)以東はば場整備時に若干の削平はあるものの遺構の基部が遺存していることが確認された。

遺構は削平された後の地山面(標高17.9m前後)から7基のピットと1基の土坑(SK09)、1条の溝状遺

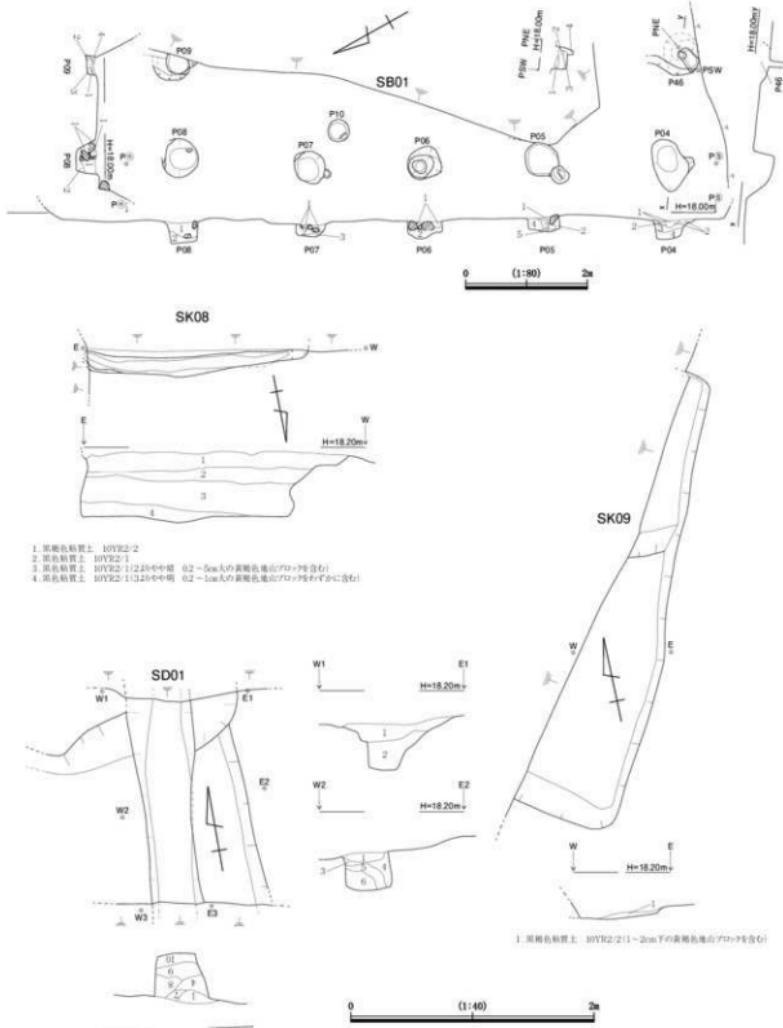


第32図 会下・都家遺跡 A区壁断面実測図

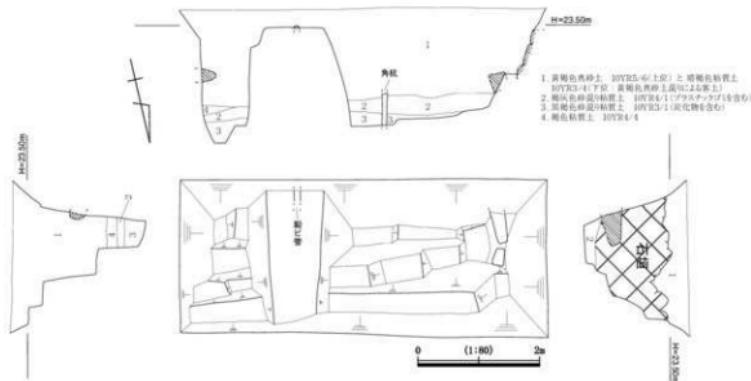


1. 壁面地質層 1: 0072-20-04
2. 二二一層地質層 1: 0072-20-04 - 深褐色粘土層上に0072-20-04の組合 1 - 15cmの水輪骨フローフを含む。高さ 1m
3. 二二一層地質層 1: 0072-20-04 - 深褐色粘土層上に0072-20-04の組合 1 - 15cmの水輪骨フローフを含む。高さ 1m
4. 二二一層地質層 1: 0072-20-04 - 深褐色粘土層上に0072-20-04の組合 1 - 15cmの水輪骨フローフを含む。高さ 1m
5. 二二一層地質層 1: 0072-20-04 - 深褐色粘土層上に0072-20-04の組合 1 - 15cmの水輪骨フローフを含む。高さ 1m
6. 二二一層地質層 1: 0072-20-04 - 深褐色粘土層上に0072-20-04の組合 1 - 15cmの水輪骨フローフを含む。高さ 1m
7. 二二一層地質層 1: 0072-20-04 - 深褐色粘土層上に0072-20-04の組合 1 - 15cmの水輪骨フローフを含む。高さ 1m
8. 二二一層地質層 1: 0072-20-04 - 深褐色粘土層上に0072-20-04の組合 1 - 15cmの水輪骨フローフを含む。高さ 1m
9. 二二一層地質層 1: 0072-20-04 - 深褐色粘土層上に0072-20-04の組合 1 - 15cmの水輪骨フローフを含む。高さ 1m
10. 二二一層地質層 1: 0072-20-04 - 深褐色粘土層上に0072-20-04の組合 1 - 15cmの水輪骨フローフを含む。高さ 1m
11. 二二一層地質層 1: 0072-20-04 - 深褐色粘土層上に0072-20-04の組合 1 - 15cmの水輪骨フローフを含む。高さ 1m
12. 二二一層地質層 1: 0072-20-04 - 深褐色粘土層上に0072-20-04の組合 1 - 15cmの水輪骨フローフを含む。高さ 1m
13. 二二一層地質層 1: 0072-20-04 - 深褐色粘土層上に0072-20-04の組合 1 - 15cmの水輪骨フローフを含む。高さ 1m
14. 二二一層地質層 1: 0072-20-04 - 深褐色粘土層上に0072-20-04の組合 1 - 15cmの水輪骨フローフを含む。高さ 1m
15. 二二一層地質層 1: 0072-20-04 - 深褐色粘土層上に0072-20-04の組合 1 - 15cmの水輪骨フローフを含む。高さ 1m
16. 二二一層地質層 1: 0072-20-04 - 深褐色粘土層上に0072-20-04の組合 1 - 15cmの水輪骨フローフを含む。高さ 1m
17. 二二一層地質層 1: 0072-20-04 - 深褐色粘土層上に0072-20-04の組合 1 - 15cmの水輪骨フローフを含む。高さ 1m
18. 二二一層地質層 1: 0072-20-04 - 深褐色粘土層上に0072-20-04の組合 1 - 15cmの水輪骨フローフを含む。高さ 1m
19. 二二一層地質層 1: 0072-20-04 - 深褐色粘土層上に0072-20-04の組合 1 - 15cmの水輪骨フローフを含む。高さ 1m
20. 二二一層地質層 1: 0072-20-04 - 深褐色粘土層上に0072-20-04の組合 1 - 15cmの水輪骨フローフを含む。高さ 1m
21. 二二一層地質層 1: 0072-20-04 - 深褐色粘土層上に0072-20-04の組合 1 - 15cmの水輪骨フローフを含む。高さ 1m
22. 二二一層地質層 1: 0072-20-04 - 深褐色粘土層上に0072-20-04の組合 1 - 15cmの水輪骨フローフを含む。高さ 1m
23. 二二一層地質層 1: 0072-20-04 - 深褐色粘土層上に0072-20-04の組合 1 - 15cmの水輪骨フローフを含む。高さ 1m
24. 二二一層地質層 1: 0072-20-04 - 深褐色粘土層上に0072-20-04の組合 1 - 15cmの水輪骨フローフを含む。高さ 1m
25. 二二一層地質層 1: 0072-20-04 - 深褐色粘土層上に0072-20-04の組合 1 - 15cmの水輪骨フローフを含む。高さ 1m
26. 二二一層地質層 1: 0072-20-04 - 深褐色粘土層上に0072-20-04の組合 1 - 15cmの水輪骨フローフを含む。高さ 1m
27. 二二一層地質層 1: 0072-20-04 - 深褐色粘土層上に0072-20-04の組合 1 - 15cmの水輪骨フローフを含む。高さ 1m
28. 二二一層地質層 1: 0072-20-04 - 深褐色粘土層上に0072-20-04の組合 1 - 15cmの水輪骨フローフを含む。高さ 1m
29. 二二一層地質層 1: 0072-20-04 - 深褐色粘土層上に0072-20-04の組合 1 - 15cmの水輪骨フローフを含む。高さ 1m
30. 二二一層地質層 1: 0072-20-04 - 深褐色粘土層上に0072-20-04の組合 1 - 15cmの水輪骨フローフを含む。高さ 1m
31. 二二一層地質層 1: 0072-20-04 - 深褐色粘土層上に0072-20-04の組合 1 - 15cmの水輪骨フローフを含む。高さ 1m

第33図 会下・都家遺跡 B区壁断面及びA区横断面実測図



第34図 会下・郡家遺跡 A・B区検出遺構 (SB01、SK08・09、SD01) 実測図



第35図 会下・郡家遺跡 C区実測図

構(SD01)を検出した。このうち6基のピット(P04~09)とA区のP46は桁行4間(約8m)×梁行2間(約3.5m)の掘立柱建物(SB01)を構成する。建物の主軸方位はN-22°-Eをとる。出土遺物がなく遣構の時期判断が困難であるが、は場整備に伴う調査時にはP10から白磁小皿が出土しておりそこからSB01の時期を中世と想定している。

このSB01はA区から北に延びてB区に続くSD01と切り合っており、P09の断面及び昭和56年度調査報告書からSD01がSB01を切っているものと考えられる。しかしながら前述のとおりSD01の時期は南に隣接する鳥取西道路に伴う調査で検出された本遣構に続く道路状遣構の時期から平安時代と想定しており、出土遺物がないため遣構の時期判断が困難な中で両遣構の時期の再検討が必要である。

また、調査区の南西端からはSK09を検出している。検出長3.79m、同幅0.82m、同深さ0.05mを測り主軸はN-25°-Eをとるが、時期その他詳細は不明である。

C区の調査(第35図 図版9)

もともと宅地として造成され、その後構造物が撤去された跡地に設定したトレンチ(6m×2.5m)である。

地表面(標高約23.8m)下1.4m弱にわたって昭和期の造成とみられる客土(第1層)が認められ、トレンチ西端小口部では、地表面下約0.3mで天端石が外された状態の石垣、高さ約1.2m、幅2m以上が東向きに面をもって検出された。宅地造成以前のものとみられ、その前面(東側)には標高約22.3m以下で旧耕土の可能性が考えられる褐色砂混り粘質土(第2層)が堆積する。厚さは0.3m程度でプラスチック片や陶器片を含む。

その下の標高約22m以下には黒褐色砂混り粘質土が0.4m以上堆積しており、僅かながら近代以降の陶器片や土師器片が出土している。なお、第2層上面より若干頭を出した状態で標高22.35m～21.85m以下にわたって立った状態の幅約10cm、厚さ約3cmの角材が検出されている。

調査の結果、第2層以下は湧水が多く標高21.6m付近までの調査となつたが、調査地内では地表面下2m程度までは当該期の遣構は認められなかった。

(平成30年度の調査)

第1トレンチ(Tr 1)〔第36図 図版9・10〕

対象地の北西側、鉄塔の付属施設設置予定箇所に設定した北東～南西方向に長いトレンチ(2m×5m)である。かつては場整備がなされたものとみられ、約20cmの耕土下に20cm程度の客土が認められ、その下には旧整備時のものと考えられるキャタピラー痕跡の残る地山となる。層序からは場整備時に周辺地形が削平された可能性を考えられる。

なお、調査範囲内からは、耕土中から須恵器、土師器、陶器の細片が僅かに出土したが、遺構は検出されなかつた。

第2トレンチ(Tr 2)〔第37図 図版10〕

対象地の南東側、市道から鉄塔までの進入路造成予定地に設定した北西～南東方向に長いトレンチ(2m×5m)である。約20cmの耕土下に30～40cm程度の客土が認められ、以下約20cmの黒褐色粘質土(第5)層、黒色粘質土(第6)層、黒褐色粘質土(第7)層、黒褐色砂混り粘質土(第8)層、褐灰色砂利(第9)層と続く。第5～7層が遺物包含層で、弥生土器および土師器が出土している。特に地表面下60cm強の第6層からは多くの土器片が出土したが、遺構は検出されなかつた。

小結

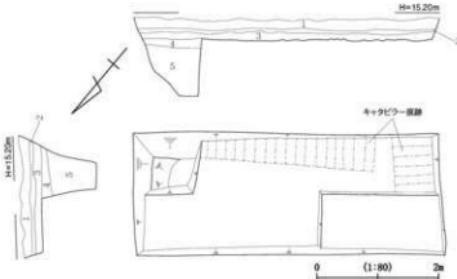
今回の調査は、昭和56年度に実施されたば場整備およびそれに伴った調査後に鳥取西道路建設に伴って残地となった部分やその他周辺地域に遺構が遺存しているか否か、また遺存している場合の遺構面までの深さ等の情報確認に主眼を置いた。

平成29年度調査のB区は、以前のは場整備に伴った調査範囲内にはば含まれており、上位は若干削平されているもののその基部が遺存している状況が確認された。またA区については、西端部が上述は場整備時調査と重なるものの、他はは場整備時の客土除去面およびその下位から計2面の遺構面が遺存することが判明した。前述のとおり出土遺物が少なく遺構面の時期判断は非常に困難であるが、第1面は近現代まで下る可能性を含んだ中世以降の遺構面、第2面は古代～中世頃の遺構面とらえておきたい。

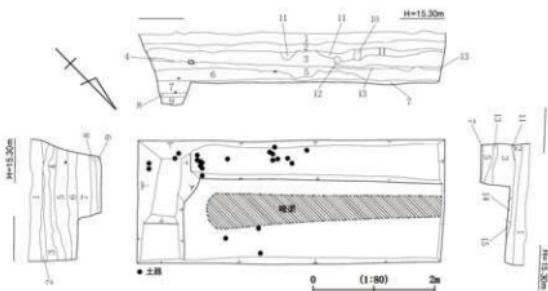
なおA・B区の北東側隣接水田の標高は概ね18.60m程度で、厚さ0.2m程度の耕土層が想定される。この面に合わせるよう現況水田レベルを切り下げるとしてそのレベルはば現況の客土内に納まるものとみられる。ただしA区東半分程度は遺物包含層の遺存レベルが標高18.3mと比較的高いこともあり、特に対象地の東側については工事等の際には慎重を期する必要があると思われる。

さらにC区は、現況地表面下1.8m付近まで客土及び現代の堆積土でさらにその下0.4m付近までは近世以降の堆積土であることが確認された。この結果、地表面下2m付近までに当該期の遺構・遺物包含層は遺存していないと判断される。

平成30年度調査で水田に設定した第1トレンチは以前のは場整備で地山まで削平され当該期の遺構・遺物が遺存していないことが判明した。また同一水田内に設定した第2トレンチでは第1トレンチより旧地形の段丘面の高低差分かと考えられるレベル差のため、現地表面下0.4m以下に弥生時代の遺物包含層が遺存しており、開発等ではその実施方法によっては調査が必要となろう。



第36図 会下・郡家遺跡 第1トレンチ実測図



第37図 会下・郡家遺跡 第2トレンチ実測図

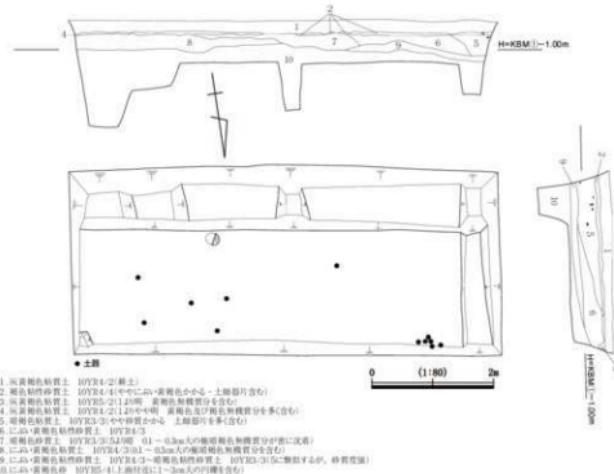
第10節 下味野所在遺跡

調査期間 平成29年(2017)12月7日～26日

下味野所在遺跡はJR鳥取駅から南西へ3km強の鳥取市下味野地内に所在し、千代川によって形成された河岸段丘上に立地する。下味野集落の西から北西にかけての丘陵上には、50基余りで構成される下味野古墳群が展開し、平成12・14年の鳥取自動車道(旧、中国横断自動車道 姫路鳥取線)整備促進関連事業の事前調査では、古墳時代中期～後期の15基の古墳が調査されている。埋葬形態としては木棺直葬のほかに箱式石棺、横穴式石室も認められ、土器転用枕のほか自然石2ヶを用いた、あるいは板石をV字状に組んだ石枕が複数検出されている。また鉄劍・鉄鉢・鉄鎌などの鉄製品も豊富に出土している。さらに古墳の調査時には弥生時代中期～後期の堅穴建物跡や段状造構、土坑なども検出されており(下味野童子山遺跡)、丘陵上にも当該期の生活領域が存在したことが判明している。



第38図 下味野所在遺跡 調査トレーンチ位置図



第39図 下野所在遺跡 第1トレチ実測図

周辺の平野部に目を向けると、調査対象地周辺は縄文時代後期からその足跡をたどることができる地域となっている。遺跡としては、服部遺跡、本高円ノ前遺跡、菖蒲遺跡、山ヶ鼻遺跡などがよく知られているが、集落遺跡が拡大・展開していくとされる弥生時代中期以降の未だ知られていない遺跡がこのほかにも遺存している可能性が考えられる。

今回の調査は電力会社の高圧送電線鉄塔移設設計画に伴うもので、水田耕作地に点在する現況鉄塔に隣接する5ヶ所の移設予定地のうち3ヶ所で調査を実施することとし、段丘地形とは直交方向のトレチ(Tr 1~3)を設定して遺構・遺物の有無に主眼を置いて調査を実施した。

第1トレチ(Tr 1)[第39図 図版10・11]

今回の調査対象地のうち最南端の水田耕作地に設定したトレチである。地表面下約20cmの耕土(第1層)・床土(第2層)の下に約20~30cmの遺物包含層(第5~8層)が認められ、その下は1m以上の厚さを持った混りの無い砂の堆積層(第10層)となる。

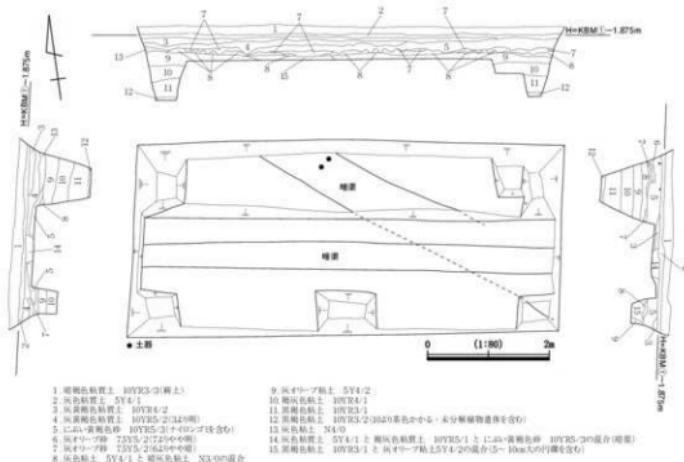
この内、第1・第2層からはプラスチック片とともに陶器片、須恵器片、土師器片が出土している。また第5~8層からは、古墳時代前期の鼓形器台や、赤彩の杯部片、土師器壺片が出土している。

遺構としては、第10層上面から径20cm、深さ6cmのピット状の浅い窪み1ヶ所を検出したのみで、その他には明瞭な遺構は検出されなかった。

第2トレチ(Tr 2)[第40・42図 図版11]

第1トレチの北約300mに設定したトレチで、標高は第1トレチより1.4m低い位置にあたる。地表面下約20cmの耕土(第1層)・床土(第2層)の下約30cm程度が灰褐色粘土層(第3・4層)とにぶい黄褐色砂層(第5層)で、第5層は土師器片が多く含む包含層であるが、その下の第8層(灰色粘土と暗灰色粘土の混合層)上面に圃場整備時のキャタピラ状痕跡が認められることやナイロンゴミが含まれることから下位の第7層(灰オリーブ砂層)と合わせて客土とみられる。

以下は粘土層となるが、厚さ10cm程度の第8層とその下の第9層(灰オリーブ粘土層)を挟んだ厚さ20cm程度の第10層(褐色粘土層)が遺物包含層である。



第40図 下味野所在遺跡 第2トレンチ実測図

遺構としては、第3層上面から東西方向に走る現代の暗渠を検出した。また、第9層上面から北西～南東方向に走る暗渠を検出したが、その他には当該期とみられる遺構は検出されなかった。

なお出土遺物のうち耕土中の出土ではあるが、複合口縁部をもつ壺(1)を図化した。

第3トレンチ(Tr 3)(第41・42図 図版12)

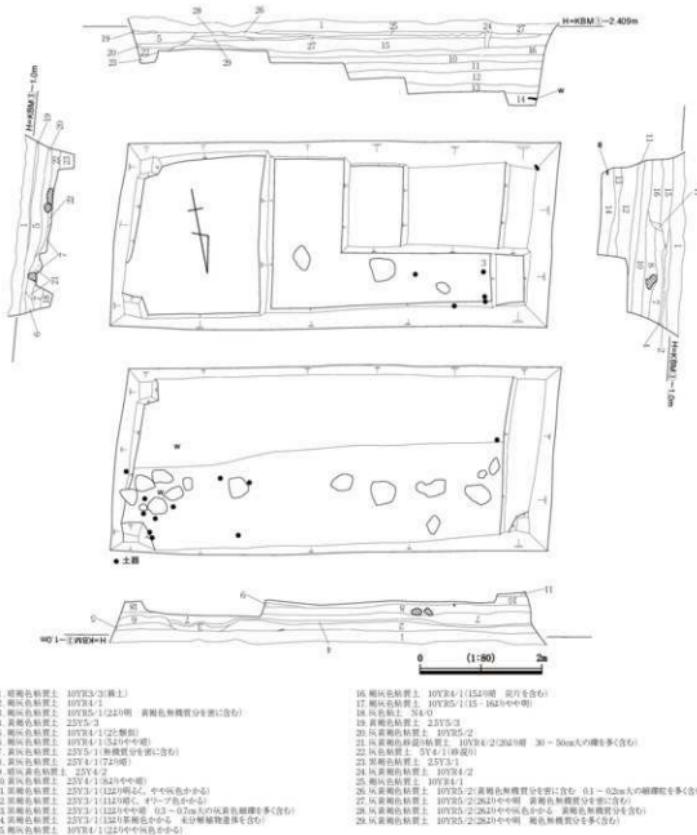
第2トレンチの北約550mに設定したトレンチである。標高は第2トレンチとほぼ同様で、第1トレンチより1.4m程度低い位置にある。地表面下約20cmの耕土(第1層)の下に以前の耕土とみられる10～20cm程度の褐灰色粘質土層(第2・5・6層)が堆積する。さらにその下にも近代以降の陶器壺片を包含したそれ以前の耕土とみられる褐灰色粘質土層(第15・16層)が堆積する。その下80cm程度は平準な堆積層で、黄灰色粘質土層の第10層以下黒褐色粘質土層の第11～14層と続き、第11又は13層からは中世以降の瓦質の土鍋片(2)が、また未分解植物遺体を含む第14層からは板杭が出土している。

遺構としては、畦畔状の高まり2面を確認した。第3層および第28・29層が上位の堆積層で、第7・8・21層が下位の堆積層である。このうち下位の第7層からは陶器片のはかに土管片やガラス瓶片が出土し、第8及び21層からは畦畔の基部固め用とみられる30～50cm大の岩とともに陶器片や土錐(3)、土師器片、須恵器片が出土している。いずれも近代以降の混入とみられる。

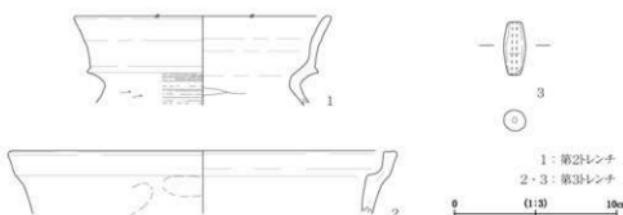
なおその他には当該期とみられる遺構は検出されなかった。

小結

今回の調査は河岸段丘上で、遺構・遺物の有無確認に主眼を置いて実施した。その結果、いずれのトレンチからも古墳時代以降の遺物が検出されたものの、明瞭な遺構は検出されなかった。ただし、第1トレンチの遺物の比較的集中した出土状況や、第2トレンチの遺物が多く含まれていた客土が周辺の段丘を削って埋めたものである可能性、あるいは第3トレンチの地表面下0.8m以下の遺物の包含状況などを考えると、周辺の段丘上に古墳時代や中世以降の遺構が遺存している可能性は否定できず、今後も開発等の際にはきめの細かい注意が必要と思われる。



第41図 下味野所在遺跡 第3トレンチ実測図



第42図 下味野所在遺跡 出土遺物実測図

第11節 海士所在遺跡

調査期間 平成30年(2018)1月29日～2月1日

海士所在遺跡は、北に広がる日本海の沿岸に東西に延びる国立公園鳥取砂丘の東端部、福部砂丘の南側後背地に細長く形成された海士集落の西端近くに位置する。南側前面にはラグーン地形が広がり、もともとはたっぷりと水をたたえた旧湯山池であったとされ、江戸時代以降に干拓された水田に面した微高地に立地する。

現在は遺跡の南側には鳥取市福部町内の主要河川の一つである江川と国道9号が東西方向に延びており、さらに南側の丘陵上には海士古墳群が形成されている。また西側は本遺跡と同様の砂丘後背地に位置する縄文時代中期を主体とする直浪遺跡が形成されており、南東側には出土遺物が国の重要文化財に指定された縄文時代前期にまで遡る栗谷遺跡がよく知られている。

今回の調査は、個人で耕作等に使用するための溜池を掘削した際に遺物が出土したとの届けがあったことに起因する。今後はこれ以上大幅に掘削を広げる予定はないとのことであったため、遺構の有無その他の情報を得ることを目的として既掘削部分を多少拡張するとともに層序の確認のための11.8m×2.0m程度のトレンチ(Tr 1)を設定して調査を実施した。

その結果、砂丘の砂の下から遺物包含層(黒褐色粘質土層)を検出し、平面、断面からピット状や溜り状の遺構を検出した。

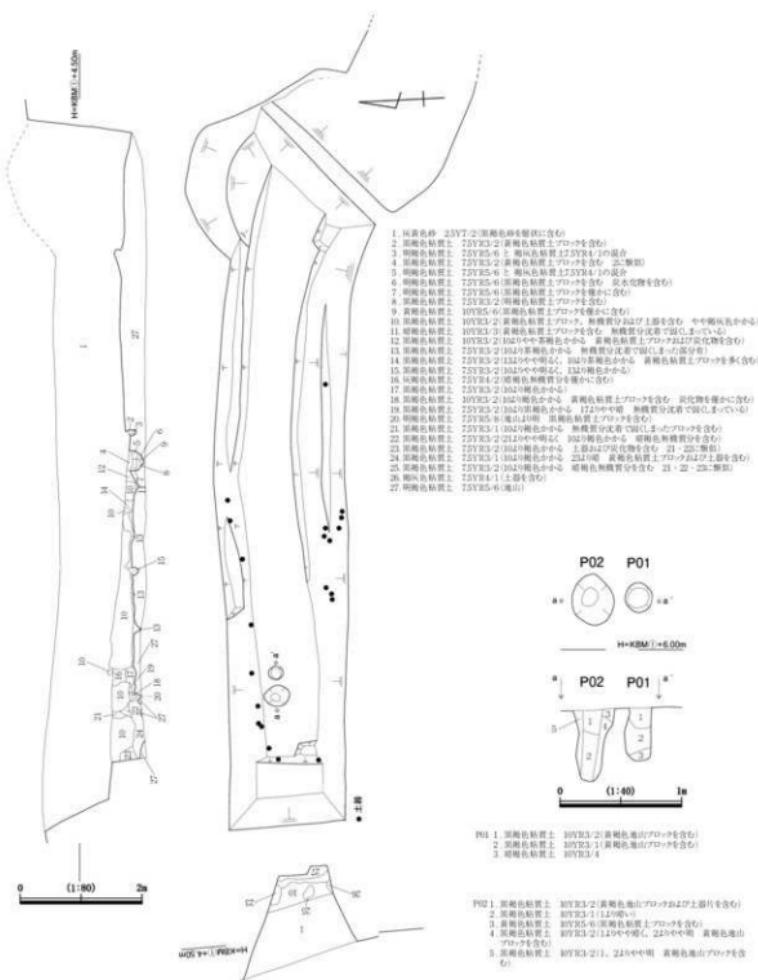
第1トレンチ(Tr 1)(第44・45図 図版12・13・28)

今回の調査対象地は砂丘地裾付近の微高地で、北から南に下る緩斜面に作られた耕作地である。北側の壁面には灰黄色砂層(第1層)が1m程度堆積する。トレンチ中央付近から東側はこの第1層の下は直ちに地山となるが、西側には遺物包含層である黒褐色粘質土層(第12～14・16・17・22～24層)が堆積し、いずれも古墳時代後期のものとみられる土師器の壺や赤彩の施された高杯、須恵器の蓋杯等が出土している。

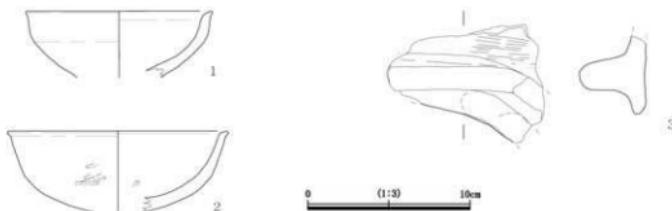
遺構としては、これらの遺物包含層の上面からピット状あるいは溜り状遺構の可能性が考えられる堆積層が確認された(第4～9・10・11・13・18～21層)。またトレンチ西側からは、地山面での確認となるが、径約25cm、深さ約40cmのP01と径約40cm、深さ60cmのP02の2基のピット状遺構を検出した。



第43図 海士所在遺跡 調査トレンチ位置図



第44図 海士所在遺跡 第1トレンチおよびP01・P02実測図



第45図 海士所在遺跡 出土遺物実測図

なお遺物については、黒褐色粘質土層(第10・12~14・16・17・22~24層)中出土の赤彩の施された杯部(1・2)と甌片(3)を図化した。

小結

今回の調査は砂丘後背の微高地上での遺構・遺物の有無確認に主眼を置いて実施した。その結果、届け出のとおり古墳時代後期の遺物が検出され、断面観察ながらその遺物包含層検出面からピット状あるいは溜り状遺構の堆積層の可能性を考えられる層序の変化を確認した。また地山面からの検出ではあるが、深さ40cm以上でしっかりした2基のピット状遺構を検出した。

以上のことから、今回の調査地も含めて砂丘後背地の微高地上には当該期の遺構が遺存しているものとみられる。遺跡の時期には異なる点があるものの、本遺跡の東西には鳥取県の縄文遺跡を代表する栗谷遺跡と直浪遺跡が展開しており、今後も当地域での開発等の際には事前の確認作業が必要である。

第12節 山根所在遺跡

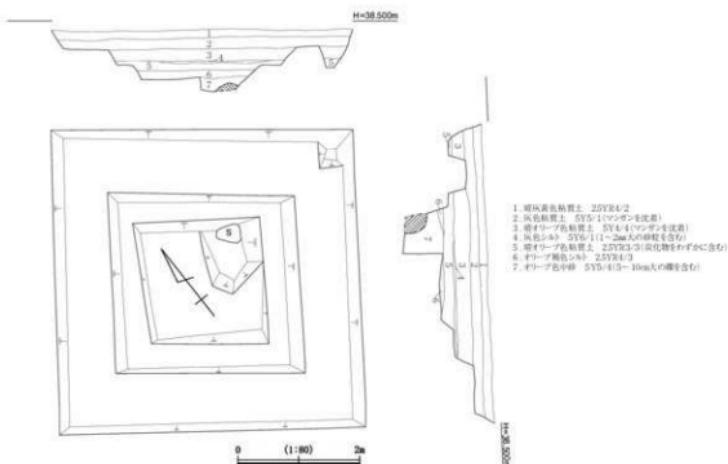
調査期間 第1～5トレンチ 平成30年(2018)2月27日～3月27日

第6～8トレンチ 平成30年(2018)4月3日～17日

第9トレンチ 平成31年(2019)1月23日～29日



第46図 山根所在遺跡 調査トレンチ位置図



第47図 山根所在遺跡 第1トレンチ実測図

山根所在遺跡は、鳥取市青谷町山根・早牛地内に所在し、南には飯盛山と鉢伏山などの標高500m以上の山地から日本海に向かって標高300m前後の溶岩台地が伸び、その北端は長尾鼻、尾後鼻といった断崖となって海に突出している。さらに、調査地中央には日置川が流れ、下流域で勝部川に合流し、日本海に注ぐ。日置川と勝部川が運んだ土砂によって、形成された沖積平野の南部には弥生時代を初めとする多彩な遺物が出土したことで知られる青谷上寺地遺跡が所在している。

調査地の周辺は、本格的な発掘調査の事例は少ないものの下流で、平成20年度に大坪大綱手遺跡の発掘調査が行われており、縄文時代晚期前半から中世にかけての土器や石製品など多くの遺物が出土している。この他にも丘陵上には多くの古墳が展開し、中世の山城も築かれ、河岸段丘には山根地帯遺跡や遺物の散布地が分布している。今回の発掘調査は、圃場整備事業に伴うもので、事業計画地内に9箇所の試掘トレンチを設定し確認調査を行った。

第1トレンチ(Tr 1)〔第47図 図版13〕

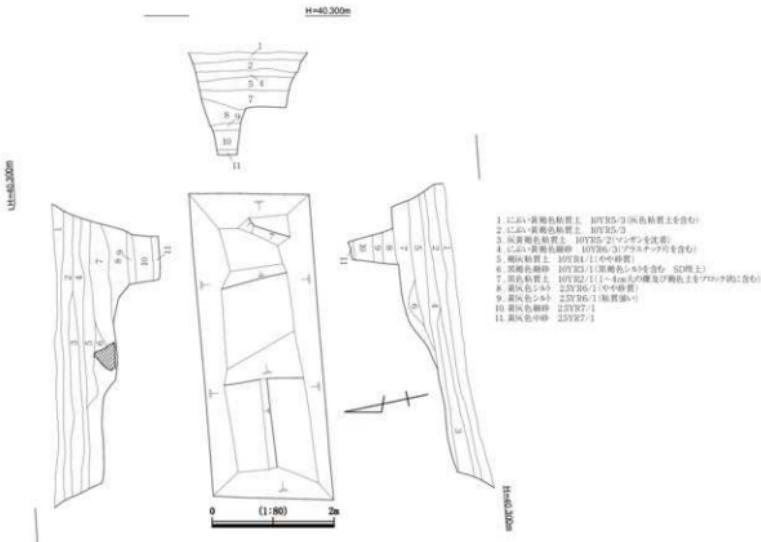
第1トレンチは、日置川から西へ約50mの河岸段丘上の水田耕作地に $5.0 \times 4.9\text{m}$ のトレンチを設定した。

基本的な土層の層序は、地表面直下15cm前後は現代の耕作土(第1・2層)で、次の第3層の暗オリーブ色粘質土は水田の床土であった。次に、第4層は砂粒を含む灰色シルトで、第5層は暗オリーブ褐色粘質土で炭化物を含んでいた。第6層はオリーブ褐色シルトで、第7層はオリーブ色中砂で5~10cmの大の礫を含んでいた。なお、精査したが人の生活痕を示す遺構や遺物を確認することが出来なかった。

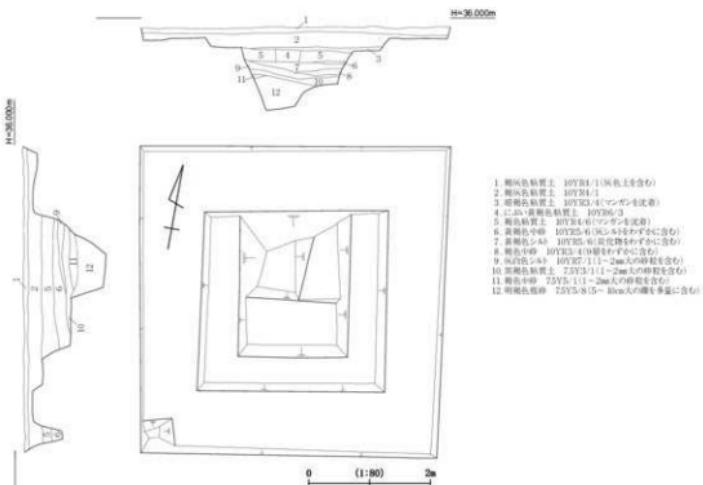
第2トレンチ(Tr 2)〔第48・56図 図版13・14・28・29〕

第2トレンチは、日置川から西へ約130mの水田耕作地に $5.0 \times 1.9\text{m}$ のトレンチを設定した。

地表面直下、30~40cm前後(第1層~3層)は耕作土と想定した。次の第4層はにぶい黄褐色細砂でプラスチックを含んでいる。次に第5層の褐灰色粘質土からは、縁軸陶器や土師器、須恵器、木製品などが多く出土している。第6層の黒褐色細砂は、第2トレンチの北断面と南断面で検出し、南北方向に延びる溝状遺構と想定した。第7層は黒色中砂で、10~20cmの礫を含み土師器や須恵器が出土している。第8層の黄灰色シルトはやや砂質で、第9層の黄灰色シルトは粘性が強い。第10層と第11層は黄灰色細



第48図 山根所在遺跡 第2トレチ実測図



第49図 山根所在遺跡 第3トレチ実測図

砂及び中砂である。出土遺物のうち、(1)～(15)を図化した。(1)は土師器の杯で磨滅が著しく調整不明瞭であるが、ヨコナデが施され口縁部は外傾し端部で反る。(2)は土師器の椀で、底部は糸切りで体部はヨコナデが施される。(3)は土師器の椀で、底部は糸切りで磨滅が著しく調整不明瞭であるが、ヨコナデが施される。(4)は土師器の甕で口縁部が外反する。外面はハケ目や指オサエがみられ、ヨコナデが施される。内面の下位にはヘラケズリが施される。(5)は土師器の甕で口縁部が外傾する。磨滅が非常に著しく調整不明瞭であるが、内面の下位にヘラケズリが施される。(6)は須恵器の蓋である。天井部はヘラケズリで、ツマミがナデ付けられヨコナデが施される。(7)は須恵器の杯である。底部はヘラケズリで、口縁部は外傾し直線的に延び、ヨコナデが施される。(8)は須恵器の高台付杯身で、焼成が甘く磨滅が著しく調整不明瞭である。底部はヘラケズリで高台は端部にナデ付けられ、口縁部は外傾し直線的に延び、ヨコナデが施される。(9)は須恵器の高台付杯で、底部はヘラケズリで、高台は端部からやや内側にナデ付けられ、口縁部は外傾し直線的に延び、ヨコナデが施される。(10)は須恵器の椀である。底部は糸切りで端部に段を持ち、体部はヨコナデが施される。(11)は須恵器の高杯である。杯部はヨコナデが施され、脚部は透かしを持ち、透かしの位置から4方向に窓を有するものと想定する。(12)は須恵器の瓶類である。底部はヘラ切りで、高台は端部にナデ付けられ、口縁部は外傾し直線的に延び、ヨコナデが施される。外面に自然釉がかかる。(13)は須恵器の口縁部で、3条も凹線が巡り、上位と下位に波状文が施され端部がやや外反する。(14)は縄釉陶器の口縁部で、内湾しつつ端部で外傾する。(15)は縄釉陶器の口縁部でわずかに外反する。

第3トレンチ(Tr 3)(第49図 図版14)

第3トレンチは、日置川から西へ約50mの河岸段丘上の水田耕作地に5.1×5.0mのトレンチを設定した。

基本的な土層の層序は、地表面直下10cm前後は現代の耕作土(第1層・第2層)で、次の第3・5層の褐灰色粘質土は水田の床土で第5層から須恵器が出土した。第5層上面で現水田用の暗渠(第4層)を確認した。第6層の黄褐色中砂はトレンチの東側のみの堆積で、第7層オリーブ褐色粘質土で炭化物を含んでいる。第8層は褐色中砂で第9層をブロック状に含み、第9層は灰白色シルト、第10層は黒褐色粘質土、第11層は褐色中砂で砂粒を含み、第12層は明褐色粗砂で礫を多量に含んでいた。なお、人の生活痕を示す遺構を確認することが出来なかった。

第4トレンチ(Tr 4)(第50図 図版14)

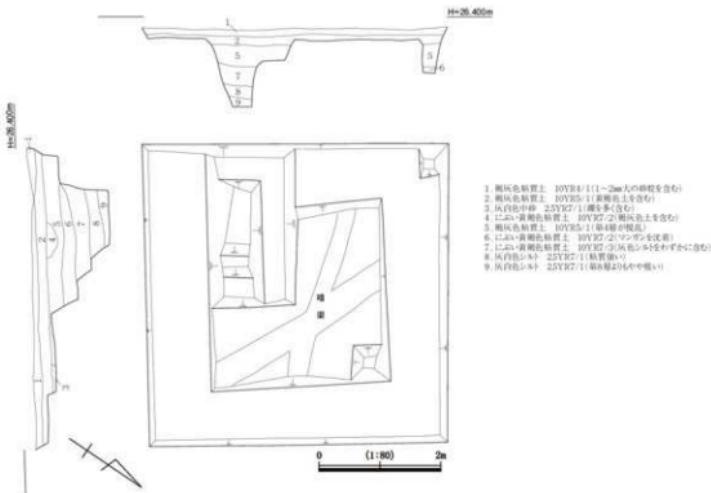
第4トレンチは、日置川から西へ約70mの河岸段丘上の水田耕作地に5.0×5.0mのトレンチを設定した。

基本的な土層の層序は、地表面直下10cm前後は現代の耕作土(第1・2層)で、耕作土から土師器や陶磁器が出土した。第4層は落ち込みで、次の第5層の褐灰色粘質土と第6層のにぶい黄褐色粘質土は水田の床土で、第5層上面で現水田用の暗渠(第3層)を確認した。第3層から土師器や須恵器が出土した。第7層のにぶい黄褐色粘質土は灰色シルトを含み、第8層と第9層は灰色シルトである。精査したが、人の生活痕を示す遺構は確認することが出来なかった。

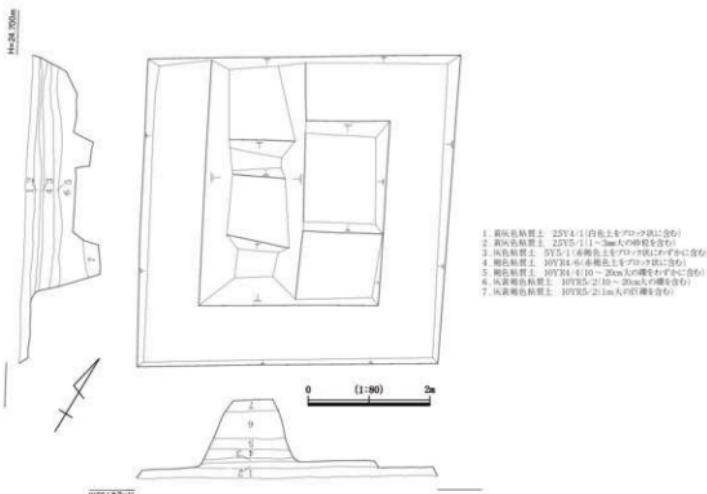
第5トレンチ(Tr 5)(第51・57図 図版14・29)

第5トレンチは、日置川から西へ約50mの河岸段丘上の水田耕作地に5.1×5.0mのトレンチを設定した。

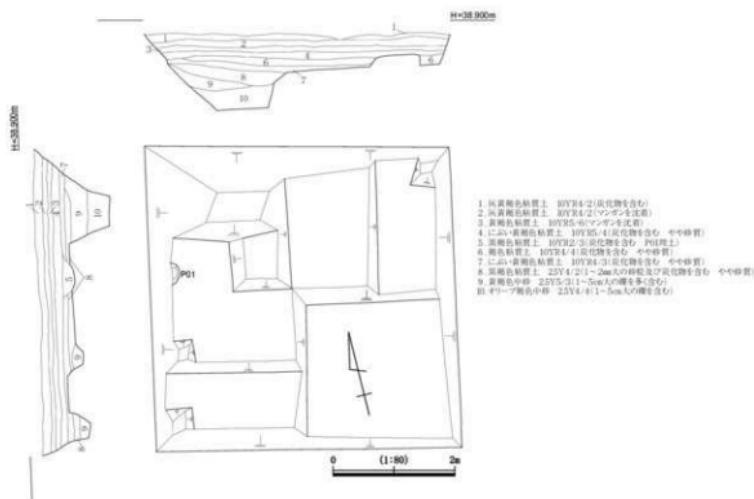
基本的な土層の層序は、地表面直下20cm前後の耕作土(第1・2層)で、第1層から土師器や須恵器、陶磁器が出土した。第3層の灰色粘質土と第4層の褐色粘質土は水田の床土と想定した。第5層の褐灰色粘質土と第6層の灰黄褐色粘質土には10～20cm大の円礫が含まれ、第7層の灰黄褐色粘質土には巨礫が含まれており、土石流の影響が窺えた。また、第6層から繩文土器が出土し、(1)・(2)・(3)を図化した。(1)・(2)・(3)は、いずれも繩文時代早期の楕円文土器で磨滅が著しい。外面は楕円文の押型文原体が斜位を基調に回転させており、楕円文の長径は1.3～1.4cmで、短径は0.4～0.5cmを測る。内面はナデ調整を施した無文である。なお、精査したが人の生活痕を示す遺構を確認することが出来なかった。



第50図 山根所在遺跡 第4トレチ実測図



第51図 山根所在遺跡 第5トレチ実測図



第52図 山根所在遺跡 第6トレンチ実測図

第6トレンチ(Tr 6)〔第52図 図版14・15〕

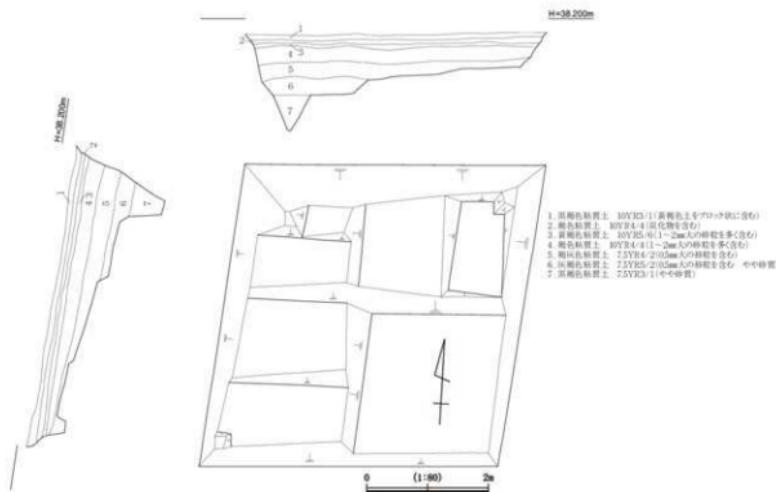
第6トレンチは、日置川から東へ約50mの河岸段丘上の水田耕作地に $5.0 \times 5.0\text{m}$ のトレンチを設定した。基本的な土層の層序は、地表面直下20cm前後の耕作土(第1・2層)で、第3層の黄褐色粘質土と第4層のにじみ黄褐色粘質土は水田の床土と想定した。第4層下面でP01を検出した。次に第6層にはにじみ黄褐色粘質土で、第7層は黒褐色粘質土で炭化物を含んでいた。第8層の黒褐色粘質土で炭化物を含み、以下は1~5cm大の礫を含む堆積層であった。なお、精査したが人の生活痕を示す遺構を確認することが出来なかった。

第7トレンチ(Tr 7)〔第53・58図 図版15・29〕

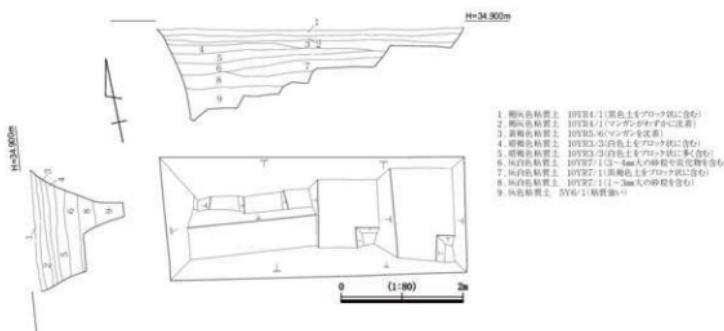
第7トレンチは、日置川から東へ約70mの河岸段丘上の水田耕作地に $5.0 \times 4.9\text{m}$ のトレンチを設定した。基本的な土層の層序は、地表面直下20cm前後の耕作土(第1・2層)であった。第3層は黄褐色粘質土で、第4層は褐色粘質土で砂粒が多く含んでいた。次に、第5層の褐灰色粘質土から土師器が多く出土し、(4)を図化した。(1)は古墳時代前期の土師器の壺で、体部の外面はハケ目が施され、内面はヘラケズリがみられる。口縁部はナデによる調整が施され、外傾し端部でわずかに段を持つ。第6層の灰褐色粘質土で砂粒を含み、第7層とともにやや砂質であった。なお、精査したが人の生活痕を示す遺構を確認することが出来なかった。

第8トレンチ(Tr 8)〔第54図 図版15〕

第8トレンチは、日置川から東へ約70mの河岸段丘上の畠地に $5.0 \times 2.0\text{m}$ のトレンチを設定した。基本的な土層の層序は、地表面直下20cm前後の耕作土(第1・2層)で、陶磁器や現代の瓦、ガラスなどが出土した。第3層は黄褐色粘質土でマンガンが沈着し、第4層と第5層は暗褐色粘質土で、ブロック状に含む白色土の混入量が異なっていた。第6層と第7層、第8層は灰白色粘質土で、第6層は3~4mm大の砂粒を含み、第7層は黒褐色土をブロック状に含み、第8層は1~3mmの砂粒を含んでいた。第9層は粘性の強い灰色粘質土であった。なお、精査したが人の生活痕を示す遺構を確認することが出来なかった。



第53図 山根所在遺跡 第7トレチ実測図



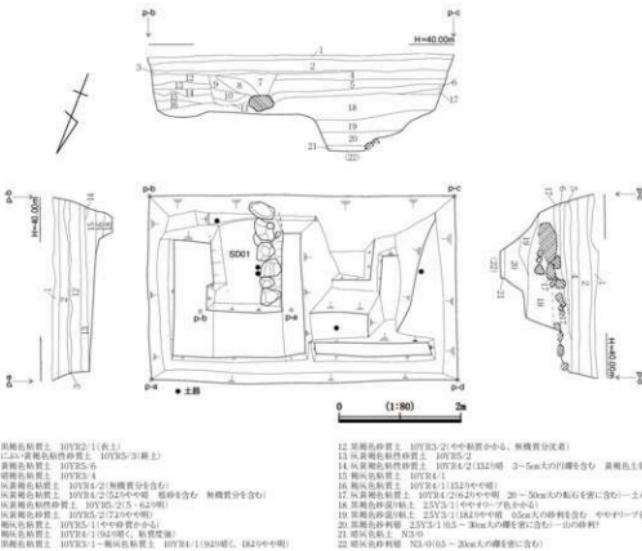
第54図 山根所在遺跡 第8トレチ実測図

第9トレチ(Tr 9)〔第55図 図版15・16〕

第2トレチの北約50m付近の休耕田に設定した東西方向に長い3×5mのトレチで、標高は39.8m程度である。

調査の結果、地表面下30cm(標高39.5m)付近の表土(第1層)・耕土(第2層)・床土とみられる黄褐色粘質土(第3層)の除去面からトレチを南北に横断する形で、その東側(高位側)に石垣を伴う幅1m程度の溝を検出した。埋土中からは僅かながら陶器片と土師器片が出土しているが、遺構の時期としては近世以降のものとみられる。

この遺構を境にして下位の層序は東西で厚さ50cm程度異なる。石垣の裏側(西側で高位側)では、この遺構面下に密度が低い遺物包含層(第4層:暗褐色粘質土)が認められ、須恵器片と土師器片が僅かに



第55図 山根所在遺跡 第9トレンチ実測図

出土しているが、以下は無遺物層で、地表面下40cm(標高約39.4m)以下に灰黄褐色粘質土(第5・6・17層)が続く。このうち第17層には20~50cm大の転石が密に含まれる。土砂崩れの様相を呈し、明瞭な遺構とは判断できない。

また遺構の東側では、遺構面下は黒褐色砂質土(第12層)・灰黄褐色粘性砂質土(第13・14層)・褐灰色粘質土(第15・16層)と続くが、狭小な調査範囲内からは遺構、遺物とも検出されなかった。

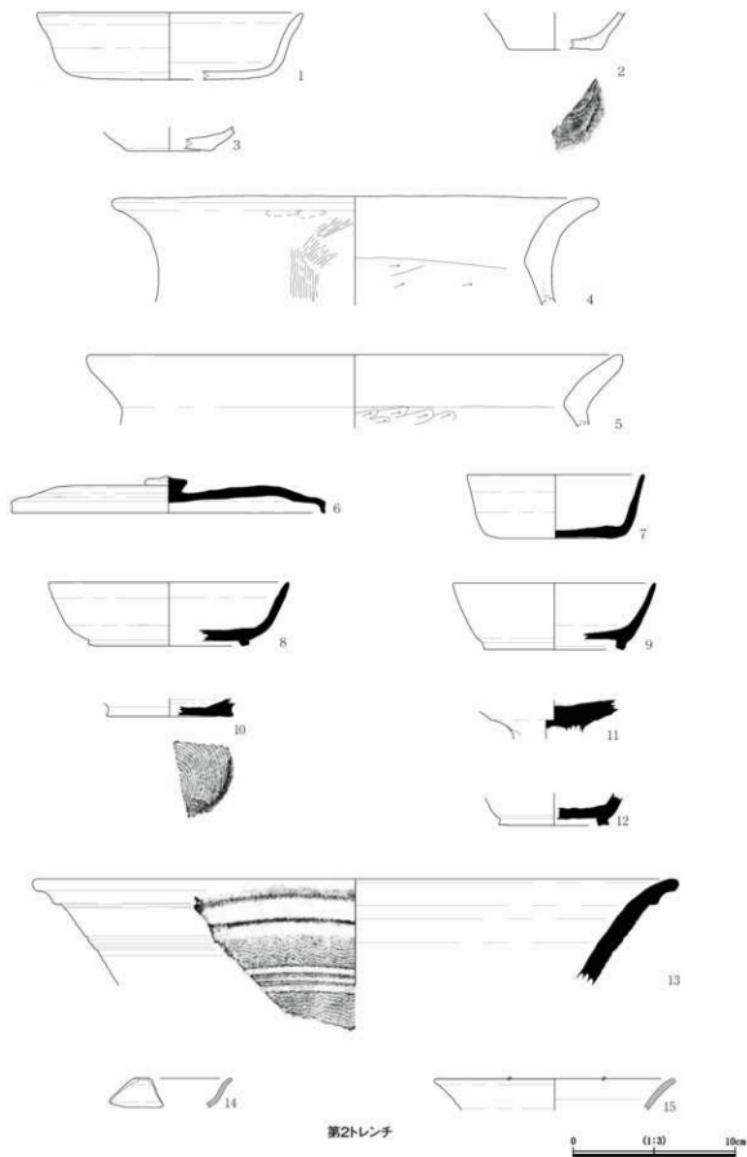
標高39.2m付近以下ではトレンチの東西とともに第18層(黒褐色砂混り粘土)となり、さらに黒褐色(第19、20層)や暗灰色(第21、22層)の粘土と砂利が互層状に標高38.2m付近まで堆積する。

なおいずれからも遺構・遺物は検出されなかった。

小結

今回の試掘調査は、圃場整備事業に伴うもので、事業計画内に8ヶ所の試掘トレンチを設定した後、さらに試掘調査の成果を充実させる目的で1ヶ所追加し、計9ヶ所の地点の遺構や遺物の有無を確認するものであった。

調査の結果、遺構は第2トレンチと第9トレンチから溝状遺構、第6トレンチからビットを1基検出した。第2トレンチの溝状遺構は遺構検出面の上層から出土した緑釉陶器や8世紀の須恵器などが出土地していることから古代以前のものと考えられる。続いて第9トレンチで検出した溝状遺構は、耕作土下で確認し石垣を伴う。ごく低い密度ながら遺物包含層を確認したが、これらの遺構は新しいとみられる。また、第5トレンチでは縄文土器が出土し、第7トレンチでも古墳時代の土師器が出土している。どのトレンチの調査成果も遺跡の本体はさらに高位に遺存する可能性が考えられる。今回、試掘調査を実施した山根集落の周辺は縄文遺物の散布地が数ヶ所確認され、古墳や城跡なども点在することから古くから人々の生活圏であったと想定される。今回、調査を実施した日置川の河岸段丘上には遺構や遺物包含

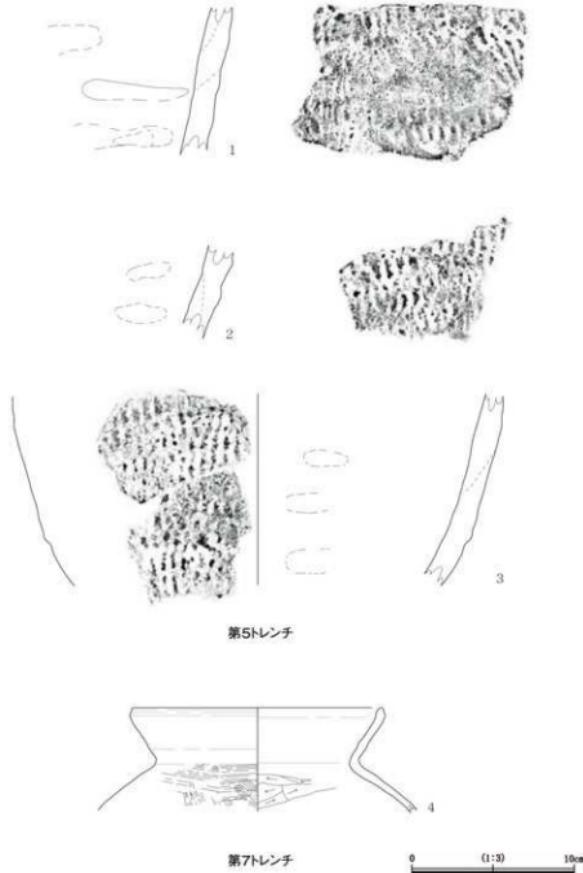


第56図 山根所在遺跡 出土遺物実測図1

層を確認でき、西岸には散布地も確認されている。山根集落周辺の開発工事の際には十分注意が必要であろう。

参考文献

- 谷口恭子ほか 2009『大坪大繩手遺跡』財団法人鳥取市文化財団
君嶋俊行ほか 2017『青谷上寺地遺跡14』鳥取県埋蔵文化財センター



第57図 山根所在遺跡 出土遺物実測図2

第13節 今木山所在遺跡

調査期間 平成30年(2018)4月20日～5月2日

調査地周辺には千代川支流の袋川中流域に広がる南北を山地に挟まれた法美平野が開けている。奈良時代から平安時代にかけては因幡国庁、因幡国分寺、国分尼寺(推定地)、大權寺等が展開して、古代因幡国の中心地として栄えた土地柄である。

この地域で人々の足跡が認められるのは縄文時代で、国庁跡の基盤層などから縄文土器片が出土している。

弥生時代には旧河川の自然堤防上や微高地上に安田遺跡や前田遺跡、そのほかの遺跡が形成されるようになり終末期には丘陵上に四隅突出型埴丘墓の糸谷1号墳が築かれている。

古墳時代に入ると周辺の丘陵上には多くの古墳が形成され、北側丘陵付近では宇倍神社本殿裏の龜金丘古墳(宮ノ下46号墳)や線刻塗画の残る鷺山古墳(町屋18号墳)などが、また南側丘陵付近では彩色塗画の残る国史跡梶山古墳などがよく知られており、本調査地の所在する今木山にも複数の古墳からなる今木山古墳群が展開している。

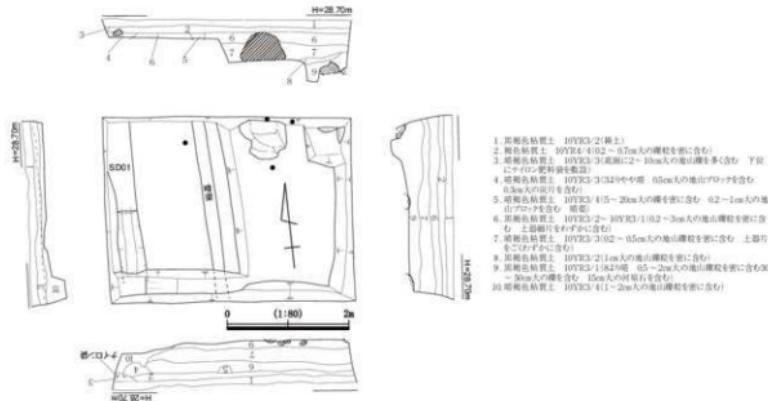
歴史時代になると上述のとおり奈良・平安時代の遺跡が多く営まれ、中世に入ると山城が丘陵上に形成される。

このように調査地周辺は縄文時代以降法美平野の安定した生活基盤を基に数多くの遺跡が形成されており、市内でも重要な遺跡地帯となっている。

今回の調査地は、大和三山になぞらえて因幡三山と呼ばれる瓢山、今木山、面影山のうちの今木山東側丘陵裾に位置する。現在計画されている水道送水施設(ポンプ場)の整備に伴うもので、畑作地に3m×4mのトレンチ2ヶ所(Tr 1・2)を設定した。上述のとおり周辺には多くの遺跡が密集し、この今木山の西裾付近が国分尼寺の推定地となっていることなどもあり、遺構・遺物の有無に主眼を置いて調査を実施した。



第58図 今木山所在遺跡 調査トレンチ位置図



第59図 今木山所在遺跡 第1トレーニチ実測図

第1トレーニチ(Tr 1)[第59図 図版16・17]

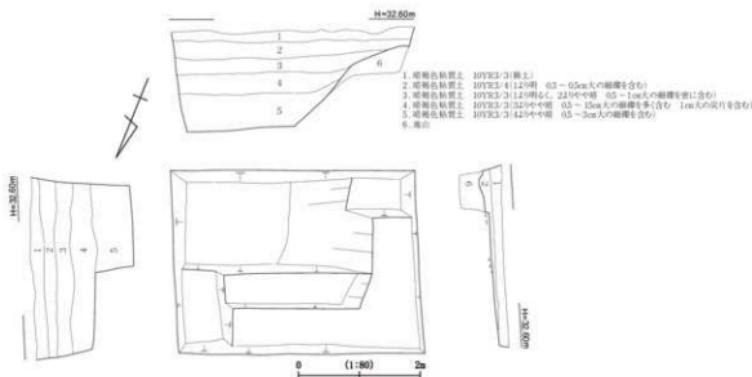
対象地の南東端の畑作地にて設定した3m×4mの東西方向にやや長いトレーニチである。約10cmの耕土下に10cm程度の客土(第2層：褐色粘質土)が認められ、トレーニチ西端部分からはこの第2層を掘り込む形で丘陵裾に平行ではば磁北方向に主軸をとる暗渠状の溝がナイロン系の肥料袋を敷きつめた状態で検出された。その下には黒褐色粘質土層(第6層)、暗褐色粘質土層(第7層)、黒褐色粘質土層(第9層)、暗褐色粘質土層(第10層)が堆積し、第6層上面からも2条の溝状遺構が検出されている。このうちトレーニチ西端付近からは上述の暗渠状溝に一部切られる形でそれとほぼ平行で磁北方向に主軸をとる溝状遺構(SD01：幅約40cm、深さ約12cm、検出長約285cm)を、さらにこれの東約1mに平行して同じく磁北方向に主軸をとる5～20cm太い地山塊を多く含む暗渠とみられる溝を検出した。いずれも遺物の出土はないが、後述の下位層出土の遺物・層序関係・暗渠の状況等から、中世以降で現代に近い遺構の可能性を考えられる。

なおこれら以外に遺構は検出されなかったが、第6層および第7層に僅かながら土器片が含まれる。このうち第6層からは中世頃とみられる土師器皿の細片等が出土し、第7層からは土師器細片とともに須恵器底部片等が出土している。

第2トレーニチ(Tr 2)[第60図 図版17]

第1トレーニチの北西約20m、3.8m程度上位で丘陵裾より一段上がった畑作地にて設定した3m×4mの西南西から東北東にやや長いトレーニチである。20cm弱の耕土下に20cm強の暗褐色粘質土層(第2層)が堆積し、丘陵上位側であるトレーニチ西端近くではこの第2層下から東に向かって地山が約40度の角度をもつて1.1m程傾斜し、その後再びほぼ水平になっている。その間に厚さがそれぞれ上位から15cm弱、20cm弱、30cm程度の暗褐色粘質土層(第3～5層)がほぼ水平に堆積する。このうち第2層および第3層から陶磁器片がごく僅かながら数点出土しており、前者のものは近世以降の肥前系陶器片、後者のものは中世の白磁片とみられる。

なお、トレーニチの西端部分については、畑地開墾時に丘陵斜面が削平された可能性が考えられるが、その東側の地山の傾斜の変換についてはその他に明瞭な遺構や遺物の出土もなく当該期の遺構としての人为的なものか判断が困難である。なおその他には当該期とみられる遺構は検出されなかった。



第60図 今木山所在遺跡 第2トレンチ実測図

小結

今回の調査は周辺の遺跡の集中状況から、遺構・遺物の有無確認に主眼を置いて実施した。その結果、第1トレンチの地表面下約20cm、中世遺物等の包含層とみられる第6層上面から暗渠と考えられる溝のほかにこの暗渠とほぼ平行の南北方向に延びる時期不明のSD01を検出したほか、その下の第7層からも僅かながら須恵器・土師器片が出土している。

また第2トレンチからは地表面下40cm以下に密度は極めて低いものの中世の遺物包含層とみられる第3層を検出したが、明瞭な遺構は検出されなかった。

このため、調査地の範囲においては当該期の明瞭な遺構を検出したとは言えないものの、周辺での工事等に際しては丁寧な確認調査と慎重な作業が望まれる。

第14節 吉岡温泉町所在遺跡

調査期間 平成30年(2018)5月24日～31日

吉岡温泉町所在遺跡は、鳥取市吉岡温泉町地内に所在し、毛無川を水源とする河川が運ぶ土砂によって形成された低湿な平野が広がっている。周辺の丘陵上には、松原古墳群や岩本古墳群、吉岡古墳群などの古墳が数多く展開し、中世には湖山池南西岸に防已尾城跡や丸山城跡などの山城が築かれている。平野部には、弥生時代から中世まで集落遺跡で知られる松原谷田遺跡や松原田中遺跡、單弁十二葉蓮華文軒丸瓦などの瓦が出土した吉岡遺跡(大海地区)などが所在している。

今回の試掘調査は道路の拡幅工事に伴うもので、工事計画地内に2ヶ所の試掘トレンチを設定した。



第61図 吉岡温泉町所在遺跡 調査トレンチ位置図

第1トレンチ(Tr 1)〔第62図 図版17〕

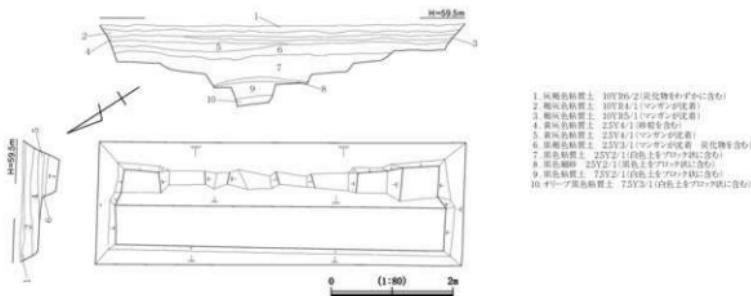
第1トレンチは、湖南地区公民館から北に約130mの地点、県道191号線沿いの水田耕作地に、南北方向に長い6.0×1.0mの試掘トレンチを設定した。

地表面直下20cm程度が現在の耕作土(第1・2層)で、その下に30cm程度の圃場整備時の客土(第3・4・5・6層)が認められ、マンガンの沈着や炭化物が含まれていた。第7層は黒色粘質土で、第8層は黒色細砂、第9層(黒色粘質土)、第10層(オリーブ黒色粘質土)と続き、各層は黒色土や白色土をブロック状に含んでいた。動物の影響がみられたため、層位ごとに精査したが人の生活痕を示す遺構や遺物は、確認することが出来なかった。

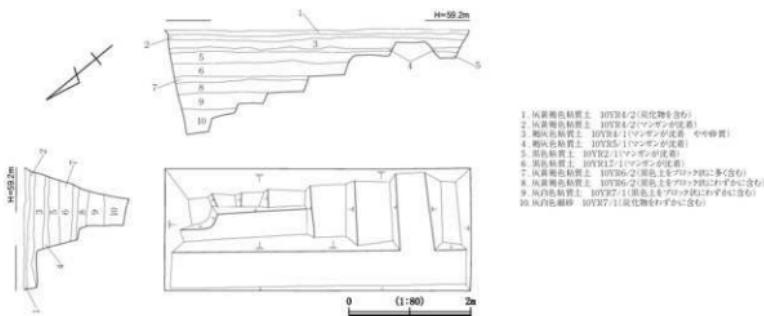
第2トレンチ(Tr 2)〔第63図 図版17〕

第2トレンチは、鳥取市立湖南学園から東に約80mの地点、県道191号線沿いの水田耕作地に、南北方向に長い5.0×1.0mの試掘トレンチを設定した。

地表面直下20cm程度が現在の耕作土(第1・2層)で、その下に30cm程度の圃場整備時の客土(第3・4・5・6層)が認められ、マンガンの沈着していた。第7・8層は灰黄褐色粘質土で、第9層は灰白色粘質土、第10層(灰白色細砂)と続き、炭化物や黒色土をブロック状に含んでいた。動物の影響が窺えたため、層位ごとに精査したが人の生活痕を示す遺構や遺物は、確認することが出来なかった。



第62図 吉岡温泉町所在遺跡 第1トレンチ実測図



第63図 吉岡温泉町所在遺跡 第2トレンチ実測図

小結

今回の試掘調査は、道路の拡幅工事に伴うもので、工事計画地内に2ヶ所の試掘トレンチを設定して、遺構や遺物の有無を確認するものであった。

第1トレンチと第2トレンチとともに人の痕跡を示す遺構や遺物を確認することが出来なかったものの堆積層には、炭化物や黒色土、白色土をブロック状に含み、人為的または動物の影響を受けている様子がうかがえた。この吉岡温泉町や松原地域には、集落遺跡や古墳などの遺跡が分布していることから、これらへの影響を受けたものと想定されるだろう。

参考文献

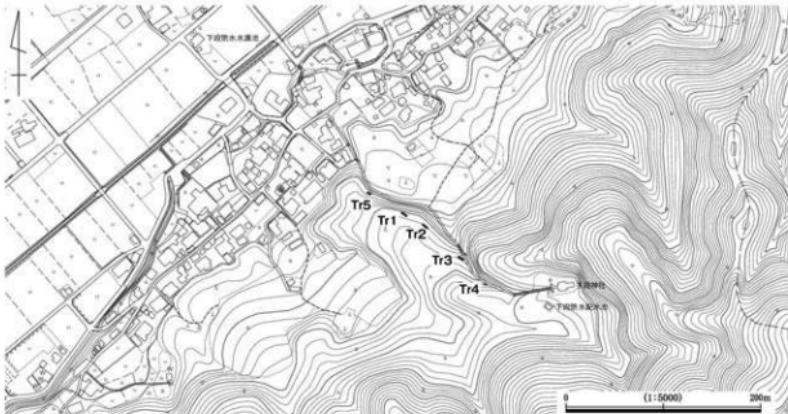
平凡社地方資料センター 1992『鳥取県の地名』平凡社

本間元樹ほか 2018『松原田中遺跡Ⅲ』公益財團法人鳥取県教育文化財團調査室

第15節 下段遺跡

調査期間 平成30年(2018)6月5日～29日

下段遺跡は、鳥取市下段地内に所在し、水源を高山と鶯峰山を谷間に発する野坂川沿いの山麓傾斜面に位置している。周辺には、本格的な発掘調査が行われていないものの丘陵上には古墳群が展開し、河岸段丘上には遺物の散布地が分布している。さらに野坂川の下流域には、縄文時代から続く集落遺跡の大柄遺跡や奈良三彩が出土した古市遺跡など多くの遺跡が所在し千代川に合流している。今回の発掘調査は砂防ダム建設事業に伴うもので、事業計画地内5箇所に試掘トレンチを設定し確認調査を行った。

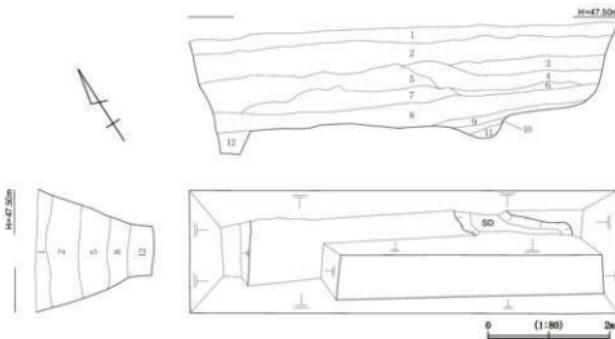


第64図 下段遺跡 調査トレンチ位置図

第1トレンチ(Tr 1)(第64・70図 図版18・29)

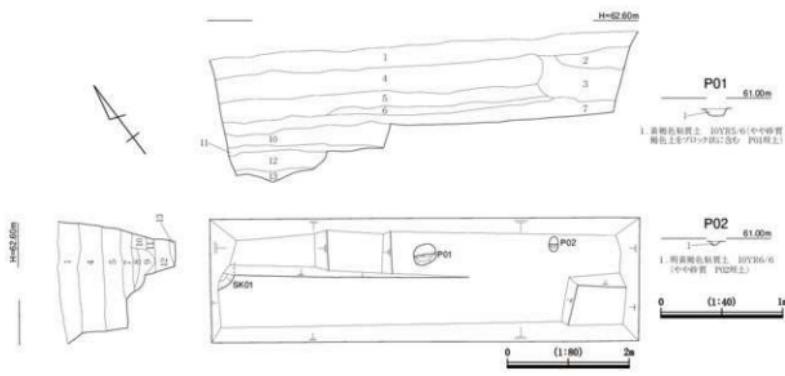
第1トレンチは、山麓傾斜面の標高約473mの地点、斜面に対して直交方向に7.0×2.0mのトレンチを設定した。地表面直下20~26cmが表土(第1層)で陶器が出土した。第2層は暗褐色粘質土で、砂粒を含み土器や陶器が出土した。第3層は褐色粘質土で角礫を含んでいた。第4層と第5層は、黒褐色粘質土で砂粒や角礫を含み土器や須恵器が出土した。第6層と第7層は、暗褐色の真砂土で砂粒や角礫を含んでいた。第8層は黒褐色粘質土で砂粒や炭化物を含み、第9層は褐色粘質土で砂粒を含み、弥生時代後期から古墳時代初頭の土器や複合口縁を有する土器が出土した。さらに、9層下面ではSDを検出した。SDは、断面にかかり埋土から土器が出土した。第13層は褐色粘質土で砂粒を含んでいた。

出土遺物のうち、第4・5層から出土した(1)と(3)、(7)、(8)及び第7層から出土した(9)、第8層から出土した(2)と(4)～(6)、(10)を図化した。(1)は壺で、頸部の内面にヘラケズリが施され、口縁部の外面波状文及び沈線が巡りわずかに外傾する。(2)は壺で、頸部は外傾し、内面はヘラケズリの後、内外面はナデ調整である。口縁部は外傾し、内面はミガキ施され、外面は沈線が巡る。(3)は壺で、頸部は外傾し、内面はヘラケズリが施される。口縁部は外傾し、内面はナデ調整で、外面は沈線が巡る。(4)は口縁部で、内面と外面下位はナデ調整で、外面上位は沈線が巡る。(5)は壺の口縁部で、内面はナデによる調整がみられ、外面は沈線が巡る。(6)は壺の口縁部で、外傾しナデ調整が施される。(7)は器台の受部で、内面と外面下位にミガキが施され、口縁部の外面に沈線が巡る。(8)は高杯の脚柱部で、内面はヘラケズリで外面はミガキの後、ナデ調整が施されている。(9)は低脚杯でナデ調整及び指オサエがみられる。(10)口縁部でナデ及びミガキが施される。ナデ及びミガキが施される。



1. にひい黄褐色粘質土 10YR3/3(砂粒を含む)
2. 喜欅色粘質土 10YR3/4(砂粒を含む)
3. 黄褐色粘質土 10YR3/4(砂粒を含む)
4. 黄褐色粘質土 10YR3/4(砂粒を含む)
5. 黄褐色粘質土 10YR2/3(角礫を含む)
6. 喜欅色粘質土 25YR4/4(砂粒を含む)
7. 喜欅色粘質土 10YR3/3(砂粒を含む)
8. 黄褐色粘質土 10YR2/2(砂粒及び炭化物を含む)
9. 喜欅色粘質土 10YR4/4(砂粒を含む)
10. 黄褐色粘質土 10YR3/4(砂粒を含む) (SD上)
11. 喜欅色粘質土 10YR3/4(砂粒を含む) (SD上)
12. 喜欅色粘質土 10YR4/4(砂粒を含む) (SD上)

第65図 下段遺跡 第1トレンチ実測図

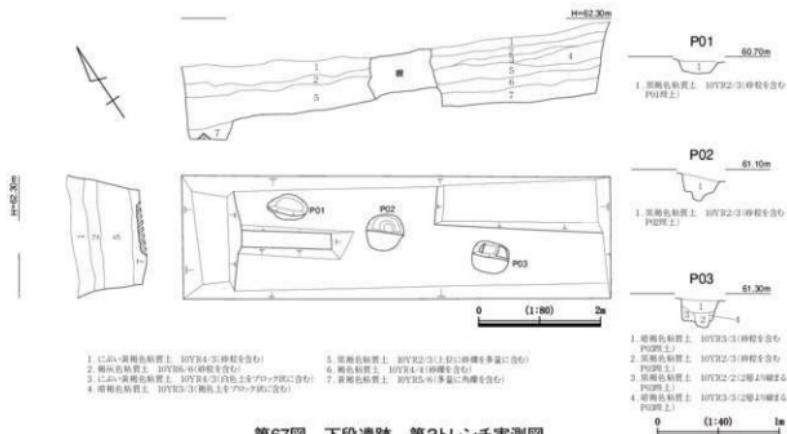


1. にひい黄褐色粘質土 10YR3/3(砂粒を含む)
2. 喜欅色粘質土 10YR2/3(砂粒を含む) (L付小砂利)
3. 黄褐色粘質土 10YR3/4(砂粒を含む) (L付小砂利)
4. 黄褐色粘質土 10YR3/4(砂粒を含む)
5. 黄褐色粘質土 10YR3/5(砂粒を含む)
6. 黄褐色粘質土 10YR3/6(砂粒を含む) (L付小砂利)
7. にひい黄褐色粘質土 10YR3/4(砂粒を含む) (砂粒を含む)
8. 明黄褐色粘質土 10YR3/6(黄褐色土をブロック状に含む) (SK01土)
9. (浅黄褐色粘質土 10YR3/4砂粒をブロック状に含む) (P01土)
10. 黄褐色粘質土 10YR3/4(砂粒を含む) (P01土)
11. 喜欅色粘質土 10YR3/4(砂粒を含む) (P01土)
12. にひい黄褐色粘質土 10YR3/3(砂粒を含む) (P01土)
13. 喜欅色粘質土 10YR3/4(砂粒を含む) (P01土)

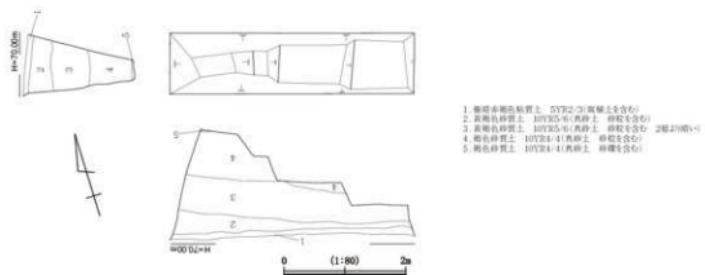
第66図 下段遺跡 第2トレンチ実測図

第2トレンチ(Tr 2)(第66図 図版18・19)

第2トレンチは、山麓傾斜面の標高約62.2mの地点、斜面に対して直交方向に7.0×2.0mのトレンチを設定した。地表面直下35cm程度が表土(第1層)であった。第2層と第3層は、しまりが非常に弱く角礫を含んでいた。周辺には後世の石垣がみられ、これに伴う堆積と想定した。また、第2層で陶磁器が出土した。次に、第4・5層は黄褐色粘質土で砂粒を含み、第6層は砂粒を第7層は角礫を含む暗褐色粘質土であった。第7層下面で土坑を1基、ピットを2基検出した。なお、遺物は出土しなかった。



第67図 下段遺跡 第3トレンチ実測図



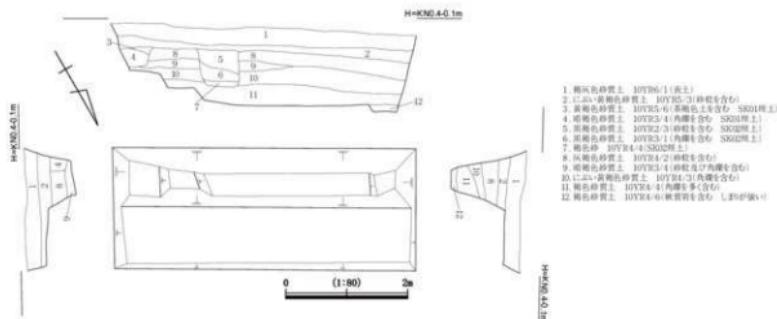
第68図 下段遺跡 第4トレンチ実測図

第3トレンチ(Tr 3)〔第67・70図 図版19・20・29〕

第3トレンチは、山麓傾斜面の標高約62.8mの地点、斜面に対して直交方向に3.7×1.0mの試掘トレンチを設定した。地表面直下20~30cmが表土(第1層)で、第2層は褐灰色粘質土で砂粒を含んでいた。第3層はにじみ黄褐色粘質土で白色土を含み、土師器や須恵器が出土した。さらに、第5層は黒褐色粘質土で上位に礫を多量に含み、土師器や須恵器が出土した。さらに第5層下面でピットを3基検出した。P01とP02の埋土から土師器や須恵器が出土した。第6層の褐色粘質土で砂粒を第7層の黄褐色粘質土で角礫を含み、以下も斜面上位から堆積した状況が続く。出土遺物のうち、第5層から出土した土師器の(11)と(12)を図化した。(11)は壺で、外面は指オサエで内面はナデ及びヘラケズギが施され口縁部は外傾する。(12)は壺で、磨滅が非常に著しく調整は不明瞭であるが、外面にハケ目や指オサエが施され口縁部は外傾する。

第4トレンチ(Tr 4)〔第68・70図 図版20〕

第4トレンチは、山麓傾斜面の標高約69.8mの地点、斜面に対して直交方向に4.3×1.0mの試掘トレンチを設定した。地表面直下10cm程度が表土(第1層)で、第2層から第5層は、しまりがない真砂土で砂



第69図 下段遺跡 第5トレンチ実測図

礫や砂粒を含んでいた。なお、人の生活痕を示す遺構や遺物は確認することが出来なかった。

第5トレンチ(Tr 5)(第69図 図版20)

第5トレンチは、山麓傾斜面の標高約43.6mの地点、斜面に対して直交方向に6.4×1.9mの試掘トレンチを設定した。地表面直下20~40cmの表土(第1層)で、土器や陶磁器が出土した。第2層はにぶい黄褐色粘質土で砂粒を含み、下面で土坑を2基検出した。土坑の規模は断面にかかっており詳細な法量は不明で、埋土はSK01が2層、SK02が3層に分かれ、第3層で土器が出土した。第8層は灰褐色粘質土で砂粒を含み、第9層は暗褐色粘質土で砂粒及び角礫を含んでいた。以下も斜面上位から堆積した状況が続く。

小結

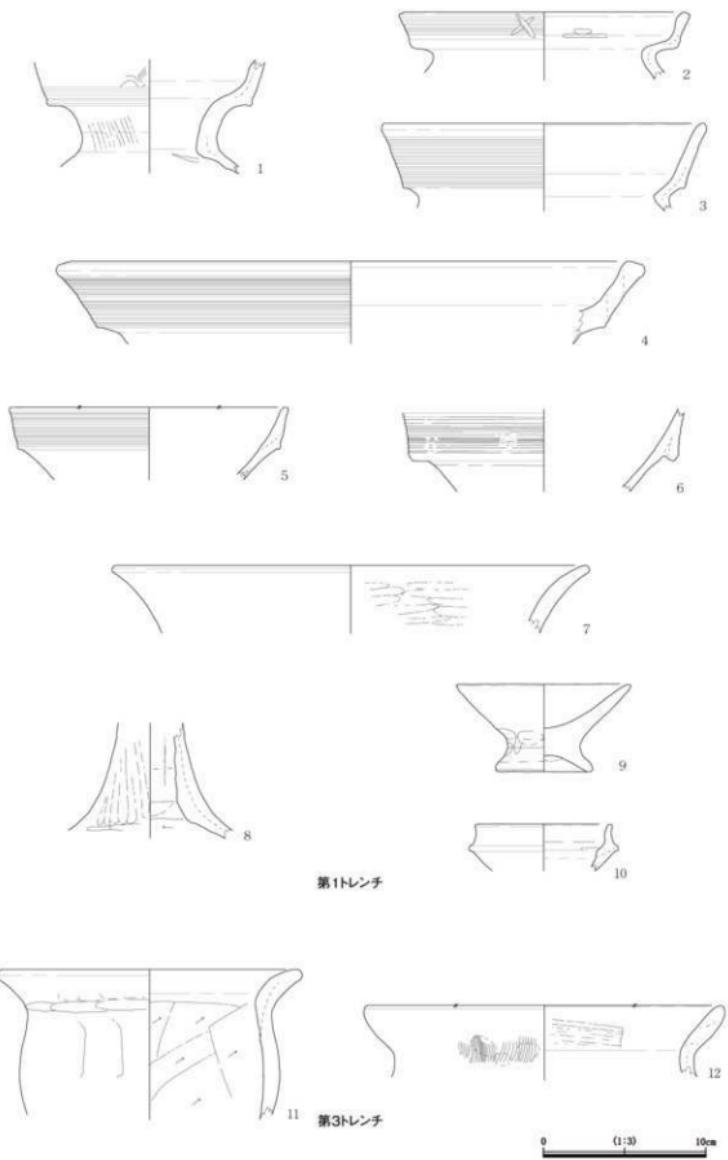
今回の試掘調査は、砂防ダム建設事業に伴うもので、事業計画内に5ヶ所の試掘トレンチを設定して、遺構や遺物の有無を確認するものであった。

調査の結果、遺構は第1トレンチから溝状遺構を1条、第2トレンチから土坑を1基とピットを2基、第3トレンチからピットを3基、第5トレンチから土坑を2基検出した。第1トレンチの溝状遺構の時期は埋土から土器は出土したが、細片であるため時期の特定をすることは出来ない。直上の層から弥生時代後期から古墳時代初頭の土器が出土していることから、それ以前の時期と想定する。次に、第2トレンチのピットの時期は伴う出土遺物がみられないため不明である。第3トレンチのピットの時期は、埋土の堆積状況からそれぞれほぼ同時期と想定するが、出土遺物が細片のため、時期を特定することは出来ない。直上の層で土器や須恵器が出土しているが、同じく細片のため、特定することは出来ない。第5トレンチの土坑の時期は、埋土の堆積状況からそれぞれほぼ同時期と想定するが、出土遺物が細片のため、時期を特定することは出来ない。

以上、下段集落周辺での本格的な発掘調査ではなく、周辺地域の様相について不明確な部分が多い。今回の調査地だけでなく、周辺にも遺跡が遺存する可能性が十分に考えられ、開発事業を行う際は注意が必要であるといえるだろう。

参考文献

- 水村直人ほか 2018『大柄遺跡IV』公益財團法人鳥取県教育文化財團調査
鳥取県立公文書館県史編さん室 2018『新鳥取県史(資料編)』鳥取県



第70図 下段遺跡 出土遺物実測図

第16節 浜坂所在遺跡

調査期間 平成30年(2018)7月9日～13日

浜坂所在遺跡は、鳥取市浜坂地内に所在し、鳥取県の三大河川のひとつである千代川下流域の右岸に位置している。周辺の丘陵上には、開地谷古墳群や覚寺古墳群、浜坂横穴墓群などが展開し、中世に山城も築かれている。また平野部には、弥生時代中期から中世まで続く集落遺跡として知られる秋里遺跡などが所在している。調査地は後世に果樹園が営まれていたようで、周辺には畠地がみられる。今回の調査は、校舎の拡張工事に伴うもので、工事計画地内に2ヶ所の試掘トレンチを設定した。



第71図 浜坂所在遺跡 調査トレンチ位置図

第1トレンチ(Tr 1)(第72図 図版20・21)

第1トレンチは、鳥取市立浜坂小学校から西に約50mの地点、南へ下る傾斜に合わせて直交方向に3.0×8.0mの試掘トレンチを設定した。

基本的な土層の層序は、地表面直下20cm程度が表土(第1層・第2層)で、陶磁器片がわずかに出土した。第2層下面の第3層と第4層・第5層・第6層は、比較的にしまりが弱く、畠地の際に用いられたものと考えられ、第4層でプラスチックのパイプ管を確認した。また、第3層から土師器片が出土した。次に、第7～第9層は、黒色土を帶状に含む斜交層理を確認した。第10層は褐色土をブロック状に含み、第11層は炭化物をわずかに含んでいた。第12層はやや粘質で在産と思われる擂鉢が出土した。精査したが、遺構を確認することは出来なかった。砂が中心の堆積であるため、2m程度掘削したところで、人力での掘削は危険であると判断した。そして、試掘トレンチの南側を重機で掘削することにした。重機掘削の範囲は、東西方向に約5.2m×22mであった。23mほど掘削したところで、褐色粘質土層を確認し、この下面で東西方向に延びている溝状遺構がみられた。埋土は、黒褐色粘質土で炭化物を含み、土師器片が出土した。

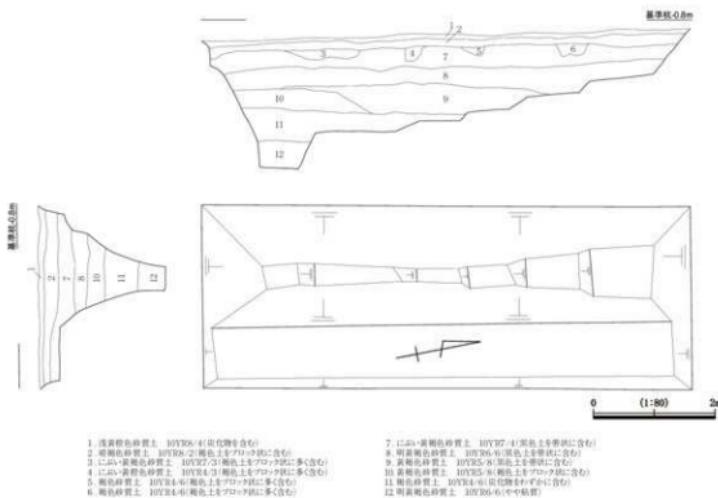
第2トレンチ(Tr 2)(第73図 図版21)

第2トレンチは、鳥取市立浜坂小学校から西に約100mの地点、南へ下る傾斜に合わせて直交方向に3.0×8.0mの試掘トレンチを設定した。

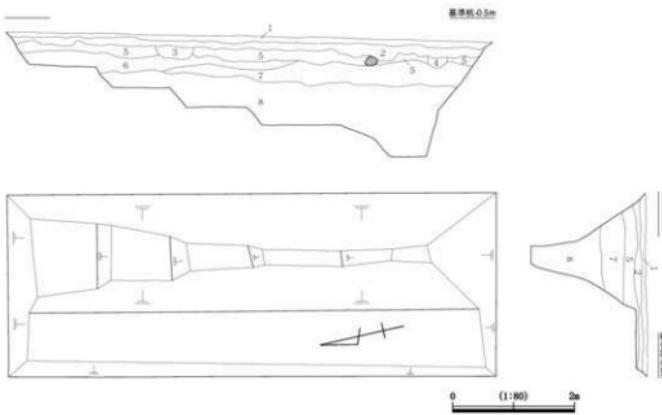
基本的な土層の層序は、地表面直下20cm程度が表土(第1・2層)であった。第2層下面の第3層と第4層は、比較的にしまりが弱く、畠地の際に用いられたものと考えられ、第3層でプラスチックのパイプ管を確認した。次に、第5層は砂粒をブロック状に含み、第6層はしまりが非常に強く砾を含んでいた。第7層、第8層は、黒色土を帶状に含む斜交層理を確認した。なお、人の生活痕を示す遺構や遺物は確認することが出来なかった。

小結

今回の試掘調査は、校舎の拡張工事に伴うもので、工事計画地内に2ヶ所の試掘トレンチを設定して、



第72図 浜坂所在遺跡 第1トレンチ実測図



第73図 浜坂所在遺跡 第2トレンチ実測図

遺構や遺物の有無を確認するものであった。第1トレンチでは第12層から在地産と思われる擂鉢が出土し、さらに下層で溝状遺構を確認した。浜坂所在遺跡の北東方向には、中世の山城が築かれており、周辺には集落が形成されたものと想定される。そのため、今回試掘調査を実施した周辺の開発工事を行う場合、十分に注意する必要があると言えるだろう。

第17節 岩吉遺跡

調査期間 平成30年(2018)7月24日～31日

今回の調査は宅地等の開発事業に伴うもので、鳥取平野中央に展開する岩吉遺跡の北西端境界付近の休耕田地に東西方向に長い2m×7mのトレンチ1ヶ所(Tr 1)を設定した。

岩吉遺跡ではこれまでに4次の本調査(1976・1982・1988～1991・1995年度)と複数の試掘調査が実施されており、調査地の東南東約500～700m付近からは弥生時代～古墳時代の遺物とともに掘立柱建物跡や井戸、土坑、溝や水田耕作に伴う畦畔等が検出され、自然分析からはこれらが広葉樹林を切り開いて開拓されたものとみられている。また南南東約700m付近からは多量の墨書き器や木簡類、木製祭祀具といった古代の遺物が出土し、掘立柱建物跡や溝が検出されている。

なお今回の調査対象地付近は上述のとおり本遺跡の北西側境界付近にあたることから、遺構・遺物の有無に主眼を置いて調査を実施した。



第74図 岩吉遺跡 調査トレンチ位置図

第1トレンチ(Tr 1)[第75図 図版21・22・29]

対象畑作地の北西端部に設定した東西方向にやや長いトレンチである。10～20cm程度の耕土(第1・2層)下に10cm程度の第3層(黄褐色シルト)が認められ、僅かに近代以降の陶器片が出土した。遺構としては、この第3層を切る形で搅乱状の土坑(SK01)が検出された。しかしながら耕作等によりローリングを受けた混入品とみられる須恵器や土師器の細片が出土した以外に時期を示す明瞭な遺物もなく、耕作土直下での検出であることや下位の第3層出土遺物などから、当該期の遺構とは判断できなかった。

またこの第3層の下、あるいは第3層がかぶる形で黒褐色～灰黄褐色・褐灰色系粘質土やシルトの第4・17～19層が10～20cmの厚さで堆積している。平面的には検出できなかったが、断面観察の結果、水田耕作に係る畦畔あるいは耕作土・ベース土の可能性が考えられる。時期的には第4層出土の陶器片、土師質の火舎片、土師器皿などから中世後半以降と考えられる。

その下の地表面下約0.4～0.6m程度は順層で、遺物包含層の第5(灰オリーブ粘土)・20(灰黄褐色粘土)・6(灰黄褐色粘質土)層が堆積する。遺物は須恵器杯(4)、土師器皿・甕(1)、土錐(6)、竈(2)、ミニチュア土器(3)などが検出されており、時期は調査地から約1.5km西に展開する天神山城の時期と同様

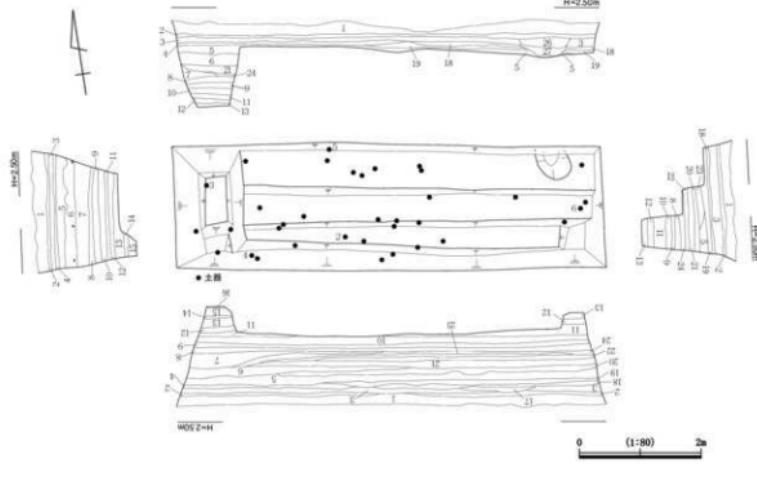
の中世、概ね16世紀台とみられる。

さらにその下には、第7～16層の粘土層が基本的に順層となって地表面下1.6m付近まで続くことを確認した。ただ第7層を窪める形で第21(灰褐色)・22(褐色)・23(灰黄色)・24(灰灰色)の粘土層が堆積するが、遺物もなく、自然の落ち込み状の堆積と考えられる。

小結

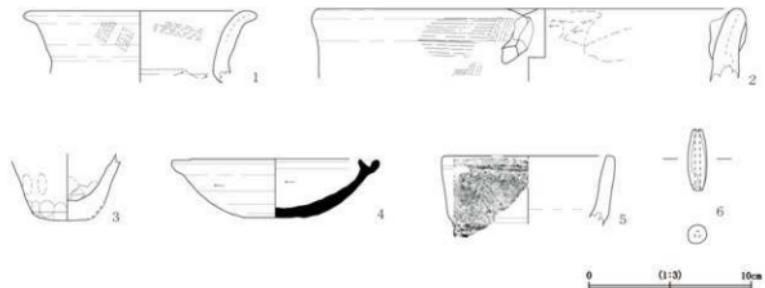
今回の調査は上述のとおり遺構・遺物の有無確認に主眼を置いて実施した。その結果、Tr 1 の現在の耕土下で擾乱とみられる土坑状の窪みを検出し、さらにその下の地表面下0.2m付近では、断面観察ながら水田耕作の可能性の考えられる層序の変化を確認した。時期は中世後半以降とみられる。

また、その下の地表面下約0.4m以下からは中世後半とみられる遺物包含層が認められた。しかしながら調査範囲内からは当該期の明瞭な遺構の検出は認められなかった。ただこの包含層中の出土遺物は比較的遺存状態も良く、周辺に遺構が遺存する可能性は考えられる。このため今回の調査対象地周辺においては開発等に際し慎重な対応が望まれる。



- 1. 黄褐色砂土 10YR 4/2(耕土)
- 2. 黄褐色砂土 10YR 5/2(1.2m) 黄土
- 3. 黄褐色砂土 10YR 5/2(0.5m) 黄色含む(灰褐色土を含む)
- 4. 黄褐色粘土 10YR 3/2-2(灰褐色粘土含む) 10YR 4/2(0.5-1cm)の窪みを含む 土踏
- 5. 黄褐色粘土 10YR 4/2(0.5m)
- 6. 黄褐色粘土 10YR 4/2(5.2m) 砂土(土礫を含む)
- 7. 黄褐色粘土 10YR 4/1-1 10YR 5/1
- 8. 黄褐色粘土 10YR 4/2
- 9. 黄褐色粘土 10YR 4/1
- 10. 黄褐色粘土 10YR 4/1
- 11. 黄褐色粘土 10YR 4/1
- 12. 黄褐色粘土 10YR 4/1(0.5-1cm)の窪みを含む
- 13. 黄褐色粘土 N3.0
- 14. 黄褐色粘土 2.5Y 2/2
- 15. 黑色粘土 10YR 2/1(黒褐色粘土を含む)
- 16. 黑色粘土 5Y 4/1
- 17. 黑色粘土 10YR 5/2-2(1.2m) やや(灰褐色土を含む) 0.3mの大穴(0.2m)を含む
- 18. 黄褐色粘土 10YR 4/2(0.5-1cm)の窪みを含む(1.7m) 0.5-1cmの大穴(0.2m)を含む 土踏(黄褐色粘土含む)
- 19. 黄褐色粘土 10YR 5/2(1cm)の窪みを含む 10YR 5/2(1.2m)やや(灰褐色土を含む) 0.5-1cmの大穴(0.2m)を含む
- 20. 黄褐色粘土 10YR 4/2(0.5-1cm) 0.5-1cmの大穴(0.2m)を含む
- 21. 黄褐色粘土 10YR 4/2-2 10YR 5/2-16. 20(20cm)の窪み 0.3-1cmの大穴(0.2m)を含む
- 22. 黄褐色粘土 2.5Y 4/1
- 23. 黄褐色粘土 2.5Y 4/1
- 24. 黄褐色粘土 2.5Y 4/1
- 25. 黄褐色粘土 3.5Y 2-5Y 6-2(3.2m)
- 26. 黄褐色粘土 2.5Y 4/2(0.5-1cm)の窪みを含む(0.5m)の大穴(0.2m)を含む
- 27. 黄褐色粘土 10YR 4/1(0.2-0.5m)の大穴(0.2m)を含む

第75図 岩吉遺跡 第1トレチ実測図



第76図 岩吉遺跡 出土遺物実測図

第18節 山手森谷上分遺跡

調査期間 平成30年(2018)7月30日～8月17日

山手森谷上分遺跡は、鳥取市河原町三谷地内に所在し、鳥取県の三大河川のひとつである千代川の右岸、河原駅から南に約300mの丘陵に位置している。周辺の丘陵上には、郷原古墳群や加賀瀬古墳群、宮岡古墳群など数多くの古墳群が展開し、微高地には中世の集落遺跡として知られる前田遺跡や單弁7葉蓮華文軒丸瓦が出土した郷原遺跡などが所在している。

また、現在は旧クリーンセンター駐車場になっている地点を河原町教育委員会が、平成5年度に試掘調査を行っている。調査の結果、堅穴建物跡や掘立柱建物跡、土坑などを検出し、土器が出土した。今回の発掘調査は、運動公園建設事業に伴うもので、事業計画地内4ヶ所に試掘トレンチを設定し確認調査を行った。



第77図 山手森谷上分遺跡 調査トレンチ位置図

第1トレンチ(Tr 1)(第78・82図 図版22・30)

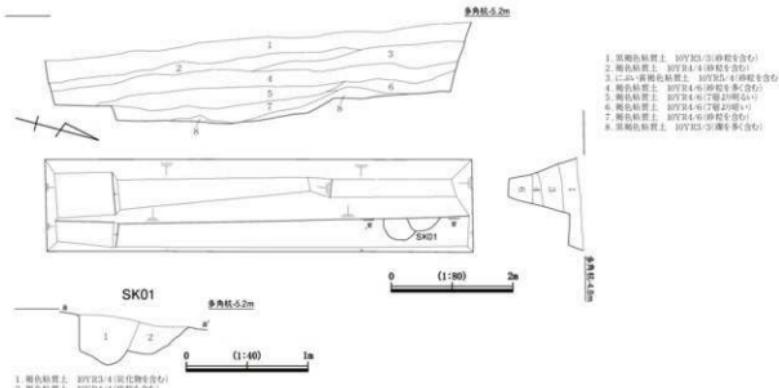
第1トレンチは、北西方向に延びる丘陵から、南西方向へ舌状に突出した支丘陵上、標高約82mの地点に7.0×1.5mの試掘トレンチを設定した。

基本的な土層の層序は、地表面直下20～35cmが表土(第1層)で、土器や須恵器、陶磁器が出土した。さらに、表土下面でSK01を検出した。次に第2層は褐色、第3層はにぶい黄褐色の粘質土で砂粒を含んでいた。以下も斜面上位から堆積した状況で続く。出土遺物のうち、第2層から出土した(1)の蓋杯の杯身を炭化した。底部はやや平坦でヘラケズリで、受部にかけて外傾しながら続き、外方に短くつまり出される。立ち上がりは内傾し縫部は細る。

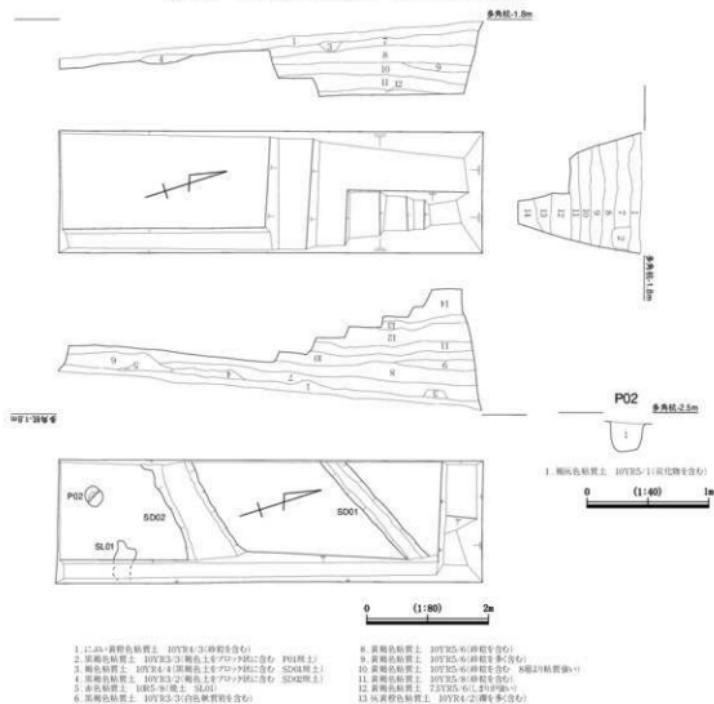
第2トレンチ(Tr 2)(第79・82図 図版22・23・30)

第2トレンチは、北西方向に延びる丘陵から、南西方向へ舌状に突出した支丘陵上、標高約86mの地点に7.0×2.0mの試掘トレンチを設定した。

基本的な土層の層序は、地表面直下10～20cmの表土(第1層)で、土器や須恵器が出土した。さらに、表土下面で溝状構造2条とピット2基、焼土範囲を検出した。溝状構造は、ともに直線的に伸び、SD02の埋土から赤彩が施された土器などが出土した。第6層は白色土で割れ目に黒色土が含む。第7



第78図 山手森谷上分遺跡 第1トレンチ実測図



第79図 山手森谷上分遺跡 第2トレンチ実測図

層～第10層は、黄褐色粘質土で砂粒の混入量や粘性が異なり、以下も斜面上位から堆積した状況が続く。出土遺物のうち、表土から出土した(2)・(3)・(4)・(5)を図化した。(2)は土師器の甕で口縁部のみ残存する。頸部内面にヘラケズリが施される。口縁部は外傾し、ナデによる調整がみられ、端部でわずかに内傾し丸くなる。(3)も同じく土師器の甕である。体部の内面はヘラケズリで、外面はハケ目が施され、頸部は「く」字状に屈曲する。口縁部は外傾し、ナデによる調整がみられる。(4)は土師器の高杯で受部のみが残存し、磨滅が非常に著しく調整不明瞭である。(5)は土師器の高杯で両面に赤彩が施される。受部の内面はミガキが施され、外面はハケ目がみられる。脚柱部の外面もミガキが施され、裾部は「ハ」字状に広がる。

第3トレンチ(Tr 3)(第80図 図版23)

第3トレンチは、北西方向に延びる丘陵から、南西方向へ舌状に突出した支丘陵上、標高約89mの地点に7.5×2.0mの試掘トレンチを設定した。基本的な土層の層序は、地表面直下10～30cmが表土(第1層)であった。第2層は褐色粘質土で砂粒を含み、第3層は疊を含むにぶい黄褐色粘質土であった。精査したが、人の生活痕を示す遺構や遺物は確認されなかった。

第4トレンチ(Tr 4)(第81図 図版24)

第1トレンチは、北西方向に延びる丘陵から、南西方向へ舌状に突出した支丘陵上、標高約90mの地点に7.0×2.0mの試掘トレンチを設定した。基本的な土層の層序は、地表面直下10～30cmが表土(第1層)で、第2層は砂粒を含む褐色粘質土であった。精査したが、人の生活痕を示す遺構や遺物は確認されなかった。

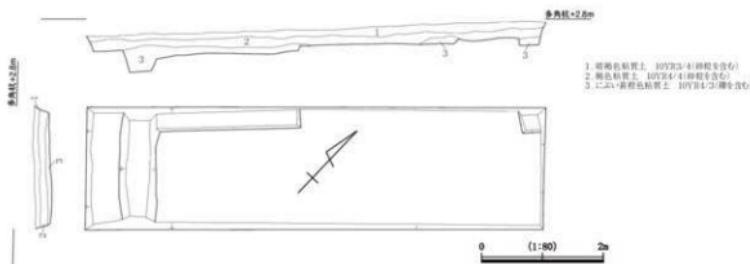
小結

今回の試掘調査は、運動公園建設事業に伴うもので、事業計画内に4ヶ所の試掘トレンチを設定して、遺構や遺物の有無を確認するものであった。

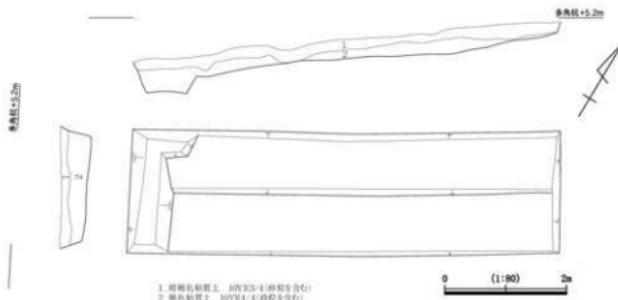
調査の結果、遺構は第1トレンチから土坑、第2トレンチから溝状遺構を2条及びピットを2基、焼土範囲を検出した。溝状遺構は、それぞれ幅が異なるもののともに東西方向へ延び規則性がみられた。さらに、焼土範囲も確認したことから、第2トレンチ周辺にはこの他にも遺構が検出される可能性が想定される。さらに、平成5年に河原町教育委員会が実施した発掘調査の成果と今回検出した遺構との関連性は十分に想定できるだろう。以上のことを含めても、今後、今回調査を実施した丘陵部の開発工事を行う際は十分に注意する必要があるだろう。

参考文献

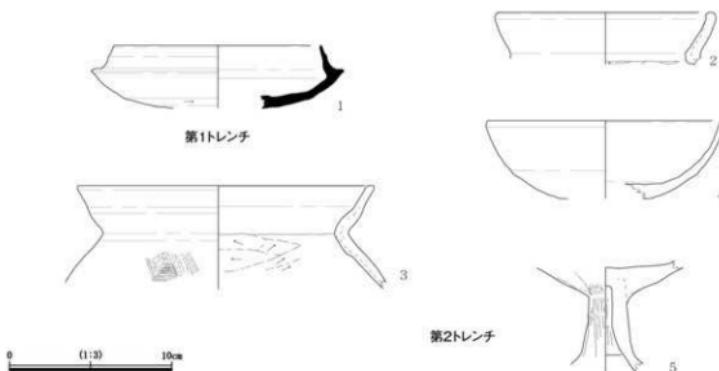
- 河原町教育委員会 1993『河原町内遺跡分布調査報告書』
- 山田真宏2018『山手地ユノ谷上分遺跡』公益財團法人鳥取市文化財団
- 横山聖 2018『山手古墳群』公益財團法人鳥取市文化財団



第80図 山手森谷上分遺跡 第3トレンチ実測図



第81図 山手森谷上分遺跡 第4トレンチ実測図



第82図 山手森谷上分遺跡 出土遺物実測図

第19節 宮長竹ヶ鼻遺跡

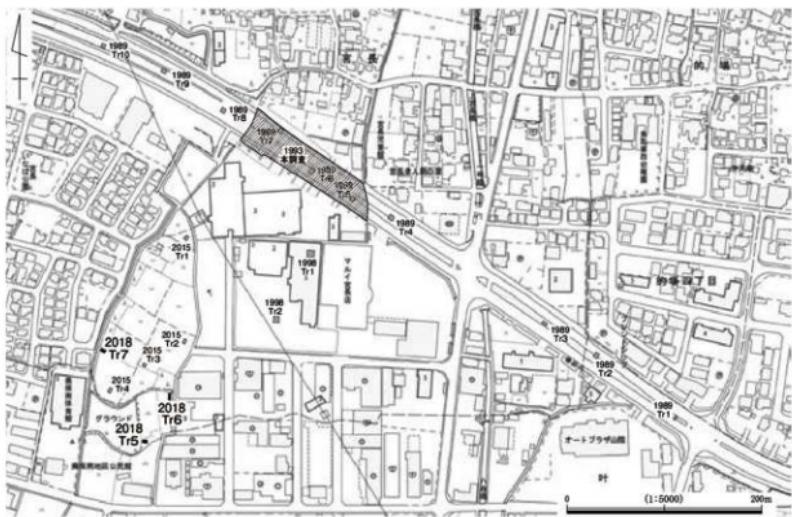
調査期間 平成30年(2018)10月1日～26日

宮長竹ヶ鼻遺跡はJR鳥取駅の南約2kmの鳥取市宮長周辺に展開する遺跡である。遺跡の北方約100mには大路川が、西方約500mには千代川が流れ、この千代川の旧流路にあたる西側は低地となっている。遺跡はこの旧流路右岸の自然堤防状の微高地に立地しており、周辺はかつては市内有数の水田地帯であった。

昭和63(1988)年度の遺跡分布踏査による遺物散布地の確認以降、平成元(1989)年度の道路建設に伴う試掘調査及び平成5(1993)年度の本調査、平成10(1998)年度の流通関連施設建設に伴う試掘調査、平成27(2015)年度には宅地造成に伴う試掘調査が実施され、これまでのところ本遺跡からは古墳時代から中世にかけての遺構・遺物が検出されている。これらの調査と相前後して工業団地の造成、国道バイパス建設、諸施設建設、宅地開発等が急速に進み、宮長・叶周辺地域は市街地化が進行している。

今回の調査は宅地開発計画に伴うものであるが、上述平成27年度試掘調査対象地に隣接地を含めてあらためて計画されたもので、対象地の南東側及び西側にトレントレンチ3ヶ所を設定し、遺構・遺物の有無に主眼を置いて調査を実施した。

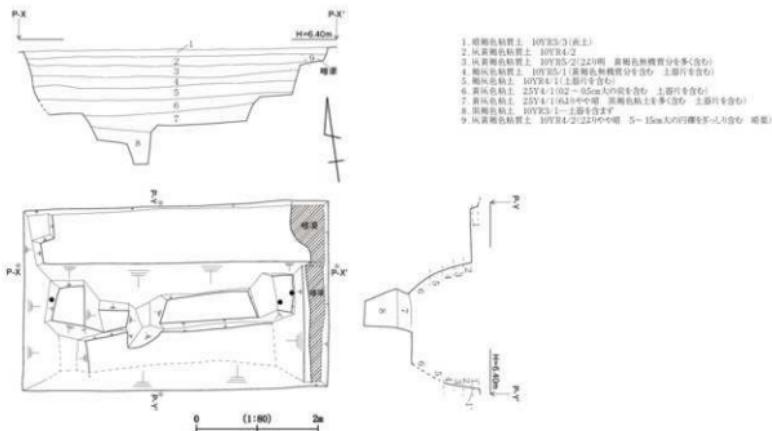
なお、各トレントレンチについては、27年度調査との混乱を避けるため、同年度調査トレントレンチ(Tr 1～4)の次の番号から名称を与えることとした(Tr 5～7)。



第83図 宮長竹ヶ鼻遺跡 調査トレントレンチ位置図

第5トレントレンチ(Tr 5)(第84・87図 図版24)

対象地の南東端の荒地に設定した、東西方向にやや長い(3.0m×5.0m)のトレントレンチである。上面標高は6.2～6.3mで、15cm程度の表土(第1層)下に10cm前後の第2層(灰黄褐色粘質土)が認められ、現代の陶器片が出土している。



第84図 宮長竹ヶ鼻遺跡 第5トレチ実測図

以下標高6m～5m付近に、上から下にそれぞれ厚さ20cm程度の第3層(灰褐色粘質土)、第4層(褐色粘質土)、第5層(褐色粘土)、第6層(灰褐色粘土)、第7層(灰褐色粘土)と続き、標高5m弱以下は第8層(黒褐色粘土: 標高4.35m付近まで確認)となる。

遺構としては、トレチ東端部の第2層上面から南北方向に延びる暗渠とみられる円碟集中箇所を検出したほかは検出されなかった。

遺物については第4～7層が遺物包含層で、第4層から土師器・須恵器片のほか土錐2点(2)が、第5層から土師器・須恵器片のほか土鍋片(1)1点と木器片が、第6・7層から土師器・須恵器片のほか木器片が出土している。時期的には、中世に相当するとみられる。なお、第8層は無遺物層とみられる。
第6トレチ(Tr 6)〔第85・87図 図版24〕

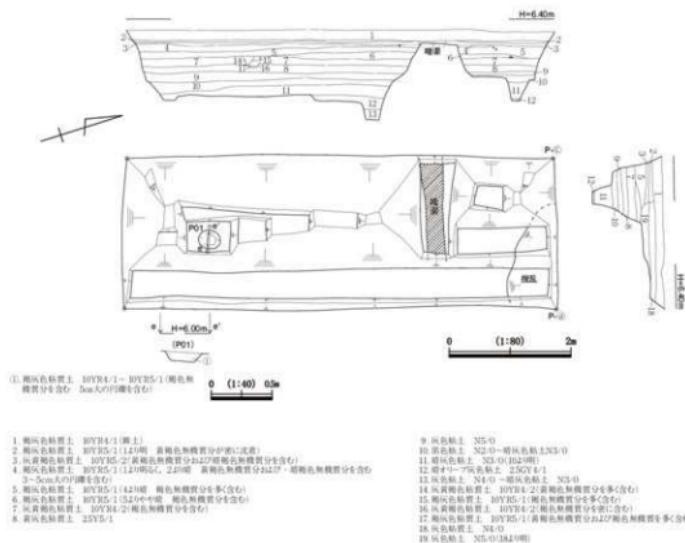
対象地の東端の水田休耕地に設定した、南北方向に細長い(25m×70m)のトレチである。上面標高は約6.2mで、20cm程度の耕土(第1層)・床土(第2層)下に10～15cm程度にわたって第3層(灰褐色粘質土)・第4層(褐色粘質土)が認められ、土師器片・須恵器片・陶器片や土錐が出土している。

続く地表面下0.3m(標高5.9m前後)には、厚さ10～15cm程度で土師器片・須恵器片を含む第5層(褐色粘質土)が堆積し、その上面から直径0.3m、深さ0.15m程度のピット状遺構1基(P01)を検出した。埋土上位には5cm大の川原石2ヶが認められる。またこの第5層除去面である第7層(灰褐色粘質土)上面から、トレチ西壁断面での検出であるが、直径0.3m、深さ0.3m程度のピット状遺構1基(P02)を検出した。

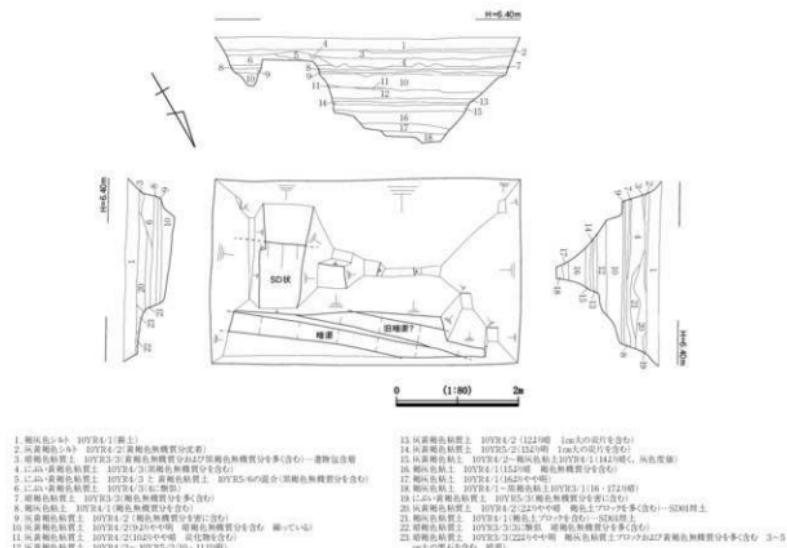
また、以下に続く第7層、第8層(褐色粘質土)は遺物包含層で、土師器片・須恵器・陶器片・瓦質土器片が出土している。

地表面下0.7m程度(標高約5.5m)の第9層(灰色粘土)以下、標高4.75m付近までは粘土層が続き、標高5.4m前後の第10層(黒色粘土)中に須恵器片が僅かに含まれる。

なお遺構は、調査地北端部耕土直下から検出した現代とみられる搅乱と5層・7層上面検出のピット状遺構以外には検出されなかった。第7層以下の遺物の状況からこれらの遺構の時期は中世以降とみられる。



第85図 宮長竹ヶ鼻遺跡 第6トレント実測図



第86図 宮長竹ヶ鼻遺跡 第7トレント実測図

第7トレンチ(Tr 7) [第86・87図 図版25]

対象地の北西端の水田耕地に設定した、東西方向にやや長い(3.0m×5.0m)のトレンチである。上面標高は約6.1mで、20cm程度の耕土(第1層)・床土(第2層)下から東西方向に延びる深さ20cm程度北側に下がる落ち込み状の遺構を検出した。北側の立ち上がりは暗渠のため確認できなかつたが、溝状遺構等の可能性も考えられる。遺構内からは土師器片・須恵器・陶器片が出土しており、時期は近世以降とみられる。続く地表面下30~40cmの第3層(暗褐色粘質土)からは土師器片・須恵器片や土鍋片(6)・土錘等が出土し、その下の第4層(にぶい黄褐色粘質土)からは土師器片や羽釜片(7)・陶器片が出土しており、時期は第4層出土の陶器片などから近世以降と考えられる。また同レベル付近では第4層の東側に黄褐色粘質土が部分的に多く混じる第5層が認められるが、その東には第4層に類似した第6層(にぶい黄褐色粘質土)となり遺構の可能性も考えたが、平面的にも不定形で遺構と判断するには至らなかつた。

地表面下約50cm(標高5.6m程度)以下に続く褐色無機質分を比較的多く含む第7層(暗褐色粘質土)・第8層(褐灰色粘土)・第9層(灰黄褐色粘土)も遺物包含層で、土師器片や須恵器片を含む。これらの除去面である地表面下約60cm(標高5.5m程度)の第10層(灰黄褐色粘質土)は比較的締まっており、その上面からは遺構は検出されなかつたものの炭の集中する範囲が認められた。また、下面付近にも部分的に炭化物を含む第11層(灰黄褐色粘質土)が認められる。

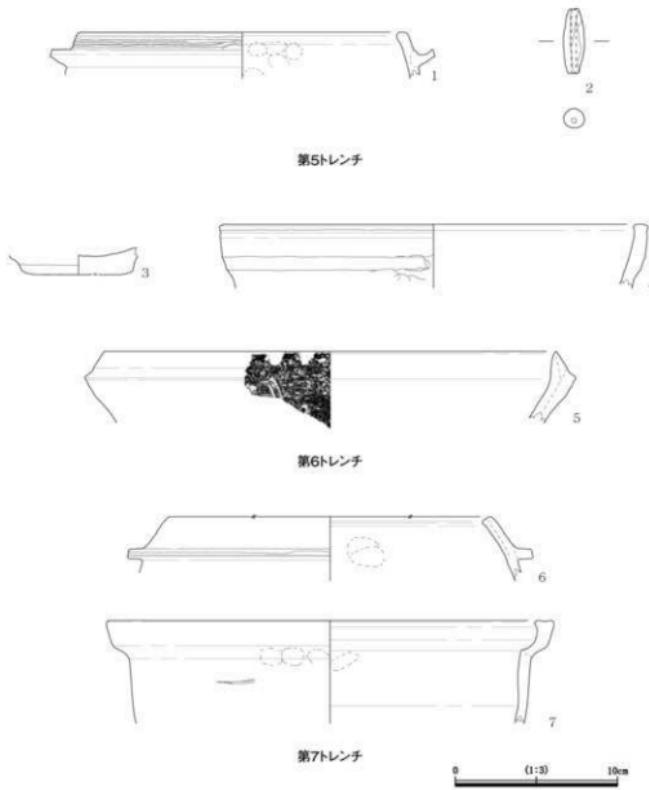
これらの第10・11層以下は粘土の順層で、標高4.4m付近まで第12~14層(灰黄褐色粘質土)・第15層(灰黄褐色粘土)・第16・17層(褐灰色粘土)・第18層(褐灰色粘土)が続く。なおこれらからは遺構、遺物は検出されなかつた。

小結

今回の調査は遺跡の広がりを検討する資料とすることも考慮しつつ遺構・遺物の有無確認に主眼を置いて実施した。その結果、第5トレンチでは地表面下0.45m程度以下から、中世遺物等の包含層とみられる第4~7層が確認されたものの当該期の遺構は検出されなかつた。また第6トレンチからは地表面下約0.3~0.4mの第5・7層上面からピット状遺構を検出するとともにその上下の遺物包含層からは中世とみられる遺物が検出されている。さらに第7トレンチでは溝状遺構の可能性も考えられる東西方向にのびる落ち込みを検出したが埋土中の遺物から近世以降のものとみられる。地表面下0.5~0.6m付近に遺物包含層の第7~9層を確認したが当該期の遺構は検出されなかつた。

既往調査結果とこれらから、本遺跡の範囲の境界の一つは第5トレンチと第6トレンチの間付近となる可能性が考えられる。また第7トレンチ付近についてはその北側が一段高くなつた微高地帯を呈しておらず、かつてその付近に寺院があったとの伝聞等も考慮するとこの段差のあたりに遺跡の境界の一つが想定される。

なお、本遺跡周辺は千代川水系の流路付近にあたり、その微地形は複雑となっており周辺での開発にあたってはきめの細かい確認調査や慎重な作業が必要である。



第87図 宮長竹ヶ鼻遺跡 出土遺物実測図

第20節 大井家ノ下モ遺跡

調査期間 平成30年(2018)11月13日～21日

大井家ノ下モ遺跡は千代川の支流である佐治川の南岸に形成された河岸段丘上に所在し、標高は135m前後で、上大井集落の東に位置する。周辺には大井1～3号墳、大井聖坂遺跡、大井経塚、熊野神社遺跡などが、また対岸の古市には上山根遺跡、屋敷遺跡などが所在し、「大井千軒」の伝承地でもあって、古くから人の営みが多く残る地域となっている。

このうち今回調査の本遺跡は、平成9年度に初めて確認され、翌10年度にはほ場整備に伴って発掘調査が実施されている。縦柱の建物跡や柵列、足跡などが検出されるとともに、墨書き土器や石鍋のほか多くの輸入陶器類が出土して中世の集落遺跡として知られることになった。また、平成16年度にも道路改良工事に伴って発掘調査が実施されており、ピットや中世の土器類が出土している。

今回の調査も道路改良工事に伴うものであるが、遺跡の広がりを確認するため、造構・遺物の有無確認に主眼を置いてトレントラバ(Tr 1)を設定した。

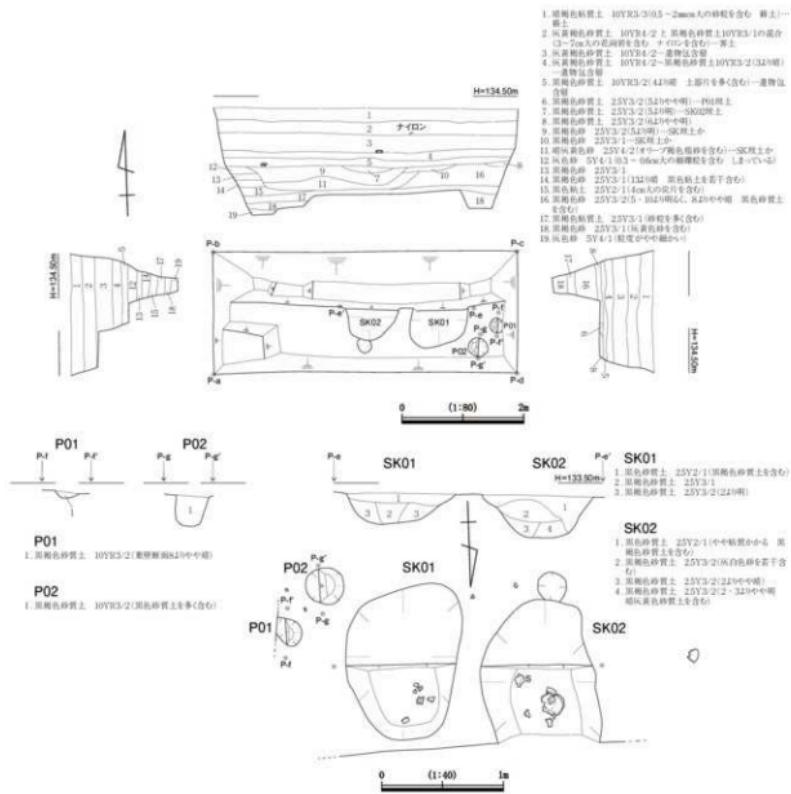


第88図 大井家ノ下モ遺跡 調査トレントラバ位置図

第1トレントラバ(Tr 1)[第89・90図 図版25・26・30]

対象地の水田に設定した、東西方向に長い(2.0m×5.0m)のトレントラバである。上面標高は134.3m程度で、約20cmの耕土(第1層)下に20cm程度の客土とみられる第2層(灰黄褐色砂質土と黒褐色砂質土の混合)が認められ、ナイロンのほか土師器片・漆器片が出土している。

以下標高133.9m～133.5m付近の第3層(灰黄褐色砂質土)・第4層(灰黄褐色砂質土～黒褐色砂質土)は遺物包含層で土師器片・須恵器片のほか瓦質の土鍋片や金属器等が出土している。その下の厚さ10～20cmの第5層(黒褐色砂質土)も遺物包含層で、流入とみられる縄文土器(1)が1点含まれるが、土師器片が多く出土しており、1点出土の須恵器片には墨書きが認められる。この第5層除去面が造構面とみられ長さ1m以上、幅約0.9m、深さ0.2～0.35m程度の土坑2基(SK01・02)を検出した。いずれからも古墳時代前期頃の土師器甕や壺が出土している。また直径0.2～0.3cm、深さ0.05～0.25m程度のピット状遺構(P01・02)も検出した。さらにトレントラバ北壁断面の観察によるとSK02埋土を含むように幅3.4m強、深さ0.4m程度の土坑状の落ち込みが認められ、その付近から弥生時代後期の土器片が多く出土している。



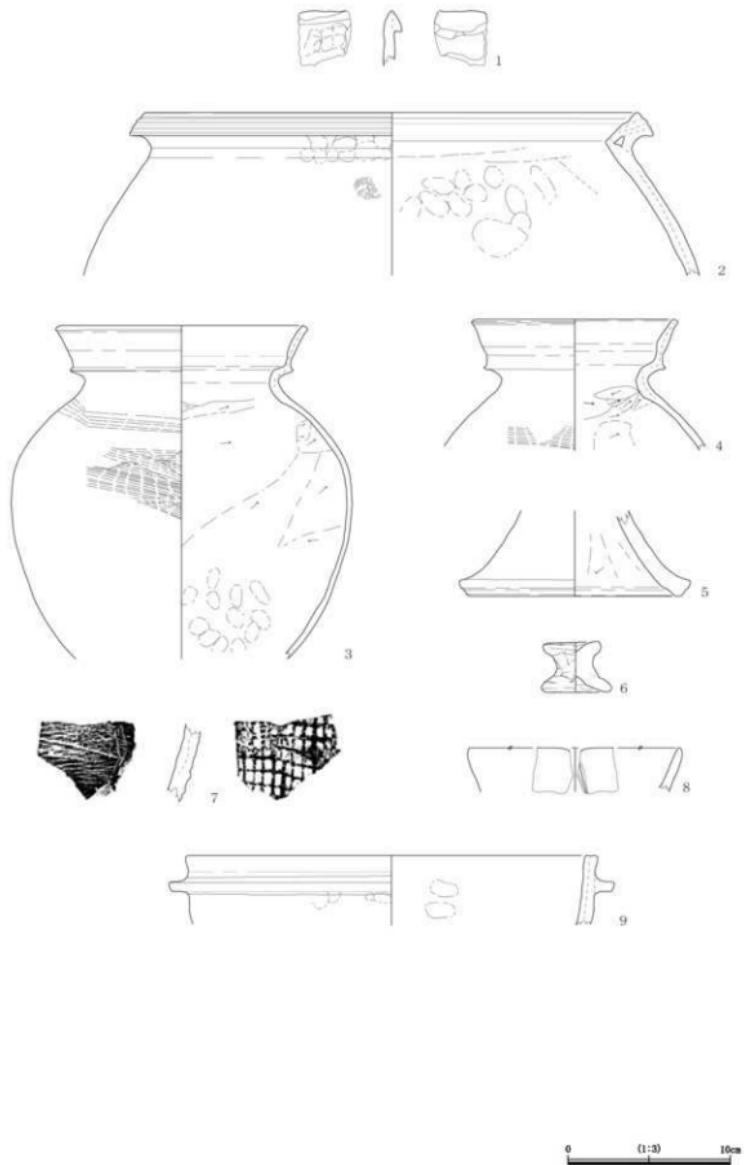
第89図 大井家ノ下モ遺跡 第1トレンチ実測図

トレンチ西側の標高約133.3m以下は順層で、第12層(灰色砂)、第13・14層(黒褐色砂)、第15層(黒色粘土)、第17層(黒褐色粘質土)、第18層(黒褐色砂)、第19層(灰色砂)と標高132.5m付近まで続く。

なおトレンチ東側の標高133.4m～133.0m付近には第16層(黒褐色砂)が堆積し、土器片が出土している。小結

今回の調査は上述のとおり遺構・遺物の有無確認および遺跡の広がりの検討資料を得ることを目的として実施した。その結果、これまでの本遺跡の調査では遺跡の主体は中世とみられてきたが、今回の調査でも包含層中の遺物に瓦質土器や青磁といった中世の時期のものが認められており、本トレンチの周辺にその時期の遺構が存在する可能性が示されたものと考えられる。

また標高133.3m付近の遺構面からは、古墳時代前期および弥生時代後期の土器を含む遺構が検出され、その時期の遺構が存在することが確認された。さらに、流入遺物で僅少ではあるが、晩期の縄文土器も出土しており、当該地域が古くから人の営みが認められることがあらためて確認された。さらに遺跡の範囲も上大井集落付近まで広がることが判明した。



第90図 大井家ノ下モ遺跡 出土遺物実測図

第21節 松原谷田遺跡

調査期間 平成30年(2018)12月5日～7日

今回の調査は通信基盤整備に伴って山陰道の南側で本道路に近接した丘陵裾付近の造成地に南西～北東方向に長い $2 \times 3\text{m}$ のトレンチ1ヶ所(Tr 1)を設定した。

調査対象地は鳥取市松原地内に所在し、JR鳥取駅の西約8km弱、名称に「池」とつく湖としては全国最大級の潟湖・湖山池の南西岸から500m程南に入った吉岡平野の東側丘陵裾付近に位置する。吉岡平野の中央には2級河川の湖山川が貫流し、調査地の南西約800mには古くから湯治場として開けた吉岡温泉街が形成されている。

今回の調査対象地の含まれる松原谷田遺跡は、1974(昭和49)年に鳥取県による健康増進センター建設に伴って発見された遺跡である。中国山地から北に延びる丘陵の最先端部に位置する独立丘陵上に展開する遺跡で、発見当時の発掘調査では弥生時代後期の土壙をはじめとして古墳時代前期の堅穴建物跡や、それ以降の土壙、古代～中世の掘立柱建物跡等の遺構や遺物が検出されている。

周辺の遺跡としては、本遺跡の前面に展開する平野部には松原田中遺跡が位置する。縄文時代晚期～中世前半の遺構・遺物が確認されており、弥生時代中期～古墳時代前期頃の生産域としての水田域と住居域の変遷が推察されている。また本遺跡の後背付近に展開する松原古墳群や100m程北東の丘陵上に展開する松原小奥遺跡からは古墳時代前期～終末期の古墳や横穴墓、中世～近世にかけての墓が調査され、多くの土器や陶器類、鉄製品が出土している。さらに西南西の独立丘陵上には、戦国時代にこの地域を支配した国人吉岡氏が築いたとされる丸山城も立地している。



第91図 松原谷田遺跡 調査トレンチ位置図

第1トレンチ(Tr 1)([第92図 図版26])

調査対象地は上述のとおり丘陵から平野部への変換点付近にあたり、標高は4.2m前後を測る。通信に伴うアンテナ等の設置が計画されており、 $2 \times 3\text{m}$ のトレンチで最深2.1m程度まで掘下げを実施した。

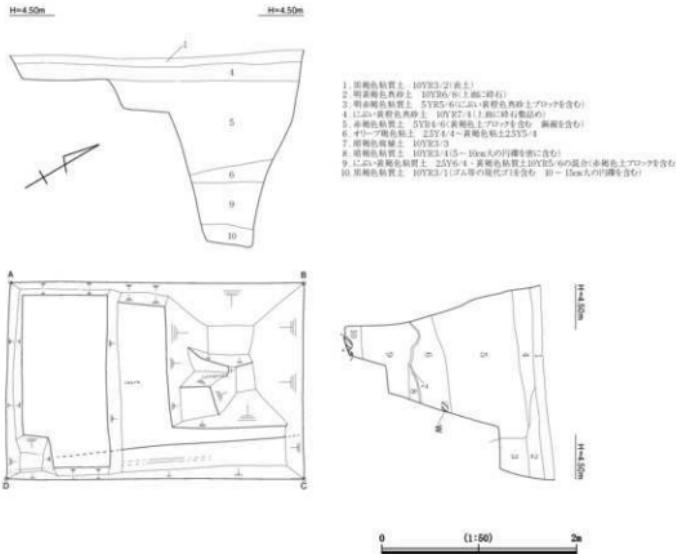
その結果、地表面下2m弱まで造成に伴う客土が認められ、その下に現代のゴムひも等を含む旧耕土の可能性が考えられる黒褐色粘質土(第10層)が堆積する(標高2.3m以下)。このうち客土は第10層の上に50cm程度の厚さでなされ(第9層)、一時期そのまま置かれたのか第9層上面に部分的に暗褐色の腐植

土層(第7層)が認められる(標高28m前後)。その後現況まで客土がなされ現表土下には碎石が敷設されている。調査地南東壁側には北東～南西方向にのびる水道管の埋設がこの客土中に認められる。

なお調査面積狭小のためオープン掘削ではこれ以上の掘削は困難で、調査範囲内では客土中から陶器片1点が出土したほか、旧耕土とみられる第10層から薄板状の木器細片が出土したに止まった。また、明瞭な遺構は検出されなかった。

小結

今回の調査地内からは遺構・遺物の検出については上述のとおりであった。しかしながらかつての松原谷田遺跡の調査では、調査地よりや丘陵上に寄ったあたりで溝状遺構が検出されており、また前面に広がる平野部では松原田中遺跡において水田域や住居域が確認されており、今後とも周辺の開発等に伴ってはきめの細かい対応が必要と考えられる。



第92図 松原谷田遺跡 第1トレチ実測図

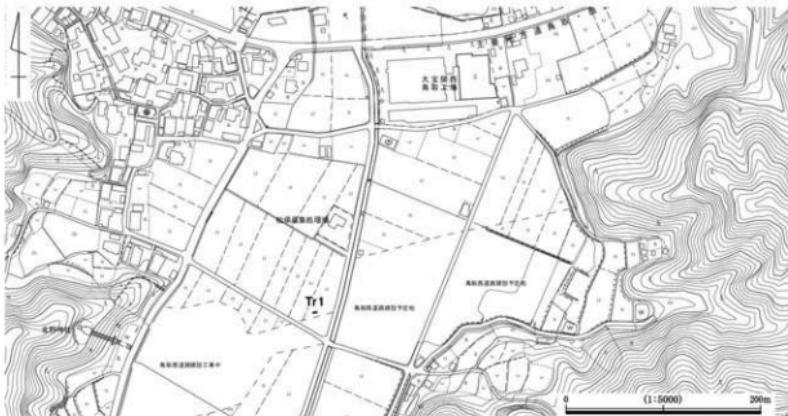
第22節 高住井手添遺跡

調査期間 平成31年(2019)2月25日～27日

高住井手添遺跡は鳥取市高住に所在する。鳥取市湖山池南岸、湖山池に向かって南方の山地からの土砂が形成する谷底平野に位置している。調査地及び周辺の平野部は耕地として主に利用されている。高住井手添遺跡は、南北方向に延びる谷底平野部の西側丘陵裾部に立地しており、この谷底平野及び湖山池面した東西の丘陵部には遺跡や古墳が所在することが確認されている。

湖山池周辺の人々の生活痕跡は縄文早期まで遡り、高住井手添遺跡でネガティブ押型文土器や高住牛輪谷遺跡などで黄鳥式併行期の押型文土器などが出土している。次に高住平田遺跡から縄文時代前期に比定される北白川下層式土器と多量の石錐も共に出土している。また少量であるが、高住平田遺跡から中期初頭の鷹島式土器や船元式土器などと石錐も共に出土し、高住井手添遺跡からも船元式土器が多数出土している。中期末から後期にかけては湖山池南東岸周辺を中心とした低湿地に生活の痕跡が顕著にみられ、晩期から弥生時代前期にかけて、千代川の自然堤防上や平野部の微高地状に遺跡が形成され、この時期に高住井手添遺跡では編組製品がまとまって出土している。弥生時代中期から後期にかけて、湖山池南岸から南東岸の平野部を中心に集落が形成されるようになり、高住字宮ノ谷の丘陵から流水文銅鐸や塞ノ谷遺跡から分銅形土器製品が出土している。さらに、弥生時代後期に入ると遺構数は増加し、布勢第2遺跡から玉作工房跡と思われる堅穴建物跡が検出されている。

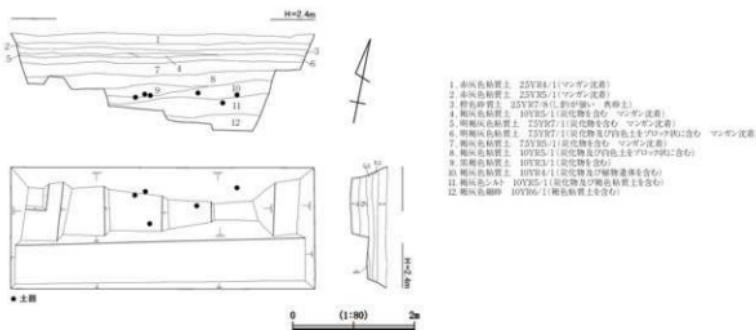
古墳時代に入ると湖山池周辺及び千代川西岸の丘陵上には数多くの古墳が築造されるようになる。古墳時代前期における高住井手添遺跡周辺の古墳は、弥生時代の系譜をひく桂見2号墳などの方墳が中心に築かれる。この時期は、千代川西岸に本高14号墳(全長63m)が築かれ、山陰地域最古級の前方後円墳である。中期になると、楢原1号墳(全長92m)が築かれ、未調査であるが因幡地域最大級の前方後円墳である。この他にも、里仁29号墳(全長81m)や古海36号墳(全長67m)などの大型古墳が湖山池南東岸に集中する。後期にも布勢古墳(全長59m)や大熊段1号墳(全長36m)など中期と比較すると小規模になるが湖山池南東岸に同じく前方後円墳が築造される。また、湖山池南岸の横穴式石室が内包される古墳としては高住12号墳や松原28号墳など数が少ないものの挙げられる。終末期古墳として湖山池東岸に山ヶ鼻古墳が7世紀中葉に築造される。古墳時代の集落遺跡については古墳に近接して営まれていることが多



第93図 高住井手添遺跡 調査トレーンチ位置図

く湖山池南岸から東岸の遺跡で確認されている。

今回、調査を実施した携帯電話基地局に伴うもので、工事計画地内に1ヶ所の試掘トレンチを設定した。



第94図 高住井手添遺跡 第1トレンチ実測図

第1トレンチ(Tr 1)(第94図 図版26・27・30)

鳥取市高住の松保地区農業集落排水処理施設から南へ約90mの地点に50×20mのトレンチを設定した。地表面直下20cm程度が現在の耕作土(第1・2層)で、その下に50cm程度の圃場整備時の客土(第3～7層)と想定した。第8層は褐灰色の第9層は黒褐色の粘質土で、炭化物や白色土をブロック状に含んでいた。第10層の褐灰色粘質土は炭化物と枝などの植物遺体を含み、第11層の褐灰色シルトは炭化物及び褐色粘質土を含んでいた。第12層の褐灰色細砂で褐色粘質土を含んでいた。層位ごとに精査したが遺構は確認することが出来なかった。なお、第4層から陶磁器、第9～11層から複合口縁を持つ古墳時代前期の土師器が出土した。出土遺物のうち、(1)を図化した。(1)は土師器の壺で体部内面はヘラケズりで口縁部内面と外面はナデ調整である。

小結

今回の試掘調査は、携帯電話基地局新設事業に伴うもので、工事計画地内に1ヶ所の試掘トレンチを設定して、遺構や遺物の有無を確認するものであった。

今回の調査で遺構を確認することが出来なかつたが、複合口縁を持つ土器が出土した。さらに、粘質土をブロック状に含む層や炭化物の混入など人為的影響が伺えた。前述したが、今回調査を実施した高住井手添遺跡の周辺古くから人々の生活の痕跡が確認出来、今回は遺構を検出することが出来なかつたが、周辺で遺構が検出される可能性は十分に考えられる。

参考文献

公益財團法人鳥取県教育文化財團調査室『高住井手添遺跡』2015年

公益財團法人鳥取県教育文化財團調査室『大柄遺跡Ⅲ』2018年

公益財團法人鳥取県教育文化財團調査室『大柄遺跡Ⅳ』2018年



第95図 高住井手添遺跡 出土遺物実測図

第23節 大柄遺跡

調査期間 平成31年(2019)3月13日～25日

大柄遺跡は昭和50年代に実施されたたほ場整備に伴う工事中に多くの土器が出土したことで発見された遺跡である。その後複数の試掘調査や県道拡幅工事等に伴う本調査が実施され、近年では、鳥取西道路整備に伴った大規模な本調査が行われている。その結果、これまでに本遺跡内から縄文時代後期～晩期の土器や弥生時代から古代にかけての遺構・遺物が検出され、遺跡の規模も東西約1.6km、南北約0.8kmといった広大な範囲が想定されている。

今回の調査も県道拡幅整備事業に伴って実施したもので、調査対象地は鳥取市大柄および宮谷地内に所在する。位置的にこれまで想定されてきた大柄遺跡の最西縁外にあたることから、遺跡の広がりとその性格を知ることを目的として、遺構・遺物の有無の確認に主眼を置いて野坂川北側土手を東西に走る県道鳥取河原用線に沿ってその法縫の水田部分に東西方向に長いトレンチ2ヶ所(Tr 1, 2)を設定した。



第96図 大柄遺跡 調査トレンチ位置図

第1トレンチ(Tr 1)【第97図 図版27】

調査対象地はJA鳥取いなば第2ライスセンターの西約40mで、上述のとおり東西方向の川土手上を走る県道から3m程度低い北側の法縫に位置する水田の道路拡幅予定地内にあたる。標高は10.1m程度で、設定した6.0×20mのトレンチの地表面下1.65m程度まで掘下げを行った。

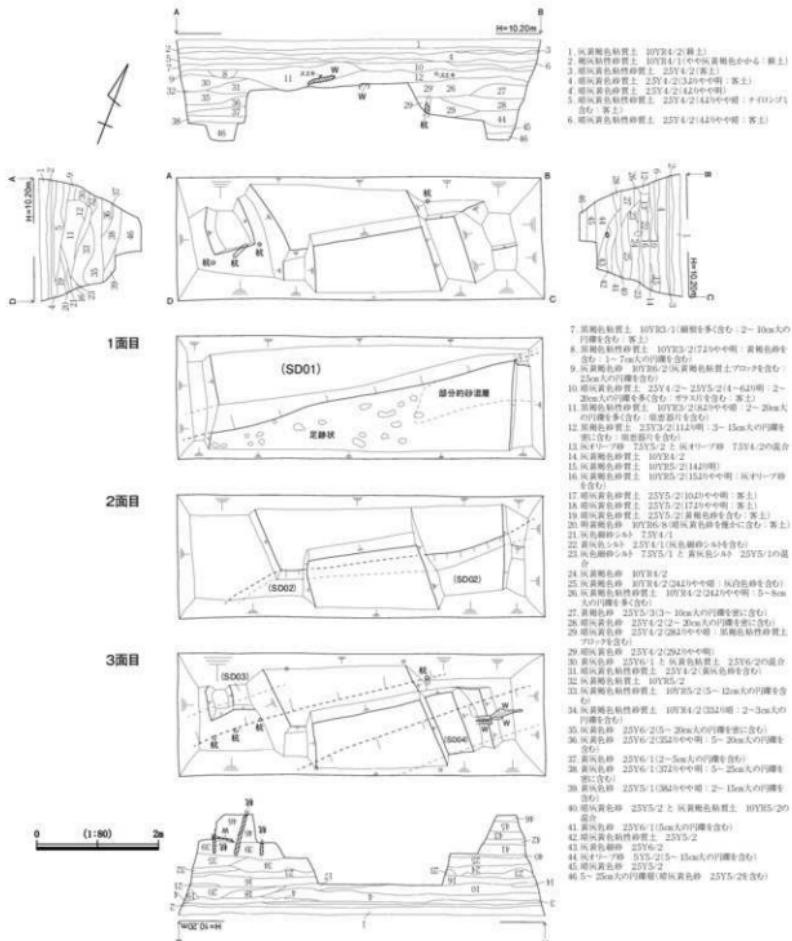
その結果、厚さ約20cmの耕土(第1、2層)下に30cm程度の客土(第3～7、10層)が認められる。この客土除去面(標高9.6m前後)から幅1.2m、深さ0.3m、検出長5m以上の溝状遺構(SD01)と足跡状の砂層の滲りを複数検出した。SD01埋土中からは磨滅した須恵器片2点が出土している(第1面)。

この下約20cmの標高9.4m付近からは、幅1.3m以上、深さ約0.3m、検出長5m以上の溝状遺構(SD02)を検出した。SD02底面付近からは磨滅した須恵器片1点が出土している(第2面)。

さらに30cm程掘下げた標高9.1m前後からは杭列を伴う幅1.1m以上、深さ約0.3m、検出長4m以上の溝状遺構(SD03)と断面観察により幅1.1m以上深さ約0.3m、検出長0.8m以上の溝状遺構(SD04)を検出した。このうちSD03埋土中からは磨滅した陶器片1点が、またSD04埋土中からは流木の可能性も考えられる木片が出土している(第3面)。

以下には第28・29層(暗灰黄色砂)・第39層(黄灰色砂)・第44層(灰オリーブ砂)・第45層(暗灰黄色砂)といった無遺物の砂層が標高8.9~8.5m付近まで続き、さらにその下は5~25cm大の円礫層が標高8.4m付近まで堆積することを確認した。

本トレントからは3面の遺構面とそれぞれから溝状遺構等を検出したが、最下面(第3面)検出のSD04から出土した陶器片から遺構の時期は中世から近世への移行期あるいは近世の可能性が考えられ、上位の第1、第2面はそれ以降の時期が想定される。



第97図 大柄遺跡 第1トレント実測図

第2トレンチ(Tr 2) [第98図 図版27]

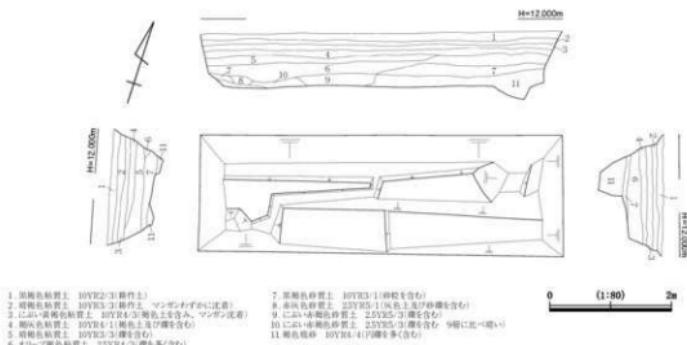
鳥取市宮谷のJA鳥取いなば第2ライスセンターから西へ約310mの水田部分に設定した6.0×2.0mのトレンチである。地表面直下20cm前後の第1・2層は耕作土、次の第3層にぶい黄褐色粘質土層は水田の底土と判断した。以下、第4層の褐灰色粘質土層から第10層にぶい赤褐色砂質土層までは場整備時の客土が統き、第11層は褐色粗砂層で円礫を多く含む。

なお、遺構及び遺物を確認することは出来なかった。

小結

今回の調査は上述のとおり遺構・遺物の有無確認および遺跡の広がりの検討資料を得ることを目的として実施した。その結果、第1トレンチでは流路の可能性が考えられる複数の溝状遺構が検出されたが、数少ない出土遺物から近世以降のものと考えられた。さらにそれらの下位には旧流路の川原状と考えられる厚い円礫の堆積層と多量の湧水が認められた。また第2トレンチでは遺構・遺物ともに検出されず、第1トレンチと同様の円礫層が客土層直下から検出されている。

これらのことから今回の調査範囲内においては当該期の遺構の広がりは認められなかつたと判断される。しかしながら調査地周辺は野坂川の流域にあたり、小規模な微高地状に遺構等が遺存する可能性もあり、周辺での工事等では十分な注意が必要である。



第98図 大柄遺跡 第2トレンチ実測図

写 真 図 版

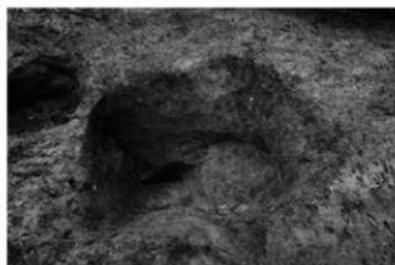
図版 1



山手地ユノ谷上分遺跡 調査地遠景(北から)



山手地ユノ谷上分遺跡 第1トレンチ完掘状況(東から)



山手地ユノ谷上分遺跡 第1トレンチSK平面(北から)



山手地ユノ谷上分遺跡 第2トレンチ完掘状況(東から)



山手地ユノ谷上分遺跡 第2トレンチ北断面(南から)



山手地ユノ谷上分遺跡 第3トレンチ完掘状況(東から)



山手地ユノ谷上分遺跡 第3トレンチ北断面(南から)



山手地ユノ谷上分遺跡 第4トレンチ完掘状況(東から)

図版 2



山手地ユノ谷上分遺跡 第4トレンチ北断面(南から)



山手地ユノ谷上分遺跡 第5トレンチ完掘状況(南から)



山手地ユノ谷上分遺跡 第5トレンチ北断面(南から)



山手地ユノ谷上分遺跡 第6トレンチ完掘状況(南から)



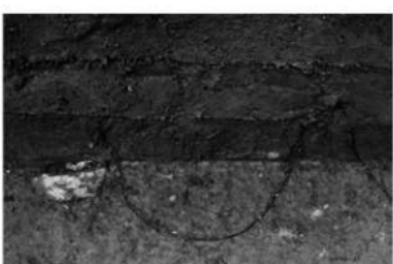
山手地ユノ谷上分遺跡 第6トレンチ西断面(東から)



山手地ユノ谷上分遺跡 第7トレンチ完掘状況(北から)



山手地ユノ谷上分遺跡 第7トレンチP01平面(北から)

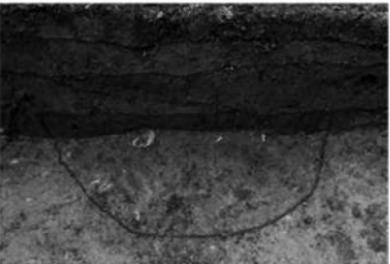


山手地ユノ谷上分遺跡 第7トレンチP02断面(西から)

図版3



山手地ユノ谷上分遺跡 第7トレンチSK01断面(西から)



山手地ユノ谷上分遺跡 第7トレンチSK02断面(西から)



山手地ユノ谷上分遺跡 第7トレンチ東断面(西から)



山手地ユノ谷上分遺跡 第8トレンチ完掘状況(西から)



山手地ユノ谷上分遺跡 第8トレンチ西断面(東から)



片山林立遺跡 第1トレンチ調査地遠景(北西から)



片山林立遺跡 第1トレンチ完掘状況(南から)



片山林立遺跡 第1トレンチ西壁断面(南東から)

図版 4



帆城遺跡 第1トレンチ調査地遠景(西から)



帆城遺跡 第1トレンチ第1遺構面(東から)



帆城遺跡 第1トレンチ第2遺構面(東から)



帆城遺跡 第1トレンチ土層断面(南東から)



鳴滝宮坂遺跡 調査地遠景(南東から)



鳴滝宮坂遺跡 第1トレンチ完掘状況(西から)



鳴滝宮坂遺跡 第1トレンチ土層断面(南西から)



古市遺跡 調査地遠景(北東から)

図版 5



古市遺跡 第1トレンチ完掘状況(東から)



古市遺跡 第1トレンチ南壁断面(北東から)



布勢所在遺跡 第1トレンチ調査地遠景(北西から)



布勢所在遺跡 第1トレンチ完掘状況(北から)



布勢所在遺跡 第1トレンチ第1構造面掘下げ状況(北から)



布勢所在遺跡 第1トレンチ土層断面(北東から)



布勢所在遺跡 第2トレンチ調査地遠景(北西から)



布勢所在遺跡 第2トレンチ完掘状況(北東から)

図版 6



布勢所在遺跡 第2トレンチ断面前(南東から)



曳田小寺遺跡 第13トレンチ調査前(東から)



曳田小寺遺跡 第13トレンチ完掘状況(東から)



曳田小寺遺跡 第13トレンチ土層断面(南東から)



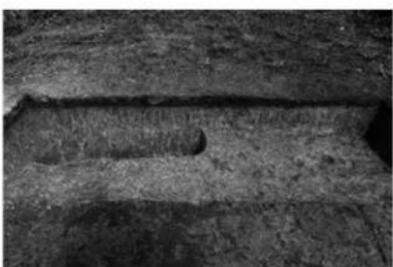
曳田小寺遺跡 第14トレンチ調査前(西から)



曳田小寺遺跡 第14トレンチ完掘状況(西から)



曳田小寺遺跡 第14トレンチ完掘状況(南から)



曳田小寺遺跡 第14トレンチ土層断面(西から)



青島第1遺跡 調査前(北から)



青島第1遺跡 第1トレンチ(北西から)



青島第1遺跡 第1トレンチ南断面(西から)



会下・郡家遺跡 A・B区調査地遠景(東から)



会下・郡家遺跡 A・B区調査地遠景(北西から)



会下・郡家遺跡 A・B区調査地遠景(北から)



会下・郡家遺跡 A区客土除去面遺構掘下げ状況(東から)



会下・郡家遺跡 A区客土除去面遺構掘下げ状況(西から)

図版 8



会下・郡家遺跡 A区第2面完掘状況(東から)



会下・郡家遺跡 A区南壁断面(北東から)



会下・郡家遺跡 A区 SD01(北から)



会下・郡家遺跡 A区南壁断面(北西から)



会下・郡家遺跡 A区 SK08(東から)



会下・郡家遺跡 B区客土除去面遺構検出状況(南西から)



会下・郡家遺跡 B区完掘状況(南から)



会下・郡家遺跡 B区西壁断面(南から)



会下・郡家遺跡 B区SK09(南から)



会下・郡家遺跡 B区SB01(北から)



会下・郡家遺跡 C区調査前(東から)



会下・郡家遺跡 C区トレンチ完掘状況(西から)



会下・郡家遺跡 C区トレンチ完掘状況(北から)



会下・郡家遺跡 C区トレンチ南壁断面(北西から)



会下・郡家遺跡 平成30年度調査地近景(南南東から)



会下・郡家遺跡 平成30年度第1トレンチ完掘状況(南西から)

図版 10



会下・郡家遺跡 平成30年度第1トレンチ完掘状況(北西から)



会下・郡家遺跡 平成30年度第2トレンチ完掘状況(北西から)



会下・郡家遺跡 平成30年度第2トレンチ南西壁断面(北北西から)



会下・郡家遺跡 平成30年度第2トレンチ遺物出土状況(北東から)



下味野所在遺跡 調査地中遠景(第1トレンチ付近:南から)



下味野所在遺跡 調査地中遠景(第3トレンチ付近:北から)



下味野所在遺跡 第1トレンチ完掘状況(西から)



下味野所在遺跡 第1トレンチ床土直下層遺物出土状況(北から)

図版 11



下味野所在遺跡 第1トレンチ西壁断面(北東から)



下味野所在遺跡 第1トレンチ南壁断面(北東から)



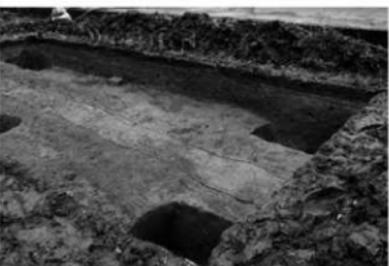
下味野所在遺跡 第1トレンチ内ピット状遺構断面(西から)



下味野所在遺跡 第2トレンチ完掘状況(西から)



下味野所在遺跡 第2トレンチ完掘状況(南から)



下味野所在遺跡 第2トレンチ北壁断面(南東から)



下味野所在遺跡 第2トレンチ東壁断面(北西から)



下味野所在遺跡 第2トレンチ北壁断面(東端)(南から)

図版 12



下味野所在遺跡 第3トレンチ第1面下掘下げ状況(東から)



下味野所在遺跡 第3トレンチ完掘状況(西から)



下味野所在遺跡 第3トレンチ南壁断面(北から)



下味野所在遺跡 第3トレンチ北壁断面(南西から)



下味野所在遺跡 第3トレンチ西壁断面(東から)



海士所在遺跡 調査前(南東から)



海士所在遺跡 完掘状況(西から)



海士所在遺跡 完掘状況(東から)



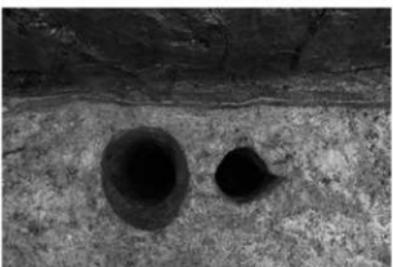
海士所在遺跡 北壁断面(南から)



海士所在遺跡 P02・01断面(南から)



海士所在遺跡 P02・01掘下げ状況(南から)



海士所在遺跡 P02・01完掘状況(南から)



山根所在遺跡 調査地遠景(南から)



山根所在遺跡 第1トレンチ完掘状況(東から)

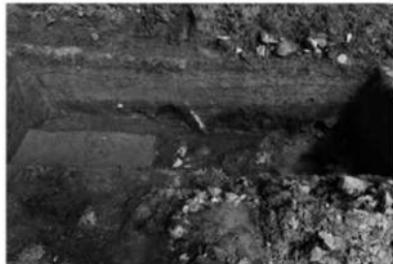


山根所在遺跡 第1トレンチ断面(西から)



山根所在遺跡 第2トレンチ完掘状況(東から)

図版 14



山根所在遺跡 第2トレンチ断面(南から)



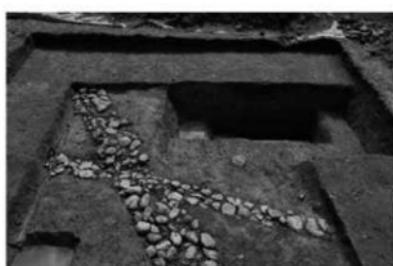
山根所在遺跡 第3トレンチ完掘状況(東から)



山根所在遺跡 第3トレンチ断面(南から)



山根所在遺跡 第4トレンチ完掘状況(東から)



山根所在遺跡 第4トレンチ断面(北から)



山根所在遺跡 第5トレンチ完掘状況(北から)



山根所在遺跡 第5トレンチ断面(東から)



山根所在遺跡 第6トレンチ完掘状況(北から)



山根所在遺跡 第6トレンチ断面(東から)



山根所在遺跡 第7トレンチ完掘状況(西から)



山根所在遺跡 第7トレンチ完掘状況(北から)



山根所在遺跡 第8トレンチ完掘状況(北から)



山根所在遺跡 第8トレンチ断面(南から)



山根所在遺跡 第9トレンチ調査地伐開後近景(北から)



山根所在遺跡 第9トレンチSD01及び石垣検出状況(東から)



山根所在遺跡 第9トレンチSD01断面(北から)

図版 16



山根所在遺跡 第9トレンチ完掘状況(北から)



山根所在遺跡 第9トレンチ完掘状況(西から)



山根所在遺跡 第9トレンチ西壁断面(東から)



今木山所在遺跡 調査地周辺(今木山)(北から)



今木山所在遺跡 調査地遠景(北から)



今木山所在遺跡 調査地近景(東から)



今木山所在遺跡 第1トレンチ完掘状況(南から)



今木山所在遺跡 第1トレンチ南壁断面(北から)



今木山所在遺跡 第1トレンチ SD01掘下げ状況(南から)



今木山所在遺跡 第2トレンチ完掘状況(北から)



今木山所在遺跡 第2トレンチ完掘状況(東から)



吉岡温泉町所在遺跡 調査地遠景(北から)



吉岡温泉町所在遺跡 第1トレンチ完掘状況(北から)



吉岡温泉町所在遺跡 第1トレンチ断面(北から)



吉岡温泉町所在遺跡 第2トレンチ完掘状況(南から)



吉岡温泉町所在遺跡 第2トレンチ断面(南から)

図版 18



下段遺跡 調査地遠景(北から)



下段遺跡 第1トレンチ完掘状況(東から)



下段遺跡 第1トレンチ断面(南から)



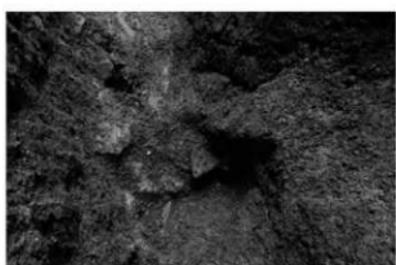
下段遺跡 第1トレンチ断面西側(南から)



下段遺跡 第1トレンチ断面(東から)



下段遺跡 第1トレンチSD02平面(南から)



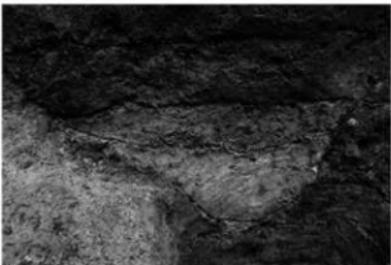
下段遺跡 第1トレンチSD断面(東から)



下段遺跡 第2トレンチ完掘状況(西から)



下段遺跡 第2トレンチ断面(南東から)



下段遺跡 第2トレンチSK01断面(東から)



下段遺跡 第2トレンチP01断面(東から)



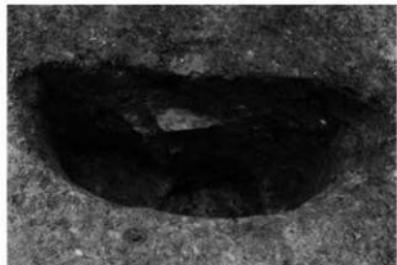
下段遺跡 第2トレンチP02断面(東から)



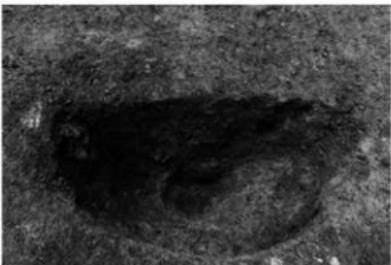
下段遺跡 第3トレンチ完掘状況(東から)



下段遺跡 第3トレンチ断面(南東から)

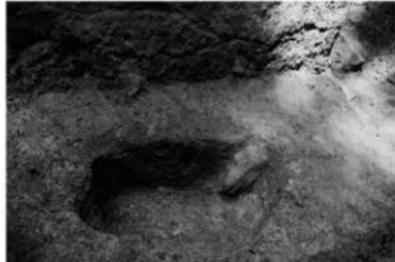


下段遺跡 第3トレンチP01断面(北から)



下段遺跡 第3トレンチP02断面(北から)

図版 20



下段遺跡 第3トレンチP03断面(北から)



下段遺跡 第4トレンチ完掘状況(西から)



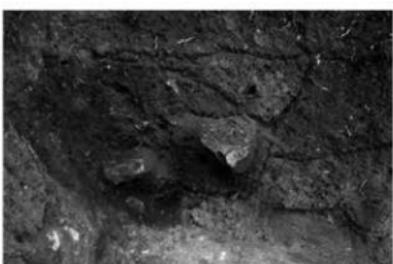
下段遺跡 第4トレンチ断面(北東から)



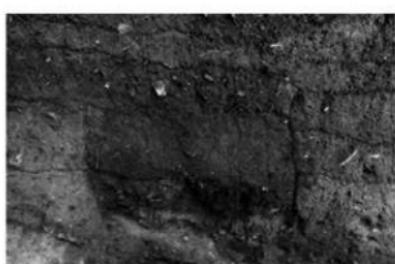
下段遺跡 第5トレンチ完掘状況(東から)



下段遺跡 第5トレンチ断面(北東から)



下段遺跡 第5トレンチSK01断面(北から)



下段遺跡 第5トレンチSK02断面(北から)



浜坂所在遺跡 調査地遠景(南から)

図版 21



浜坂所在遺跡 第1トレンチ完掘状況(南から)



浜坂所在遺跡 第1トレンチ重機SD断面(西から)



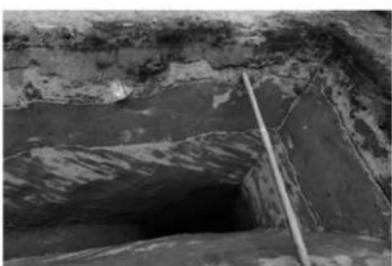
浜坂所在遺跡 第1トレンチ重機断面(北から)



浜坂所在遺跡 第1トレンチ断面(北から)



浜坂所在遺跡 第2トレンチ完掘状況(南から)



浜坂所在遺跡 第2トレンチ断面(西から)



岩吉遺跡 調査前(南から)



岩吉遺跡 第1トレンチ完掘状況(西から)

図版 22



岩吉遺跡 第1トレンチ西壁断面(東から)



岩吉遺跡 第1トレンチ南壁断面(北西から)



山手森谷上分遺跡 調査地遠景(西から)



山手森谷上分遺跡 第1トレンチ完掘状況(東から)



山手森谷上分遺跡 第1トレンチ断面(北東から)



山手森谷上分遺跡 第1トレンチSK01(南から)



山手森谷上分遺跡 第2トレンチ完掘状況(北から)



山手森谷上分遺跡 第2トレンチ断面(西から)



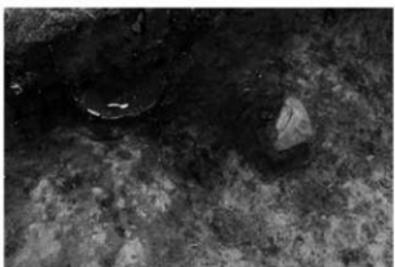
山手森谷上分遺跡 第2トレンチ P01断面(北から)



山手森谷上分遺跡 第2トレンチ P02断面(南から)



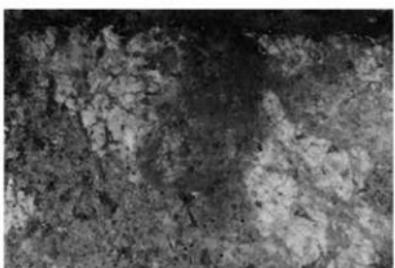
山手森谷上分遺跡 第2トレンチ SD01平面(東から)



山手森谷上分遺跡 第2トレンチ SD01出土遺物(東から)



山手森谷上分遺跡 第2トレンチ SD02平面(北から)



山手森谷上分遺跡 第2トレンチ焼土範囲(西から)



山手森谷上分遺跡 第3トレンチ発掘状況(南から)



山手森谷上分遺跡 第3トレンチ断面(東南から)

図版 24



山手森谷上分遺跡 第4トレンチ完掘状況(南から)



山手森谷上分遺跡 第4トレンチ断面(東から)



宮長竹ヶ鼻遺跡 調査地遠景(北から)



宮長竹ヶ鼻遺跡 第5トレンチ掘下げ状況(西から)



宮長竹ヶ鼻遺跡 第5トレンチ北壁断面(南東から)



宮長竹ヶ鼻遺跡 第6トレンチ完掘状況(北から)



宮長竹ヶ鼻遺跡 第6トレンチ完掘状況(東から)



宮長竹ヶ鼻遺跡 第6トレンチ第5層上面検出P01断面(北から)



宮長竹ヶ鼻遺跡 第7トレンチ掘下げ状況(北東から)



宮長竹ヶ鼻遺跡 第7トレンチ第1面SD01掘削後(北西から)



大井家ノ下モ遺跡 調査地遠景(東から)



大井家ノ下モ遺跡 第6層上面遺構検出状況(西から)



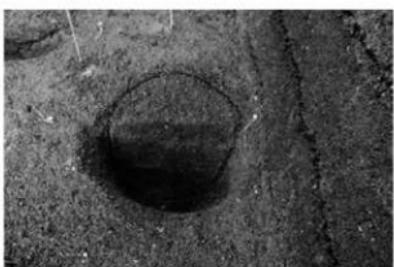
大井家ノ下モ遺跡 SK01検出状況(北から)



大井家ノ下モ遺跡 SK02検出状況(北から)



大井家ノ下モ遺跡 P01断面(西から)



大井家ノ下モ遺跡 P02断面(西から)

図版 26



大井家ノ下モ遺跡 第1トレンチ掘下げ状況(西から)



大井家ノ下モ遺跡 第1トレンチ北壁断面(南西から)



松原谷田遺跡 調査地周辺伐開後(北東から)



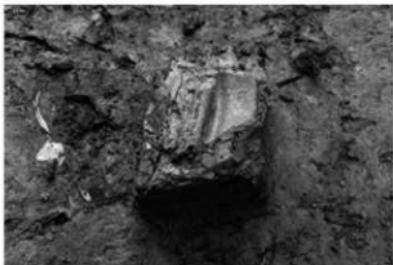
松原谷田遺跡 第1トレンチ北西壁断面(南東から)



松原谷田遺跡 第1トレンチ掘下げ状況(南西から)



高住井手添遺跡 調査地遠景(北西から)



高住井手添遺跡 第1トレンチ出土状況(南から)



高住井手添遺跡 第1トレンチ断面(南西から)



高住井手添遺跡 第1トレンチ調査後(西から)



大柄遺跡 第2トレンチ(南西から)



大柄遺跡 第1トレンチ第3面杭列検出状況(西から)



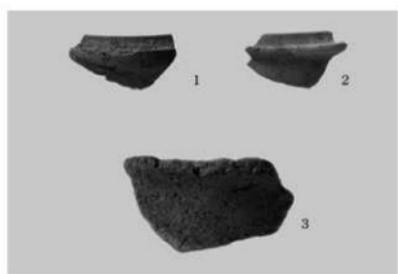
大柄遺跡 第1トレンチ北壁断面(南東から)



大柄遺跡 第2トレンチ掘下げ状況(東から)



大柄遺跡 第2トレンチ掘下げ状況(南から)



山手地ユノ谷上分遺跡 出土遺物

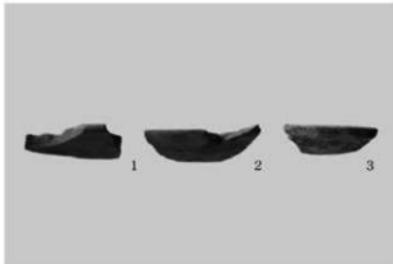


帆城遺跡 出土遺物 1

図版 28



帆城遺跡 出土遺物 2



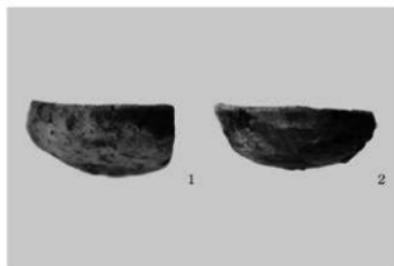
布勢所在遺跡 出土遺物 1



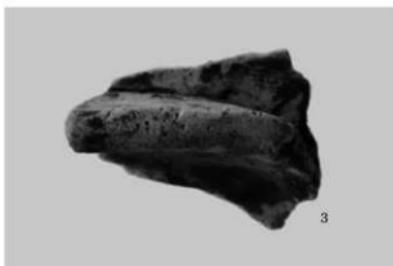
布勢所在遺跡 出土遺物 2



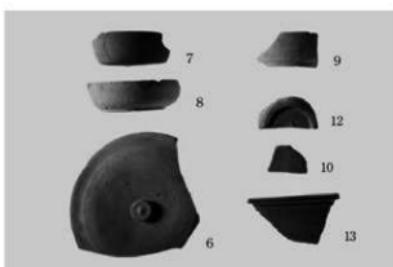
下味野所在遺跡 出土遺物



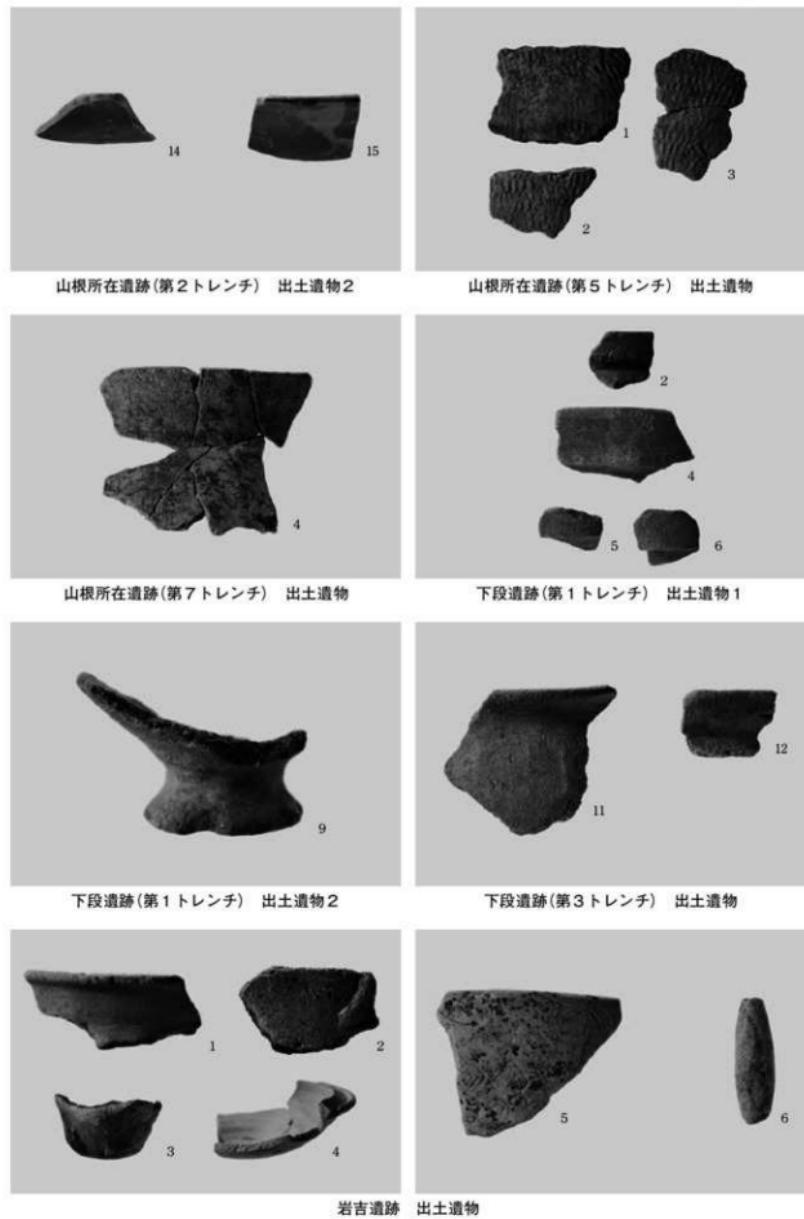
海士所在遺跡 出土遺物



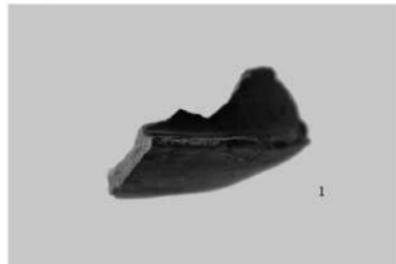
山根所在遺跡(第2トレンチ) 出土遺物 1



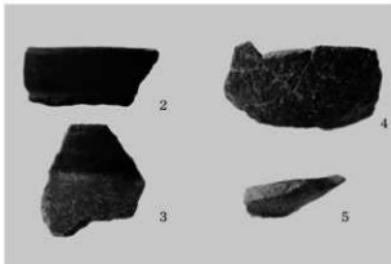
図版 29



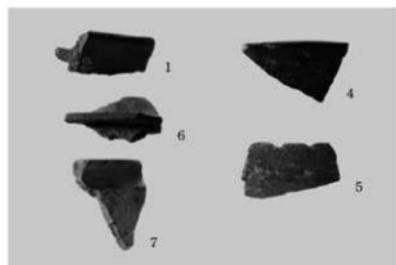
図版 30



山手森谷上分遺跡(第1トレンチ) 出土遺物



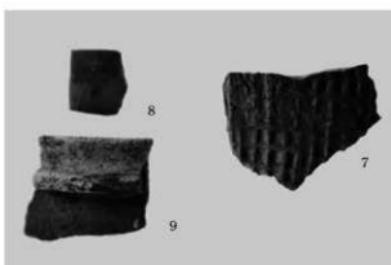
山手森谷上分遺跡(第2トレンチ) 出土遺物



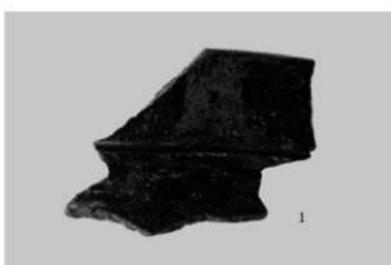
宮長竹ヶ鼻遺跡 出土遺物



大井家ノ下モ遺跡 出土遺物 1



大井家ノ下モ遺跡 出土遺物 2



高住井手添遺跡 出土遺物

報 告 書 抄 錄

ふりがな	へいせい31/れいわがんねんど	とっとりしないいせきはくつちょうさがいようほうこくしょ	
書名	平成31/令和元(2019)年度 烏取市内道路発掘調査概要報告書		
調書名			
卷次			
シリーズ名	鳥取市文化財調査報告書		
シリーズ番号	第29集		
編著者名	坂田邦彦 山田真雲 谷口恭子 神谷伊鶴 横山豊		
編集機関	鳥取市教育委員会		
所在地	〒680-8571 鳥取県鳥取市幸町71番地		
発行年月日	令和2年(2020)3月31日		
所 取 道 路 名	所 在 地	コ 一 F 市町村 道路	北 緯 東 経 調査期間 調査面積 (m ²) 調査原因
山手地ユノ谷上分道跡	鳥取市河原町山手	31201 10-0250	35°23'13" 134°12'42" 20180309~20170327 50.0 建物建設
片林立道跡	鳥取市河原町片山	31201 10-0253	35°24'43" 134°12'50" 20170509~20170515 17.6 鉄塔建設
帆城道跡	鳥取市桂見	31201 1-0252	35°30'13" 134°10'30" 20170523~20170526 6.0 個人住宅
鳴瀬宮板道跡	鳥取市青谷町鳴瀬	31201 18-0437	35°29'21" 133°58'57" 20170612 3.7 その他建物建設
古市道跡	鳥取市古市	31201 2-0059	35°29'19" 134°13'0" 20170614~20170616 16.2 宅地造成
布勢所在道路	鳥取市布勢	31201 1-0326	35°30'19" 134°10'34" 20170830~20180904 25.9 個人住宅
曳田小寺道跡	鳥取市河原町曳田	31201 10-0245	35°23'31" 134°11'35" 20190913~20170915 37.5 道路建設
青島第1道跡	鳥取市高住	31201 1-0398	35°30'2" 134°9'16" 20170926 16.0 その他開発
会下・郡家道跡	鳥取市気高町郡家	31201 15-0477	35°29'57" 134°2'16" 20171012~20171201 20180411~20180417 123.5 農業開発 個人開発
下味野所在道跡	鳥取市下味野		35°28'21" 134°11'59" 20171207~20171226 20.0 鉄塔建設
海士所在道路	鳥取市福部町海士		35°32'53" 134°15'58" 20180129~20180201 63.0 個人開発
山根所所在道跡	鳥取市青谷町山根	31201	35°28'19" 134°0'56" 20180207~20180327 20180403~20180417 20190123~20190129 186.0 農業開発
今本所所在道跡	鳥取市国府町町屋		35°28'6" 134°16'28" 20180420~20180502 24.0 水道開発
吉岡温泉町所在道路	鳥取市吉岡温泉町		35°29'17" 134°7'53" 20180524~20180531 11.0 道路建設
下段道跡	鳥取市下段	31201 3-0130	35°28'27" 134°10'1" 20180605~20180629 46.0 砂防事業
浜坂所在道路	鳥取市浜坂	31201 2-0004	35°31'45" 134°13'0" 20180709~20180713 52.8 学校建設
岩吉道跡	鳥取市千代水	31201 1-0315	35°30'29" 134°11'25" 20180724~20180731 14.0 宅地造成
山手森谷上分道跡	鳥取市河原町山手	31201 10-0196	35°23'39" 134°13'23" 20180730~20180817 53.5 グラウンド造成
宮長竹ノ鼻道跡	鳥取市市	31201 4-0070	35°28'26" 134°13'19" 20181001~20181026 47.5 宅地造成
大井川下モ道跡	鳥取市佐治町大井	31201 14-0031	35°20'14" 134°9'14" 20181113~20181121 10.0 道路建設
松原谷田道跡	鳥取市松原	31201 1-0102	35°29'34" 134°8'5" 20181205~20181207 6.0 鉄塔建設
高住井手添道跡	鳥取市高住	31201 1-0482	35°29'43" 134°9'46" 20190225~20190227 10.0 鉄塔建設
大燒道跡	鳥取市宮谷	31201 1-0261	35°29'11" 134°10'55" 20190313~20190325 24.0 道路建設

所 収 遺 路 名	種 别	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
山手地ユノ谷上分遺跡	散布地	古墳・古代	ピット、土坑	土師器、須恵器	試掘調査として実施
片山林立遺跡	散布地	縄文・平安	落とし穴、ピット	土師器、須恵器	試掘調査として実施
凱城遺跡	散布地	中世	ピット、土坑	土師器、須恵器	試掘調査として実施
鳴滝宮板遺跡	散布地				試掘調査として実施
古市遺跡	散布地			現代瓦、陶磁器	試掘調査として実施
布勢所在遺跡	散布地	中世	整地	土師器、須恵器、瓦	試掘調査として実施
曳田小寺遺跡	散布地			須恵器、陶磁器	試掘調査として実施
青島第1遺跡	散布地			縄文土器、鐵鉢	試掘調査として実施
会下・郡家遺跡	散布地	古代	ピット、土坑	弥生土器、土師器、須恵器	試掘調査として実施
下味野所在遺跡	散布地		ピット	土師器	試掘調査として実施
海士所在遺跡	散布地	古墳・古代			試掘調査として実施
山根所在遺跡	散布地	古代	ピット、土坑	土師器、須恵器、陶磁器	試掘調査として実施
今木山所在遺跡	散布地	近世	溝状遺構		試掘調査として実施
吉岡温泉町所在遺跡	散布地				試掘調査として実施
下段遺跡	散布地	古代	溝状遺構、ピット、土坑	土師器、須恵器、	試掘調査として実施
浜坂所在遺跡	散布地	古代	溝状遺構	土師器、陶磁器	試掘調査として実施
岩吉遺跡	散布地	近世	畦畔	土師器、須恵器、甕	試掘調査として実施
山手森谷上分遺跡	散布地	古墳	ピット、溝状遺構	土師器、須恵器	試掘調査として実施
宮長竹ヶ鼻遺跡	散布地	古代・中世	ピット	土師器、須恵器、土鍋	試掘調査として実施
大井家ノ下モ遺跡	散布地	弥生・古代	土坑、溝状遺構	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器	試掘調査として実施
松原谷田遺跡	散布地				試掘調査として実施
高住井手添遺跡	散布地			土師器	試掘調査として実施
大柄遺跡	散布地			須恵器	試掘調査として実施

平成31/令和元(2019)年度
鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書

発行 2020年(令和2)3月31日

編集 鳥取市教育委員会文化財課
鳥取県鳥取市幸町71番地
〒680-8571 電話(0857)30-8421

印刷 株式会社鳥取平版社
鳥取県鳥取市富安1丁目79番地
〒680-0845 電話(0857)24-7311
